博　多　151

— 博多遺跡群第197次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1269集

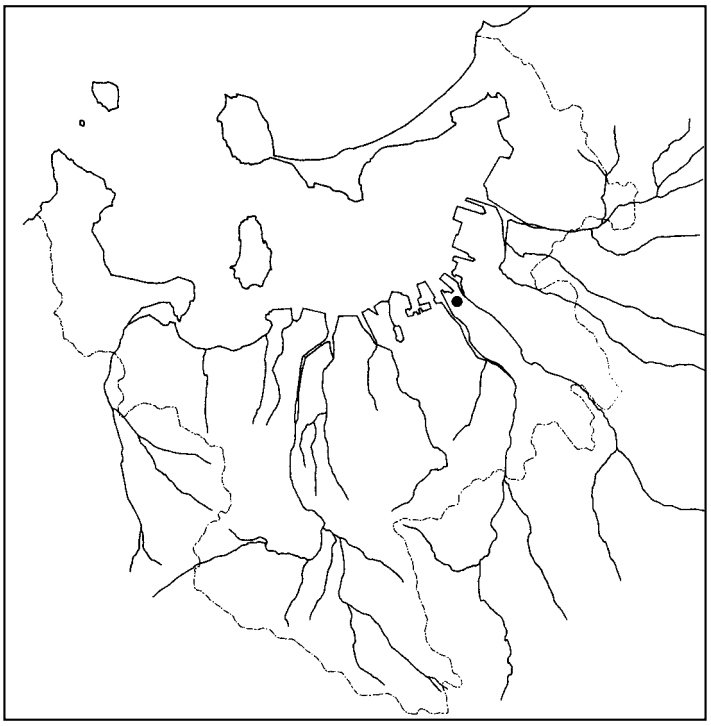
２０１５

福 岡 市 教 育 委 員 会

博　多　151

— 博多遺跡群第197次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1269集



遺跡略号　ＨＫＴ－197
調査番号　　１３２２

２０１５

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

現在、アジアにより一層開かれた活力のある国際都市を目指し、まちづくりを進めている福岡市は、古くからアジア大陸との交流を通じて発展してきました。本市ではこの交流を物語る文化財の保護に努めていますが、開発によりやむを得ず失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書は、博多区綱場町における事務所ビル建設に先立って行われた博多遺跡群第197次調査を報告するものです。調査の結果、古代から近世に至る遺構、遺物が発見され、当時の生活を復元するうえで多大な成果を上げることができました。本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまで、株式会社長府製作所様をはじめとする関係者の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会

教育長　酒　井　龍　彦

例　言

1．本書は福岡市博多区綱場町151番地内における事務所ビル建設に先立ち、福岡市文化財部埋蔵文化財調査課が平成25年8月19日から平成26年2月12日にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第197次調査の報告である。

2．検出した遺構については、石積土坑はSF、集石遺構はSX、井戸はSE、溝はSD、土坑はSK、ピットはSPとし、一括して通し番号を付した。

3．本書に掲載した遺構の実測は担当の井上繭子、吉田大輔、佐々木蘭貞が、写真撮影は井上、吉田が、製図は相原聡子、谷直子、井上が行った。

4．本書に掲載した遺物の実測は相原聡子、谷直子、中尾祐太、井上が、写真撮影は井上が、製図は相原、谷、井上が行った。

5．本書の執筆、編集は井上が行った。

6．本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので活用されたい。

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	197次	調査略号	HKT-197
調査番号	1322	分布地図図幅名	049天神	遺跡登録番号	0121
申請地面積	1,427.78㎡	調査対象面積	約1,000㎡	調査面積	745㎡
調査期間	平成25（2013）年8月19日～平成26（2014）年2月12日			事前審査番号	25-2-160
調査地	福岡市博多区綱場町151番地				

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 2
　1．調査の経過 …… 2
　2．調査の概要 …… 4
　3．Ⅰ区の調査 …… 4
　　（1）第１面の遺構と遺物 …… 4
　　①石積土坑 …… 4
　　②集石遺構 …… 5
　　③土坑 …… 5
　　（2）第２面の遺構と遺物 …… 8
　　①土坑、溝 …… 8
　　（3）第３面の遺構と遺物 …… 20
　　①井戸 …… 20
　　②集石遺構、土坑 …… 21
　4．Ⅱ区の調査 …… 23
　　（1）第１面の遺構と遺物 …… 23
　　①集石遺構 …… 23
　　②土師器集積遺構 …… 26
　　③井戸 …… 33
　　④土坑・ピット …… 35
　　（2）第２面の遺構と遺物 …… 39
　　①石積土坑 …… 39
　　②井戸 …… 40
　　③溝、集積遺構、土坑 …… 41
　5．Ⅲ区の調査 …… 43
　　（1）第１面の遺構と遺物 …… 43
　　①石積土坑 …… 43
　　②集積遺構 …… 48
　　③柱列 …… 49
　　④土坑 …… 49
　　（2）第２面の遺構と遺物 …… 50
　　①井戸 …… 50
　　②土坑・ピット …… 50
　6．Ⅳ区の調査 …… 55
　　（1）遺構と遺物 …… 55
　7．トレンチ調査 …… 55
　8．その他の出土遺物 …… 56
　　（1）陶磁器 …… 56
　　（2）その他の遺物 …… 56
　9．まとめ …… 57

挿図目次

第１図　調査地点の位置（1/1000） …… 3
第２図　調査区配置図（1/400） …… 3
第３図　Ⅰ区第１面遺構配置図（1/80） …… 6
第４図　Ⅰ区第２面遺構配置図（1/80） …… 7
第５図　Ⅰ区第３面遺構配置図（1/80） …… 8
第６図　Ⅰ区調査区土層実測図（1/60） …… 9
第７図　石積土坑実測図（1/20・1/40） …… 10
第８図　石積土坑出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 11
第９図　SX14・SK10遺構実測図（1/4） …… 12
第10図　SF15・SX14・SK10出土遺物実測図（1/3） …… 13
第11図　SK10出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 14
第12図　土坑・溝実測図（1/20・1/40） …… 16
第13図　SK104出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 17
第14図　土坑・溝出土遺物実測図（1/3） …… 18
第15図　井戸実測図（1/60） …… 19
第16図　SE111出土遺物実測図（1/3・1/4） …… 20
第17図　集石遺構・土坑実測図（1/4） …… 21
第18図　井戸・集石遺構・土坑出土遺物実測図（1/3） …… 22
第19図　Ⅱ区第１面遺構配置図（1/80） …… 24

第20図　Ⅱ区第２面遺構配置図（1/80）…… 25
第21図　Ⅱ区調査区土層実測図（1/60）…… 26
第22図　集石遺構実測図（1/40）…… 27
第23図　集石遺構出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 28
第24図　土師器坏集積遺構実測図（1/20）…… 29
第25図　土師器坏集積遺構出土遺物実測図（1/3）…… 30
第26図　土師器坏集積遺構出土遺物実測図（2）（1/3）…… 31
第27図　土師器坏集積遺構出土遺物実測図（3）（1/3）…… 32
第28図　SE176実測図（1/60）…… 33
第29図　SE176出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 34
第30図　土坑・ピット及び出土遺物実測図（1/20・1/40・1/3）…… 35
第31図　SF226遺構及び出土遺物実測図（1/40・1/3）…… 36
第32図　井戸実測図（1/60）…… 37
第33図　井戸出土遺物実測図（1/3）…… 38
第34図　溝・土坑実測図（1/20・1/40・1/80）…… 39
第35図　溝・土坑出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 40
第36図　Ⅲ区遺構配置図（1/80）…… 42
第37図　Ⅲ区土層実測図（1/60）…… 43
第38図　石積土坑・集積遺構実測図（1/40）…… 44
第39図　石積土坑・集積遺構出土遺物実測図（1/3）…… 45
第40図　SK373出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 46
第41図　柱列・土坑実測図（1/60・1/40）…… 47
第42図　柱列・土坑出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 48
第43図　井戸実測図（1/60）…… 50
第44図　土坑・ピット実測図（1/20・1/40）…… 51
第45図　井戸・土坑出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 52
第46図　SK344出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 53
第47図　Ⅳ区遺構及び出土遺物実測図（1/80・1/20・1/3・1/4）…… 55
第48図　陶磁器実測図（1/3）…… 56
第49図　その他の遺物実測図（1/3・1/4）…… 57

図版目次

図版１　Ⅰ区第１面全景（北東から）
Ⅰ区第２面全景（北東から）
Ⅰ区第３面全景（北東から）
SF05（南東から）
SF07（西から）
図版２　SF15（北東から）
SX14（北東から）
SK104（東から）
SK29（北西から）
SK36（北西から）
SK31（北西から）
SE111（北西から）
SE163湧水点（北から）
図版３　SX152（北西から）
SK118（北西から）
SK120（北西から）
SK168（南東から）
SK168焼土下面（南東から）
SK168下層（南東から）
SK164上面（北西から）
SK164下面（北西から）
図版４　Ⅱ区第１面全景（北東から）
Ⅱ区第２面全景（北東から）
SX222（南西から）
SX236（北西から）
SF226、SX236（南東から）
SK171上面（北東から）
SK171断面（北東から）
SK177（北東から）
図版５　SK178（北西から）
SK188（南東から）
SE176（北から）
SK190（北西から）
SK192（南西から）
SE176、SE243（北から）
SE243井筒（南東から）
図版５　SE187（北東から）
SE272（南東から）
SE224（北東から）
SF226床面出土遺物（南西から）
SF226床面出土遺物２（南西から）
図版６　SD179（北西から）
SD179土層（東から）
SK244（北東から）
Ⅲ区第１面全景（北東から）
Ⅲ区第２面全景（北東から）
SF342（北西から）
SF347（西から）
SK434（北から）
図版７　SK346（北から）
SB01（北西から）
SK370礫出土状況（西から）
SK370完掘状況（西から）
SK373　１面遺物出土状況（南から）
SK373　２面遺物出土状況（北から）
SK373土層（西から）
SK373完掘状況（北西から）
図版８　SE495（北から）
SE554（北から）
SK494（北東から）
SK507（西から）
SK434（北西から）
SK528下面遺物出土状況（北東から）
SP539（北東から）
SK552（南東から）
図版９　Ⅳ区全景（北東から）
SE556（東から）
トレンチ１（西から）
トレンチ２（北から）
トレンチ３（東から）
図版10　遺物写真１
図版11　遺物写真２

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

2013（平成25）年５月９日に株式会社長府製作所より事務所ビル建築にかかる埋蔵文化財の有無についての照会文書が福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課に提出された。申請地は博多遺跡群に所在し、過去に試掘調査を行った結果遺跡の存在が確認されていることから、建築物の基礎構造によっては発掘調査が必要なこと等について、埋蔵文化財審査課と事業主との間で協議を取り交わした。その結果、予定建築物は申請地敷地の全域に及ぶことから、申請地内で遺跡が残存している範囲すべてにおいて記録保存のための発掘調査が必要となった。その後事業主と発掘調査期間、予算、工程について協議を行い、発掘調査のための委託契約を締結した。調査は2013（平成25）年８月19日に着手し、2014（平成26）年２月12日に終了した。

２．調査の組織

調査委託　株式会社長府製作所

調査主体　福岡市教育委員会

（発掘調査：平成25年度・資料整理：平成26年度）

調査総括　文化財部埋蔵文化財調査課　課長　宮井善朗（25年度）

常松幹雄（26年度）

同課調査第２係長　榎本義嗣　（25・26年度）

庶　　務　文化財部埋蔵文化財審査課　管理係長　和田安之（25年度）

内山広司（26年度）

同管理係　川村啓子（25・26年度）

事前審査　事前審査係長　加藤良彦（25年度）

佐藤一郎（26年度）

同事前審査係主任文化財主事　佐藤一郎（25年度）

池田祐司（26年度）

事前審査係　森本幹彦（25年度）

板倉有大（26年度）

調査担当　文化財部埋蔵文化財調査課

調査第２係文化財主事　井上繭子

（26年度：埋蔵文化財審査課空港協議等担当主査）

吉田大輔

埋蔵文化財調査員　佐々木蘭貞

発掘作業　上原尚子　岡田伸司　小野千佳　香月隆　兼田ミヤ子　辛川容子　工藤幸男　後藤勝年

竹原吉秋　塚本よし子　豊丸秀仁　野口リウ子　花田則子　花田昌代　松下由希子

光安晶子　宮元亜希世　諸泉良子　安高邦晴　山田輝人

堀出幸（福岡大学）　中原彰久　山脇拓昌（別府大学）

整理補助　相原聡子　谷直子

整理作業　有島美江　林由紀子　松尾トシエ

Ⅱ．遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、福岡平野北側の博多湾岸に位置し、那珂川と御笠川の河口に挟まれた三角州平野上に形成された遺跡群である。博多遺跡群の立地する砂丘地形は南から「博多浜」と「息浜（おきのはま）」の二つに分けられ、「博多浜」はさらに二つの砂丘から形成される。現在の博多の町は、この砂丘地形上にさらに２～５ｍほど盛土されて形成されているものの、現状でも埋没した旧地形の形状をよく反映している。

今回の博多遺跡群第197次調査地点は、博多遺跡群の北側、息浜の頂部南寄りに位置する。息浜は那珂郡に属し、鎌倉時代の「蒙古襲来絵詞」にその名が初見される。博多湾沿岸の砂洲が発達し陸地化した博多遺跡群の中では新興地であり、14世紀頃から居住域が展開していく。1316（正和５）年には月堂宗規が禅宗寺院妙楽寺を建立した。1333（元弘３）年８月に、大友貞宗が鎮西探題攻略の功を認められ恩賞として息浜を与えられる。1350（貞和６）年３月には中国船が息浜津に着岸するという記事が見られ、息浜が対外交渉の拠点の一つとなっていることが伺える。また、妙楽寺は1452（宝徳３）年の遣明船派遣の際に博多における根拠地となっている。この後、博多全体は大友氏により支配されるが、16世紀後半には相次ぐ戦乱により焼失、復興を繰り返してきた。1587（天正15）年には、豊臣秀吉が島津氏平定後、戦乱で疲弊した博多の復興を命ずる。これが太閤町割りである。博多はこの前後、島井宗室、神屋宗湛などの豪商が活躍し商都博多として発展を続けてゆく。

Ⅲ．調査の記録

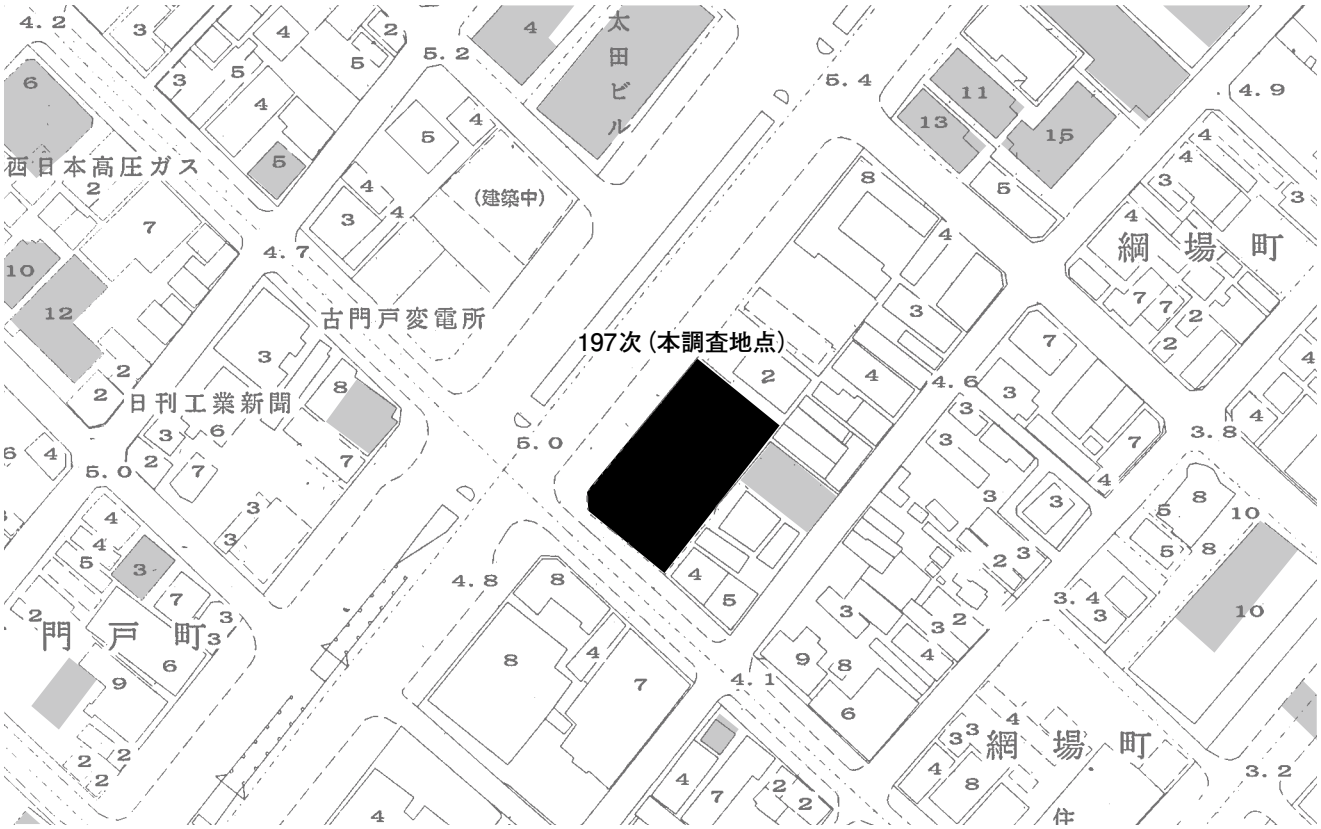
１．調査の経過

発掘調査の対象範囲は、予定建造物の地下への影響が及ぶ敷地全域のうち、過去の試掘調査及び既存建物の範囲等から遺構が存在していると推定される約1,000m^2を対象とした。

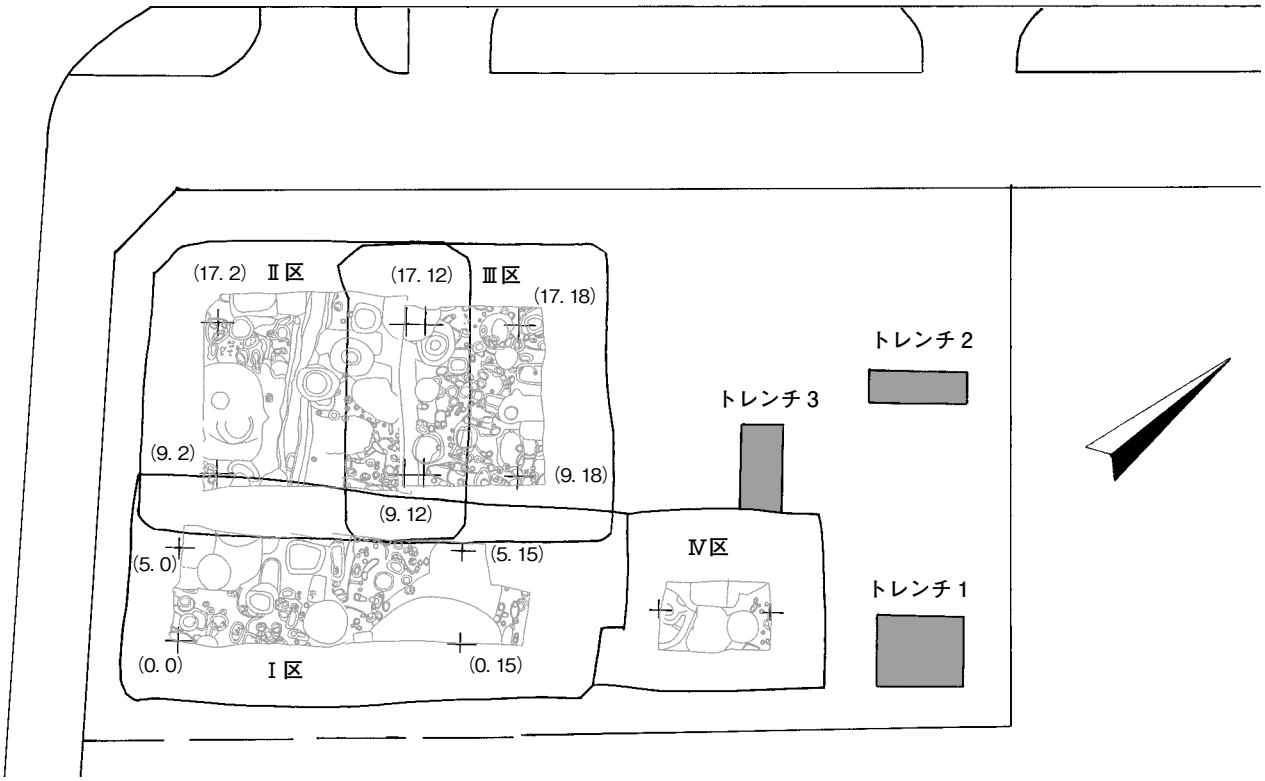
発掘調査に着手するに当たり、その工程や方法、遺跡の内容について、平成25年８月９日に申請者の主催により地元住民を対象とした埋蔵文化財発掘調査に関する事前説明会を行った。

盛土の除去及び土留め工事が事前に行われないため、残土の処理上調査区を４か所に分けて順に発掘調査を行うこと、また、遺構面は現地表下２～３ｍに及ぶため危険防止上、調査区壁は十分な傾斜角度をつけて掘削を行うこととした。

発掘調査は、平成25年８月19日に開始した。Ⅰ区からⅣ区の順番で、重機による盛土除去、人力での遺構検出、掘削、図面作成及び写真撮影を行っていった。Ⅳ区は変則的な範囲であり、遺跡の残存状況も不明瞭であったためトレンチを入れながら範囲を設定して調査を行った。また、Ⅲ区の調査が終了する平成26年１月28日に町内の住民を対象とした現地説明会を行った。平日ではあったが約20名の見学者が訪れ、発掘調査の様子や出土した遺物を目にしていただくことができた。すべての調査が終了したのち埋戻し、機材の撤収を行い、平成26年２月12日に作業を終了した。



第１図　調査地点の位置（1／1000）



第２図　調査区配置図（1／400）

２．調査の概要

上述の通り、今回の発掘調査は敷地全面を対象とするものであったが、その存在が確認されているのは平成７年度に試掘調査が行われた結果判明した、主に敷地南西側半分である。敷地北東側半分については、平成15年度の試掘調査で大部分はなしとされていたが、未試掘部分であった敷地の東側、北側隅については今回の調査対象範囲として発掘調査を行うことになっている。

Ⅰ区は敷地南側1/4範囲を設定した。平成７年度の試掘調査によると、現地表下約260cm、280cmの２面で中世以前の遺構面が確認されているため、それを目安に重機による表土掘削を行った。第１面として設定したのは現地表下約200cmの主に茶褐色包含層上面である。試掘調査で第１面としている層より60cmほど上であるが、石積土坑、井戸、土坑が検出された。第２面は第１面とした茶褐色包含層を除去した面で、一部の砂丘面及び砂丘面直上の暗褐色包含層上面である。なお、調査区北東半分は砂丘面となる。集石遺構、土坑、柱穴、また14世紀前後の墨書土師器坏の集積遺構が検出されている。第３面は、暗褐色包含層を除去した砂丘面である。土坑、集石遺構などを検出したが、上面からの掘り残しが多い。また、数基切り合った井戸が調査区の南側と北側で検出された。

Ⅰ区の第１面で検出された遺構が主に近世以降であったため、Ⅱ区ではⅠ区第２面に相当する面を第１面として設定した。砂丘面及び砂丘面直上の暗褐色包含層上面である。17世紀代の石積土坑、集石遺構、井戸の他、14～15世紀の溝、土師器の集積遺構が検出された。暗褐色包含層を除去した砂丘面である第２面は、第１面の掘り残しである14～15世紀頃の２基切り合った井戸、溝、柱穴、土坑が検出された。

Ⅲ区第１面はⅡ区と同様、砂丘面上面の暗褐色包含層と一部の砂丘面である。17世紀以降の石積土坑、土師皿や国産陶器の廃棄土坑、井戸の他、土坑、14～15世紀の土師器の集積遺構、柱穴が検出された。砂丘面である第２面は第１面の掘り残しが多いが、井戸、土坑、柱穴、土師器の集積遺構が確認された。14～16世紀頃である。

Ⅳ区は、既往の試掘調査や既存建物の範囲外で遺構の存在が不明確で変則的な範囲に設定した調査区である。Ⅰ区の北東側に隣接して設定した。深くまで既存建物の攪乱が及び砂丘面が残るのみであった。井戸、ピットが確認された。

その他、敷地北端及び東側、Ⅳ区の北側にトレンチを設定したが、深い攪乱で砂丘が削平されていたり大きな既存建物基礎が残存していたりして、敷地北側四半分には遺構の存在は確認されなかった。

以上の知見から、敷地の南東側半分は、地山である砂丘面から近世までの包含層が残存していたが、敷地北西側半分は旧来の想定通り既存建物により攪乱が砂丘面まで及んでいることが判明した。

出土遺物は土師器坏、皿が多く、他に瓦、国産陶磁器、輸入陶磁器、土製品などが見られる。

３．Ⅰ区の調査

（１）第１面の遺構と遺物

①石積土坑

SF05（第７図） 調査区の南寄りで検出した。平面ほぼ正方形を呈し、残存高さは45cmを測る。南西の面は50cm×30cm程度の大きめの平石を立て、その他の壁面は径20cm以下の礫を積み上げる。４段程度残存する。内法は75cm×90cmを測る。16世紀末はさかのぼらないであろう。

出土遺物（第８図１～４） １、２は青磁碗である。口縁部から胴部にかけて不規則な沈線が巡る。２は鎬蓮弁文が施されている。３は陶器甕の口縁部。４は土師器の鉢の脚付き底部である。１～３は石積み裏込めから、４は土壙掘方から出土した。

SF07（第７図）　調査区面西寄りで検出した。近現代掘り込みに隣接していたため、当初は攪乱の一部と思われたが、掘り進むと石積が検出された。SF05よりも大型である。平面内法は95cm×135cmの長方形を呈し、残存高さは深いところで75cmである。SF05で用いられている石よりも大きめの30cm×60cm以下の切り石が３段程残存する。17世紀以降であろう。

出土遺物（第８図５～20）　５は陶器の擂鉢である。６～８は瓦質の火舎。９～16は土師器小皿。口径6.9～9.4cm、器高1.5～1.8cm、底径4.7～7.3cmを測る。すべて底部は糸切痕が残る。17は土師器灯明皿。口径は6.3cm、器高4.8cm、皿部分の底径8.0cmを測る。皿底部は糸切痕が残る。18は軒丸瓦。瓦当面には三巴文の周囲に珠文を配する。19は陶器大甕。内外面に叩き目を施し、赤褐色胎土に釉がかかる。

SF15（第７図）　調査区第１面南端付近で検出した土壙である。石の他、土鍋を打ち欠いて土壙の上端に敷き並べている。平面は約50cm四方のほぼ正方形を呈し、土壙の深さは23cmを測る。床面には特に敷設遺構や遺物は見られない。16世紀末以降か。

出土遺物（第10図１）　１は土壙の上端に敷かれていた土鍋である。底部が欠損しているがほぼ完形。

②集石遺構

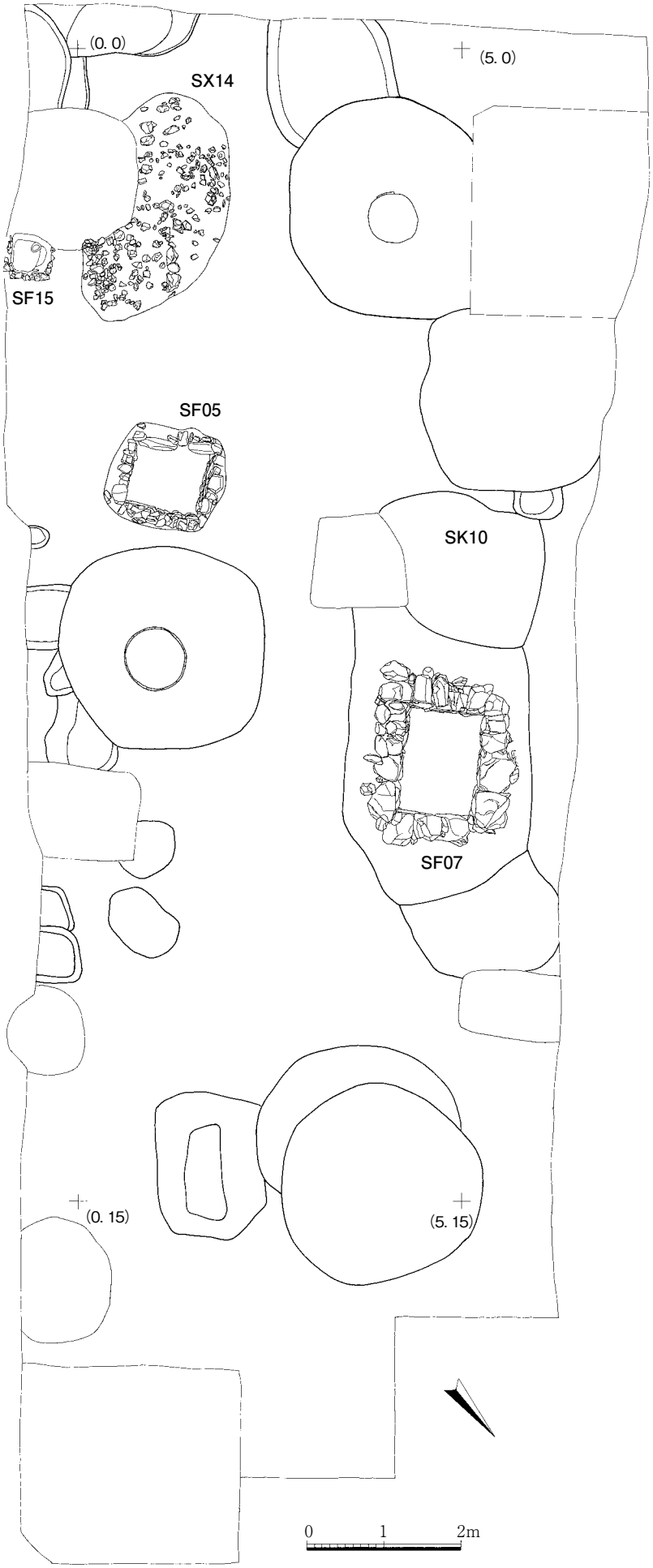
SX14（第９図）　調査区南端付近に位置し、近世以降の井戸に切られている。長軸3.1m、短軸1.7mの平面楕円形を呈する。長さ30cm以下の礫が集中しているが、一部積まれた状態で並んでいる箇所があり、石基礎か石積土壙が崩落した可能性もある。15世紀後半以降。

出土遺物（第10図２～９）　２は碁笥底の青花皿である。内面に菊花文、外面に蕉葉文が描かれる。３は青花皿である。高台畳付は露胎である。高台内部に「口冨」の銘が見られる。４は白磁皿。高台畳付は露胎である。５は瓦玉。白磁碗の底部を打ち欠いて成形したもの。６は青磁碗。口縁部に５か所刻み目を入れたのち、外面に縦に各々沈線を施す。７は東播系の擂鉢。８は土師器坏。口径10.5cm、器高3.0cm、底径4.1cm。糸切り離し底部。９は瓦質土器の茶釜か。頸部に巴文のスタンプを、胴部に突帯を巡らす。

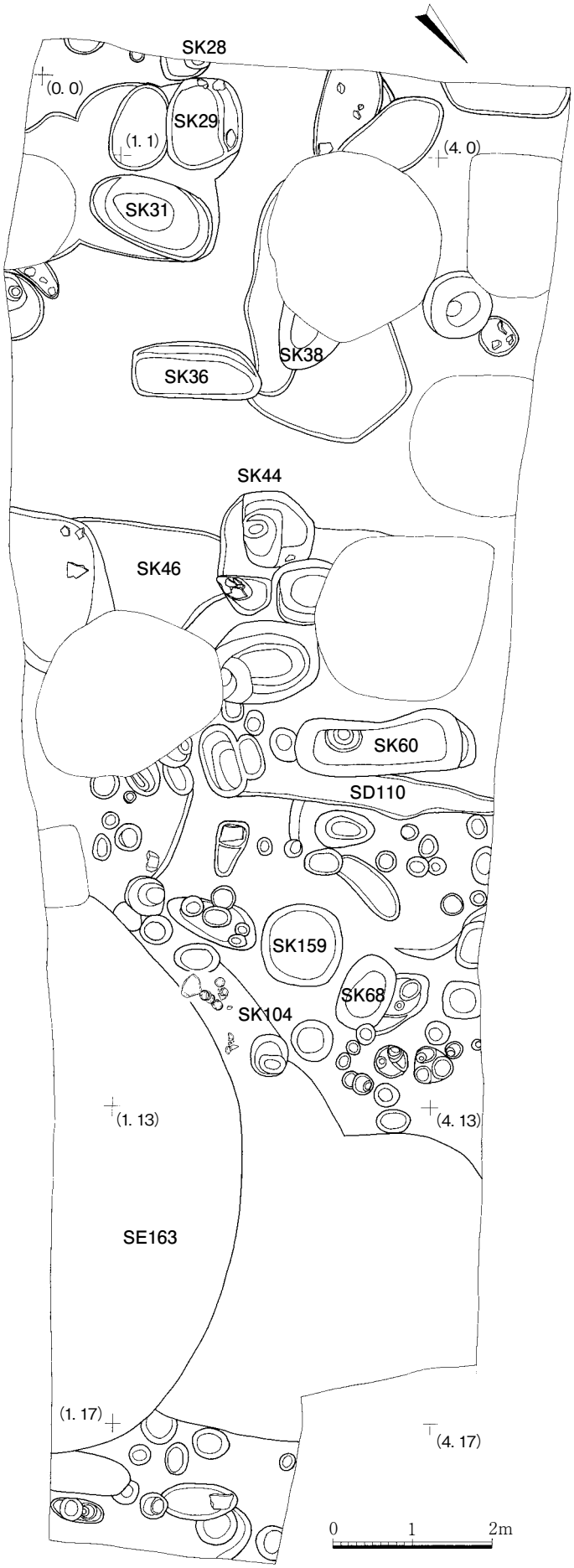
③土坑

SK10（第９図）　SF07の東側に接する。掘り込みは砂丘面までに接する。1.1m四方の平面隅丸方形で深さ70cmの土坑である。陶磁器碗や皿、土師器坏、小皿、擂鉢、片口鉢、盤など食器や調理器具を中心とする器物が多量に投棄されていた。17世紀後半頃か。

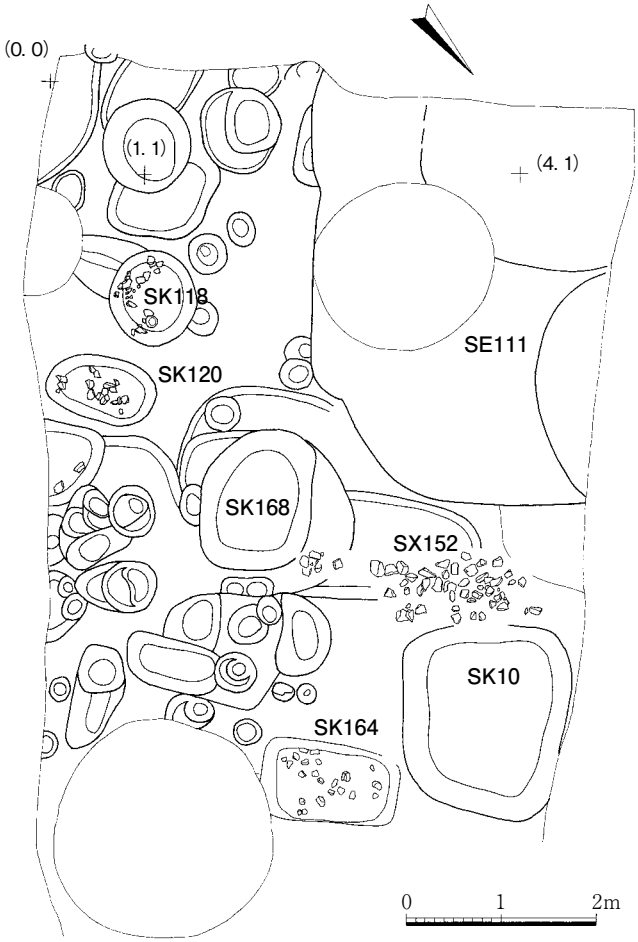
出土遺物（第10図10～26、第11図～９）　10、11は青磁碗である。畳付を除き全面に青灰色透明釉がかかる。見込みに花文が押される。11は畳付以外全面青灰色透明釉がかかる。見込みには省略化された花文が押される。12、13は白磁皿。12は菊花皿である。13は小皿。高台ないし高台内部は露胎、それ以外は透明釉がかかる。14は胴部を６カ所面取り加工し平面が六角形を呈する小鉢である。高台は４カ所削りだして畳付とする。高台部分は露胎、その他透明釉がかけられる。15は陶器皿。灰褐色胎土に透明釉がかけられるが、高台ないし高台内部は露胎となる。見込みは蛇の目状に釉を掻き取る。16は白磁の小鉢。灰白色胎土に透明釉が全面にかかる。17は土師器坏。復元口径15.0cm、器高2.0cm、底径10.2cm。糸切り離し底部。18～24は土師器小皿。口径6.7～9.8cm、器高1.3～1.7cm、底径5.2～7.8cm。19、21、22は煤が付着しており、灯明皿として使用されたと思われる。25は片口の陶器擂鉢。26は片口鉢。内面及び外面上半部まで釉がかけられ、胴部外面下半部



第３図　Ⅰ区第１面遺構配置図（1／80）



第４図　Ⅰ区第２面遺構配置図（1／80）



第５図　Ⅰ区第３面遺構配置図（1／80）

及び高台は露胎となる。第11図１は陶器擂鉢。２は三足の脚付き盤。３～６は土製の鍋。３、４は把手が２カ所つく器形。６は土製の鉢。７は軒丸瓦。細めの三巴文の周囲に珠文を配する。８、９は軒平瓦。いずれも瓦当面に唐草文を配する。

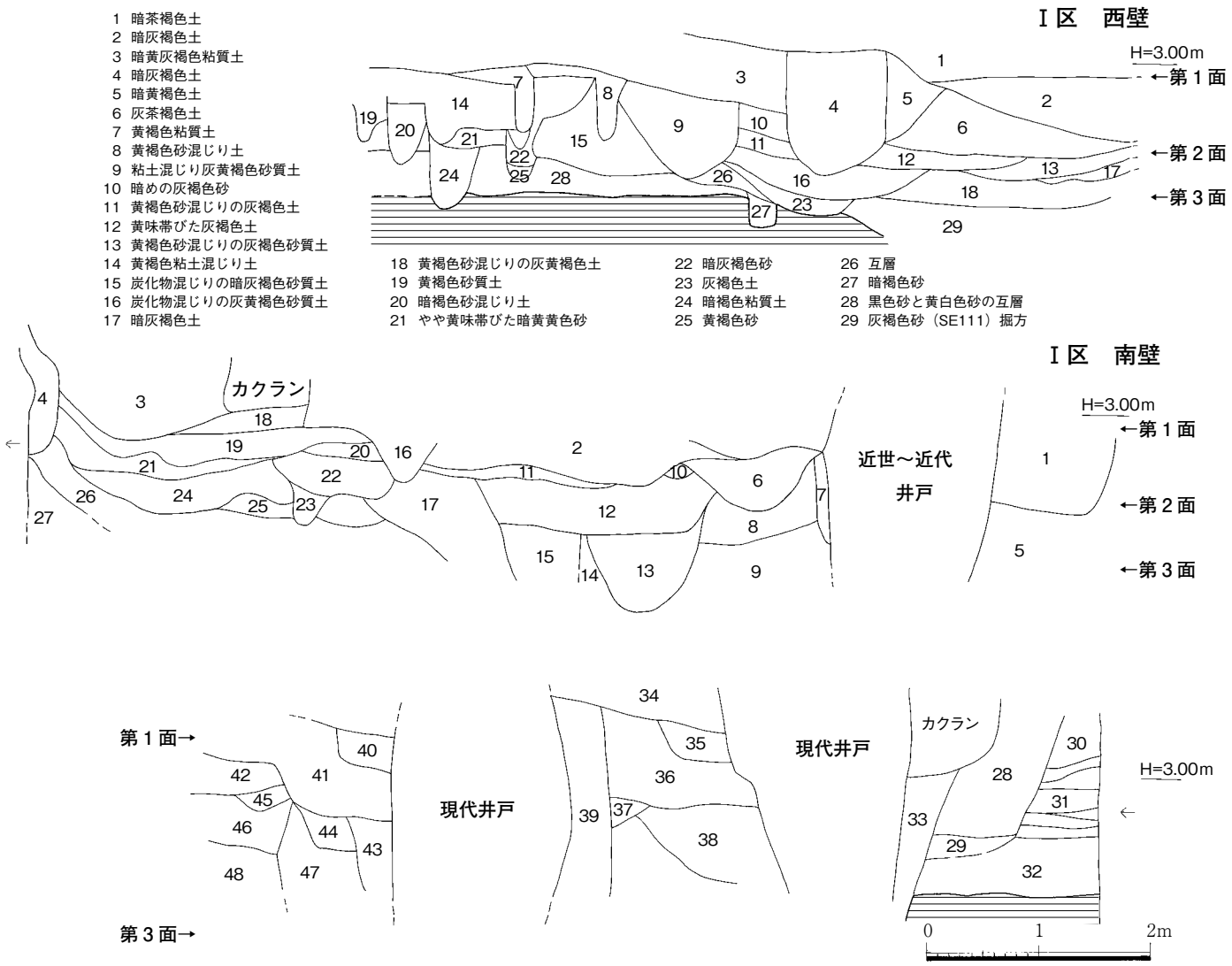
（２）第２面の遺構と遺物

①土坑、溝

SK104（第12図）　調査区北東寄りの、SE163付近に位置する。第１面包含層掘削中に検出された。掘方は確認されなかった。柱根石と思われる石の脇で数枚ずつ重なった状態の土師器坏が検出された。調査の段階では確認できなかったが、土師皿を取り上げて洗浄した段階で、外面底部に墨書が施されているのが判明した。判読できた文字は以下のとおりである。

「杏庵」２枚、「土地」２枚、「火徳」２枚、「普？庵？」２枚、「亡者」１枚、「諸祖師」１枚、「祖師」１枚、「諸？佛？」１枚、「本□」１枚。

すべてを判読できたわけではないが、同じ文字の組み合わせが少なくとも４組ある。おそらく２枚一組だろう。14世紀前後か。



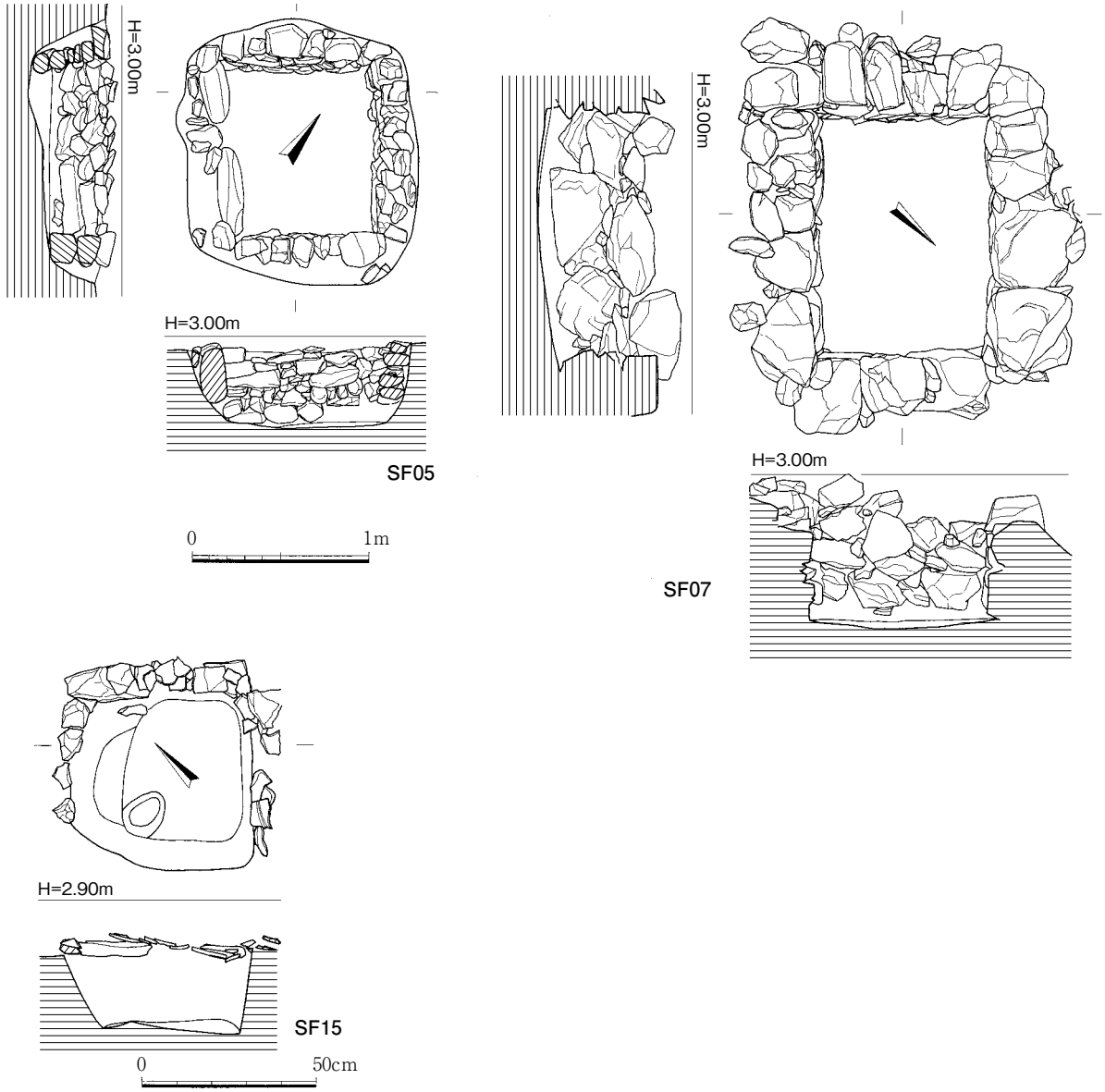
1 暗茶褐色土
2 暗灰褐色土
3 暗黄灰褐色粘質土
4 暗灰褐色土
5 暗黄褐色土
6 灰茶褐色土
7 黄褐色粘質土
8 黄褐色砂混じり土
9 粘土混じり灰黄褐色砂質土
10 暗めの灰褐色砂
11 黄褐色砂混じりの灰褐色土
12 黄味帯びた灰褐色土
13 黄褐色砂混じりの灰褐色砂質土
14 黄褐色粘土混じり土
15 炭化物混じりの暗灰褐色砂質土
16 炭化物混じりの灰黄褐色砂質土
17 暗灰褐色土
18 黄褐色砂混じりの灰黄褐色土
19 黄褐色砂質土
20 暗褐色砂混じり土
21 やや黄味帯びた暗黄黄色砂
22 暗灰褐色砂
23 灰褐色土
24 暗褐色粘質土
25 黄褐色砂
26 互層
27 暗褐色砂
28 黒色砂と黄白色砂の互層
29 灰褐色砂（SE111）掘方

1 炭化物、粘土混じりの黄灰褐色土
2 灰褐色粘質土
3 炭化物混じりの灰褐色砂質土
4 白み帯びた灰褐色砂質土
5 黄白色砂と黒色砂互層
6 粘土混じりの明るめの灰褐色砂質土
7 粘土混じりの灰色土
8 暗灰褐色砂と黄色砂混じり土
9 黄白色砂と黒色砂互層
10 灰褐色粘質土
11 鉄分混じり灰色砂
12 粘土混じりの黄味帯びた灰褐色砂質土
13 炭化物混じりの暗めの灰褐色砂質土
14 黒色砂と黄色砂の互層
15 鉄分混じりの灰褐色砂
16 粘土多く混じる灰色砂質土
17 鉄分、炭化物混じりの灰褐色砂質土
18 黄灰褐色粗砂
19 灰黄褐色粗砂
20 鉄分混じりの灰色砂
21 黄灰褐色砂質土
22 黒褐色砂質土
23 炭化物、鉄分混じりの灰褐色砂
24 灰褐色砂質土
25 粘土混じりの灰褐色土
26 鉄分混じりの灰褐色砂
27 暗灰褐色土
28 暗茶灰褐色砂質土
29 暗茶灰褐色土
30 灰褐色土
31 粘質土と砂質土の互層
32 黄味帯びた灰褐色砂層
33 灰褐色砂質土（井戸掘方）
34 灰茶褐色土
35 黒褐色炭化層
36 黄味帯びた灰褐色土
37 黄褐色砂層
38 粘土混じりの灰黄褐色土
39 灰褐色土（井戸掘方）
40 灰黄褐色尾
41 暗黄褐色粘土混じり土
42 黄褐色粘土混じり土
43 黄褐色土混じりの灰褐色土
44 粘土混じりの灰黄褐色砂質土
45 灰褐色砂質土
46 炭化物混じりの黒褐色土
47 暗灰褐色土（井戸掘方）
48 黄白色砂層

第６図　Ⅰ区調査区土層実測図（1/60）

出土遺物（第13図１～21）　１～14は墨書が確認された土師器坏である。口径11.3～12.8cm、器高2.0～3.0cm、底径7.0～9.0cmで、糸切り離し底部である。記載されている墨書文字は上記のとおりである。15～17は土師器坏。口径12.0～13.4cm、器高2.4～2.7cm、底径8.4～10.0cmで、15、16とも糸切り離し底部である。18は土師器小皿。口径6.8cm、器高1.3cm、底径4.6cmの糸切り離し底部。19、20は平瓦。21は丸瓦。

SK28（第12図）　調査区西端に位置する。幅30cmで柱痕がある。



第７図　石積土坑実測図（1/20・1/40）

出土遺物（第14図１）　１は土師器小皿。口径6.0cm、器高1.4cm、底径3.9cm。糸切り離し底部である。

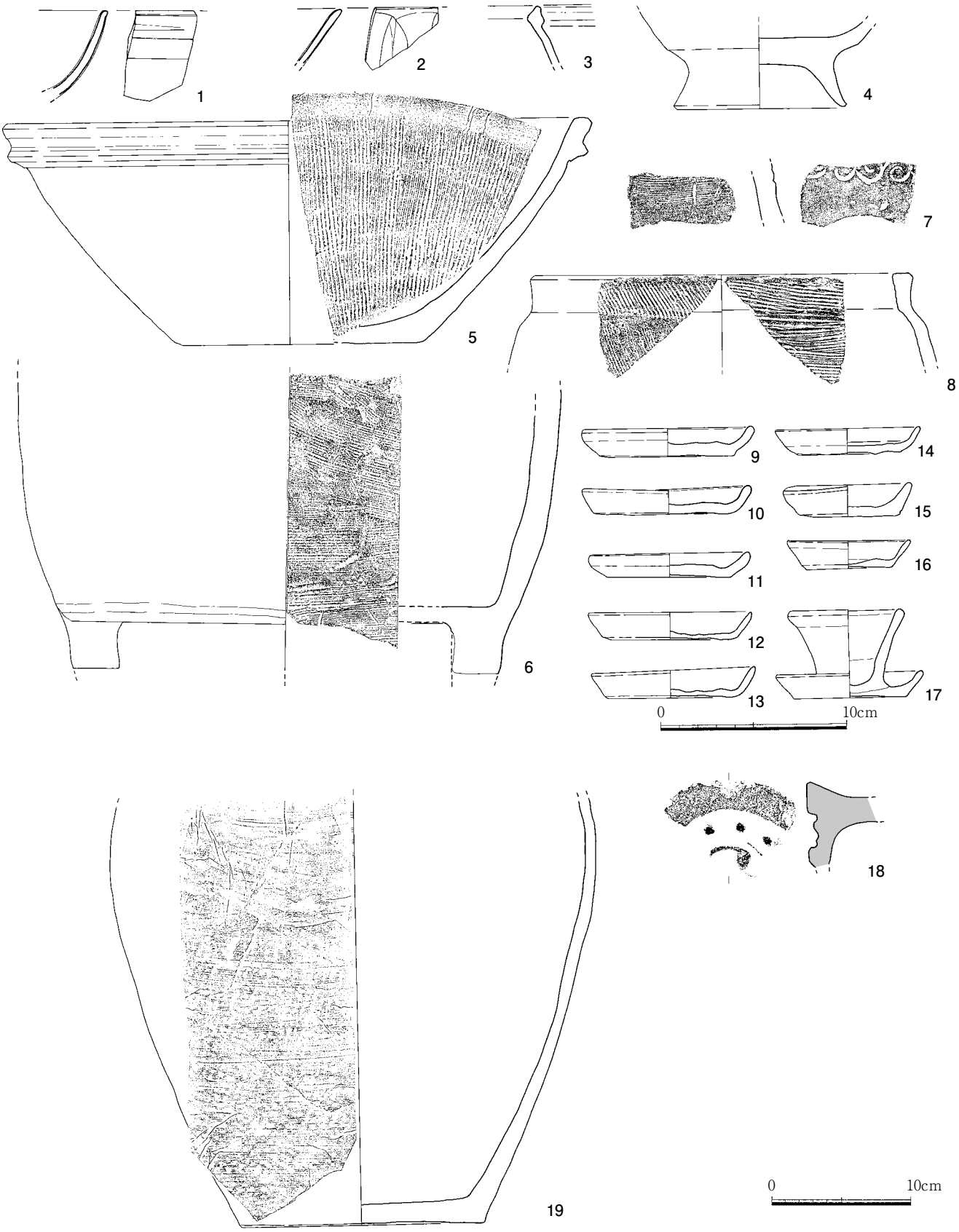
SK29（第12図）　調査区西端付近に位置する。長軸115cm、短軸95cmの平面楕円形、深さ25cmを呈する。

出土遺物（第14図２）　２は土師器小皿。口径7.8cm、器高1.6cm、底径5.7cm。糸切り離し底部である。

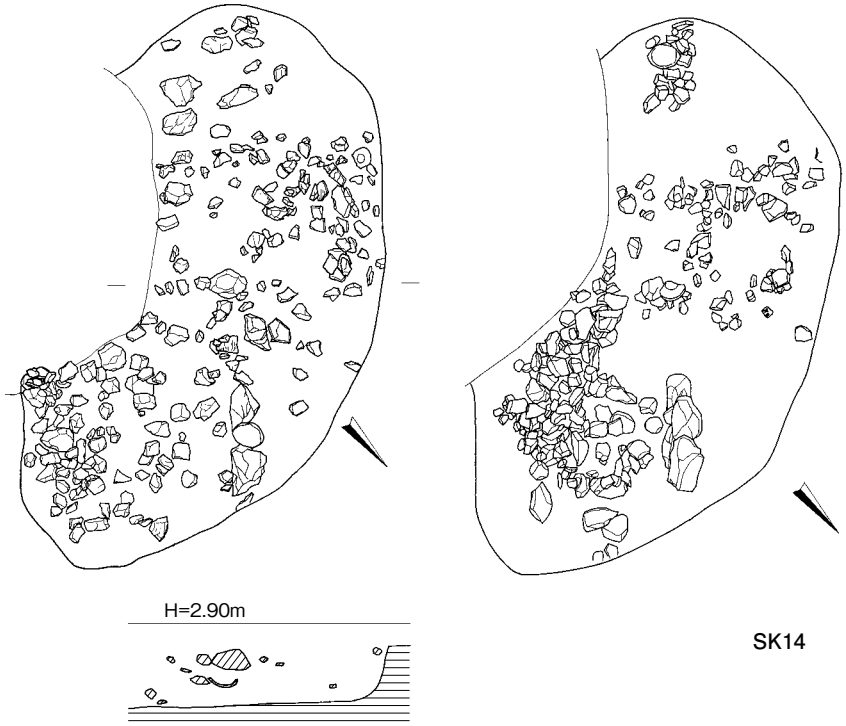
SK31（第12図）　調査区南端に位置する。長軸160cm、短軸90cmの平面楕円形、深さ35cmを呈する。

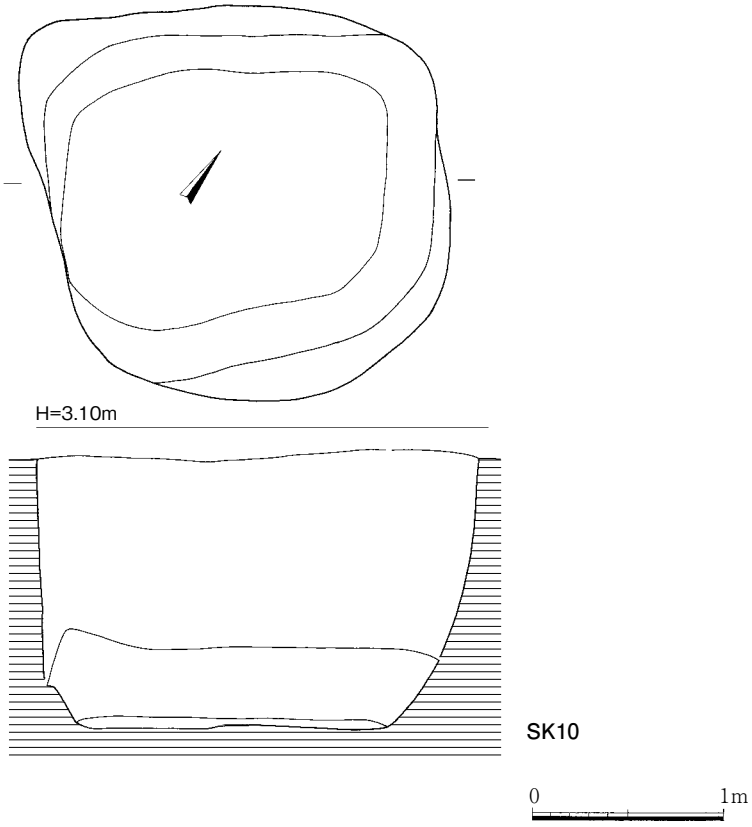
出土遺物（第14図３～５）　３は須恵器坏片。４は須恵器瓶の口縁部か。５は土師質擂鉢底部。

SK36（第12図）　調査区南西端寄りに位置する。長軸160cm、短軸70cmの平面楕円形、深さ

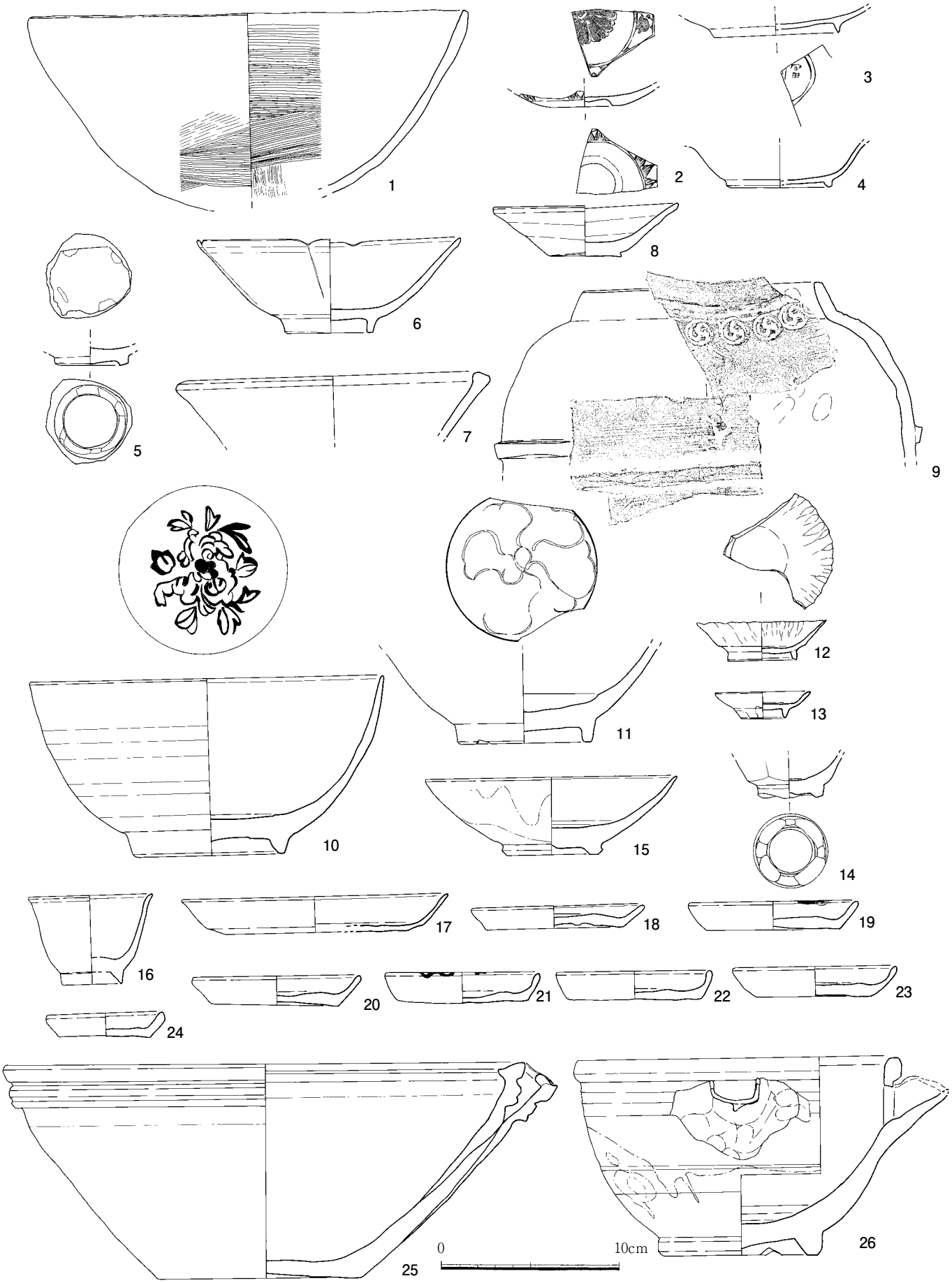


第８図　石積土坑出土遺物実測図（1/3・1/4）

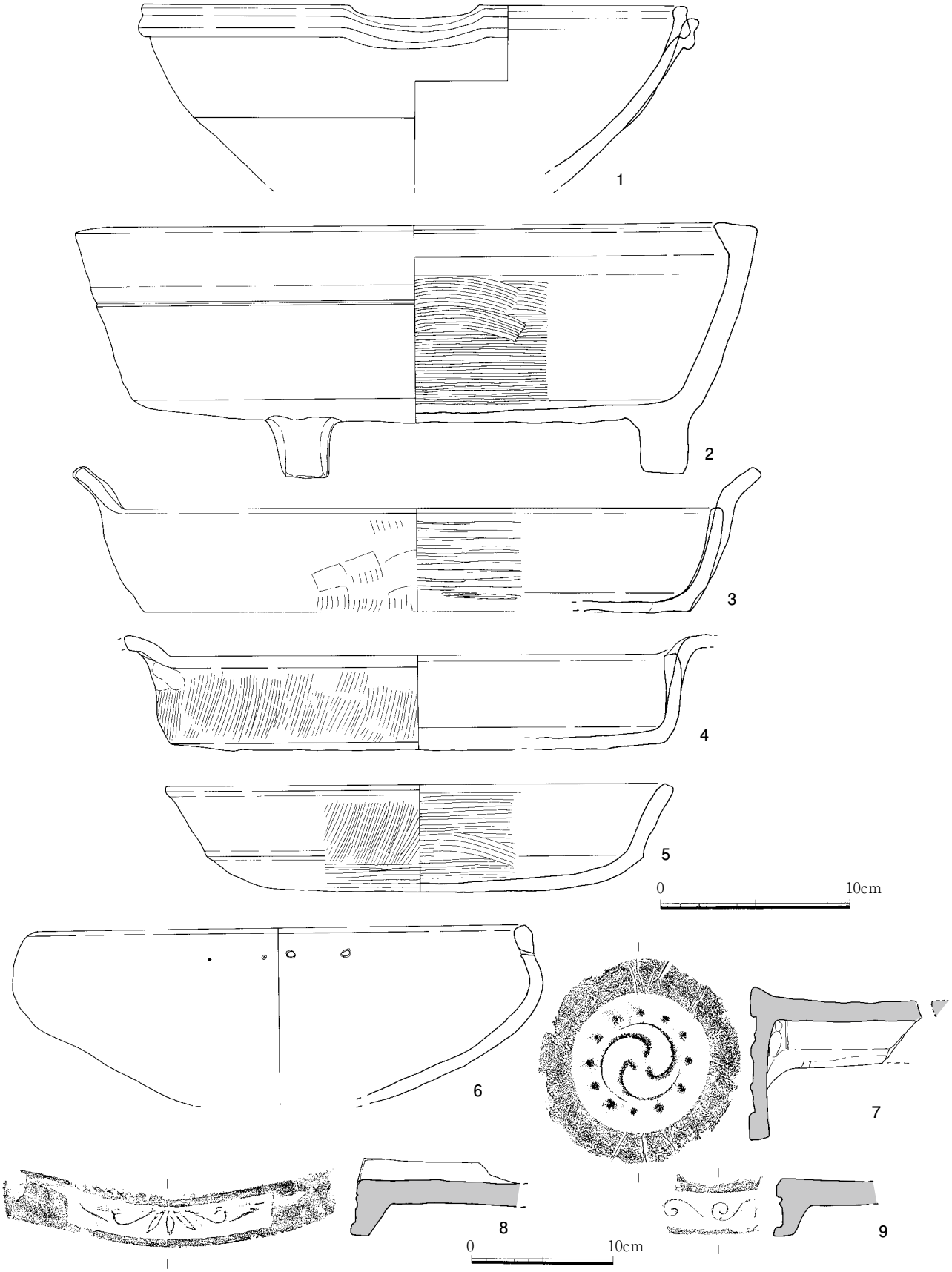




第９図　SX14・SK10遺構実測図（1/4）



第10図　SF15・SX14・SK10出土遺物実測図（1/3）



第11図　SK10出土遺物実測図（1/3・1/4）

20cmを呈する。炭化物混じりの埋土である。

出土遺物（第14図７～９）　７は土師器坏。復元口径12.5cm、器高2.5cm、底径8.0cm。糸切り離し底部。８、９は土師器小皿。８は復元口径8.6cm、器高1.5cm、底径6.4cm、糸切り離し底部。９は復元口径10.0cm、器高1.2cm、底径8.0cm、底部に板状圧痕が残る。

SK38（第12図）　調査区南西寄りに位置する。近世井戸に切られている。

出土遺物（第14図10、11）　10は白磁碗の底部腰から高台内にかけては無釉である。高台内に「一」字様の墨書が残る。11は陶器小壷の口縁部付近。

SK44（第12図）　調査区中央やや西寄りに位置する。径120cmの平面ほぼ円形で、柱根状にすぼまる形状の掘り込みがなされる。深さは30cmである。

出土遺物（第14図12～14）　12は青磁碗底部。高台内は露胎である。見込みには印花文が施される。13は青白磁壷もしくは小型の碗である。口縁端部は露胎となる。口縁部には刺突文、その下部には細めの蓮弁文が施される。14は須恵質の擂鉢。一部摺り目が残る。東播系であろう。

SK46（第12図）　調査区西寄りに位置するが、掘り込み等不明瞭な遺構である。

出土遺物（第14図15）　15は土師器の小皿。口径10.0cm、器高1.2cm、底径8.0cm。糸切り離し底部である。

SK60（第12図）　調査区中央寄りに位置する。長軸210cm、短軸65cmの平面長方形、深さ65cmを呈する。龍泉窯系の青磁、白磁、瓦器碗、土師器坏など10世紀頃から14世紀代頃までの遺物が出土している。

出土遺物（第14図16～29）　16は龍泉窯系の青磁碗。17は白磁碗。18は白磁碗の底部。高台から高台内部は露胎となる。高台内部に墨書がある。「光」か。19は龍泉窯系の青磁の盤か皿の口縁部。口縁部に弧状の施文がある。20は陶器の壷の口縁部か。21は陶器の片口鉢。青海波状の叩き痕が見られる。22は瓦器碗。23は黒色土器の底部である。24は土鍋。25、26は土師器坏。25は口径12.9cm、器高2.8cm、底径9.4cm。底部は糸切り離しで板状圧痕が残る。26は口径12.5cm、器高2.3cm、底径8.3cm。底部は糸切り離し。27～29は土師器の小皿。27は内面に墨書がある。復元口径7.4cm、器高1.8cm、底径5.6cm。墨書は不明瞭である。28、29は灯明皿として使用されていた。28は口径8.8cm、器高1.4cm、底径6.9cmの糸切り離し底部である。29は口径6.5cm、器高1.9cm、底径2.8cmの糸切り離し底部。いずれも口縁部に煤が付着している。

SK68（第12図）　調査区北東寄りに位置する長軸100cm、短軸65cmの平面楕円形を呈する深さ10cm程度の土坑である。

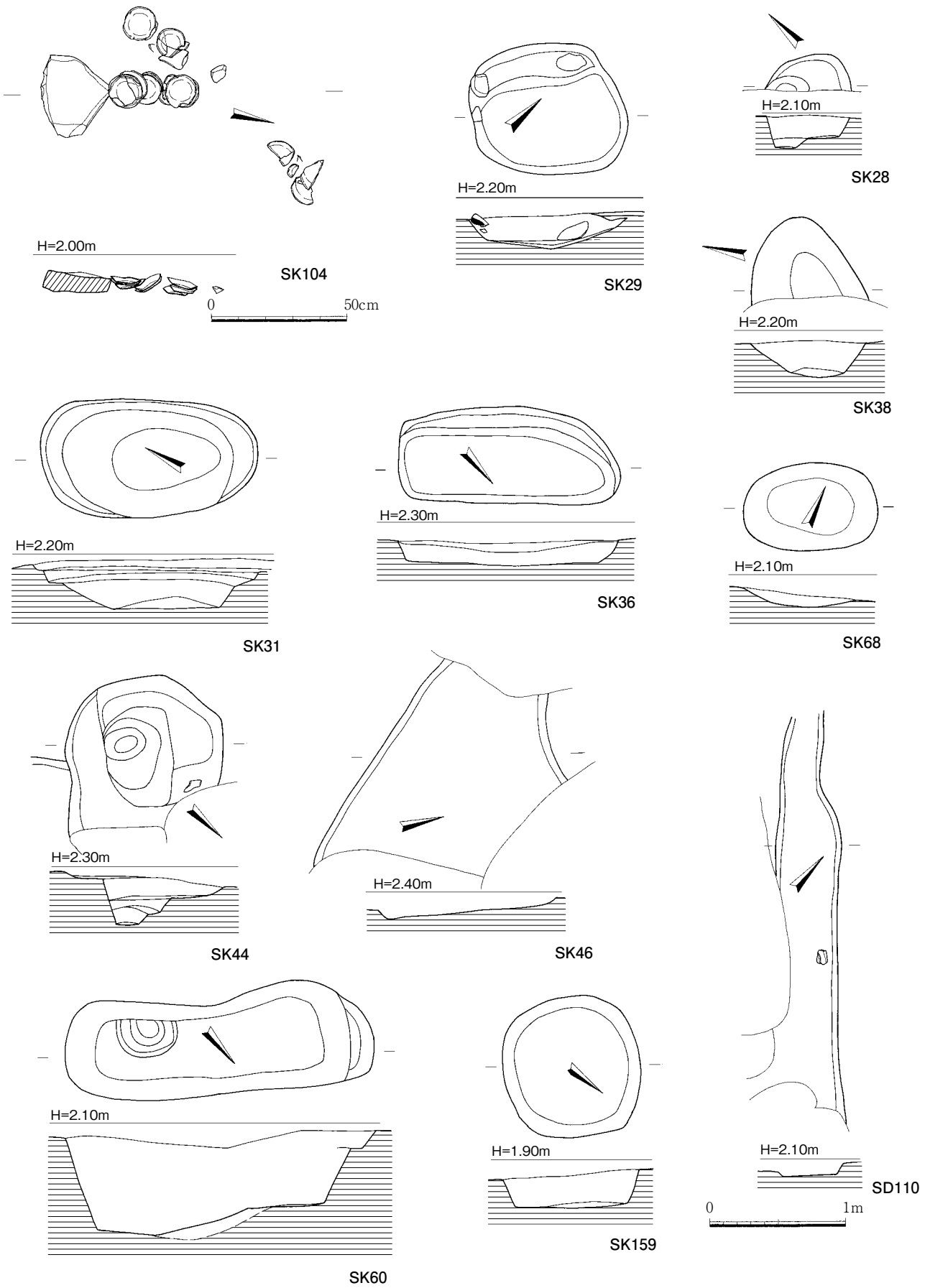
出土遺物（第14図30）　30は土器師の小皿。口径8.1cm、器高1.4cm、底径6.1cm。糸切り離し底部。

SK159（第12図）　調査区中央やや東寄りに位置する、径100cmの平面円形を呈する深さ25cmの土坑である。

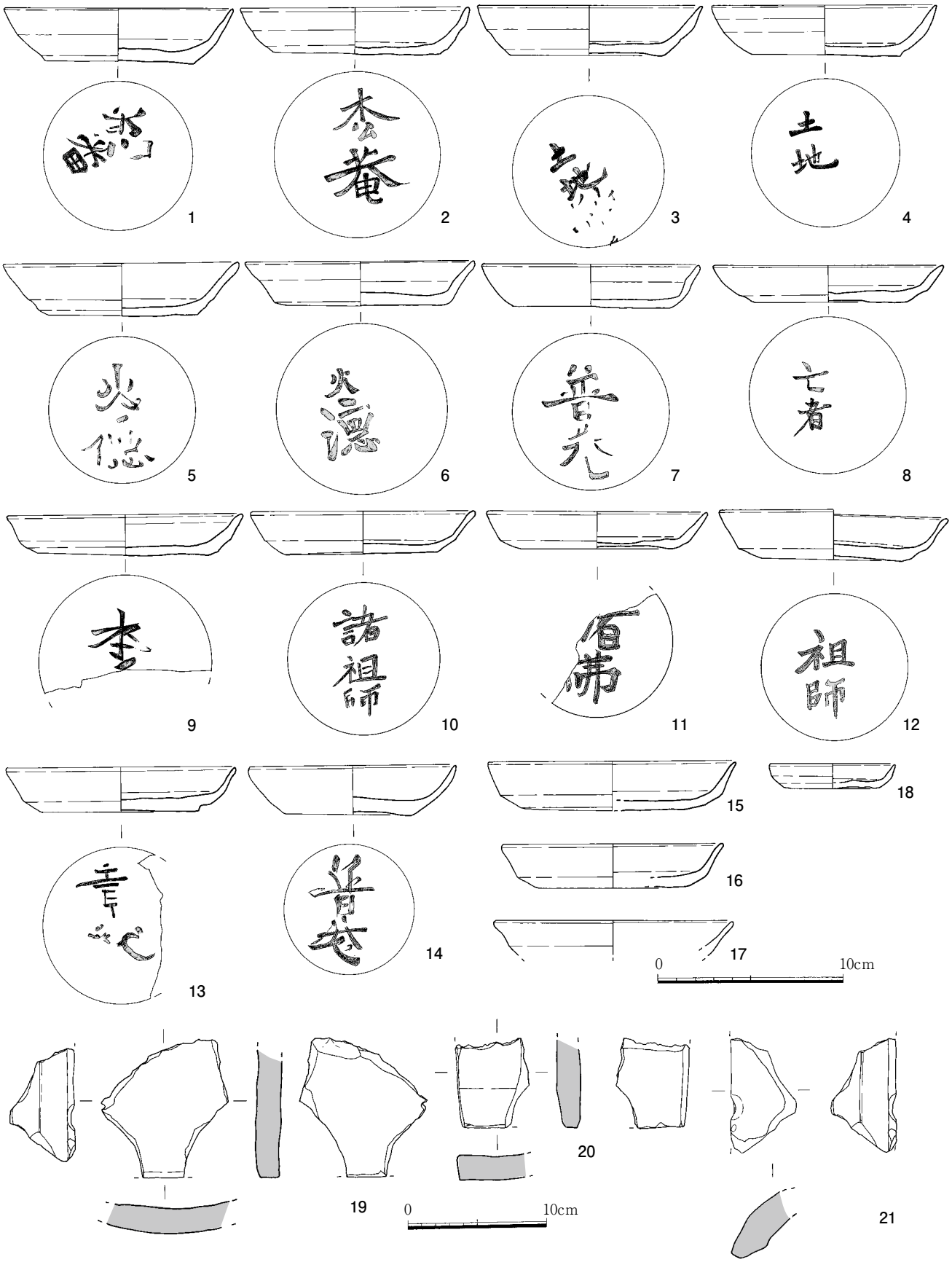
出土遺物（第14図32）　32は土師器坏。口径12.2cm、器高2.6cm、底径7.8cm、糸切り離し底部を呈する。

SD110（第12図）　調査区中央付近で北西－南東の方向に軸をとる。ごく浅い掘り込みしか確認できなかった。上層から掘り込まれていたのであろう。

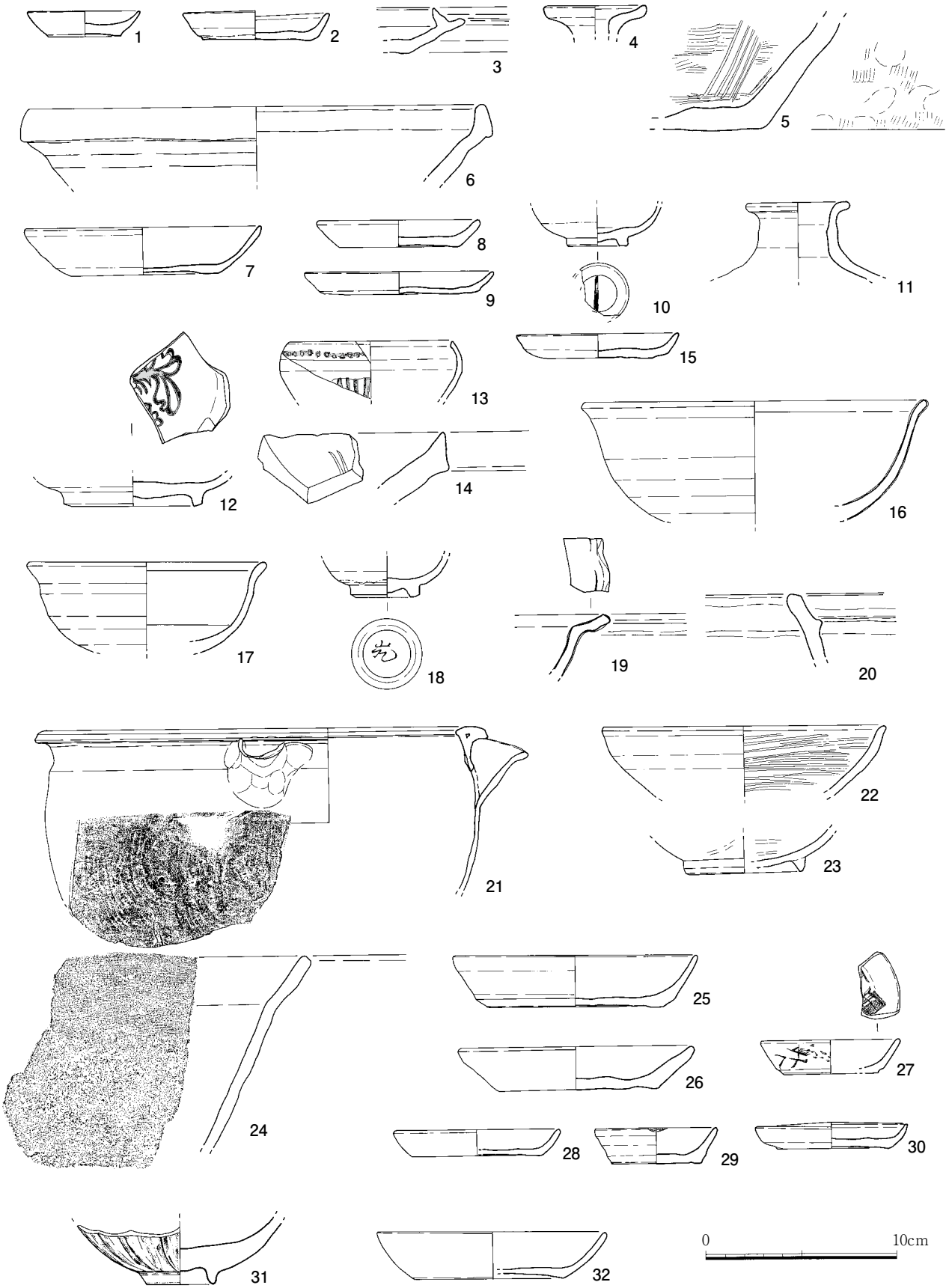
出土遺物（第14図31）　31は龍泉窯系の青磁碗。片切彫りの蓮弁文が施される。口縁部から胴部は欠損している。高台畳付は掻き取られ露胎となる。



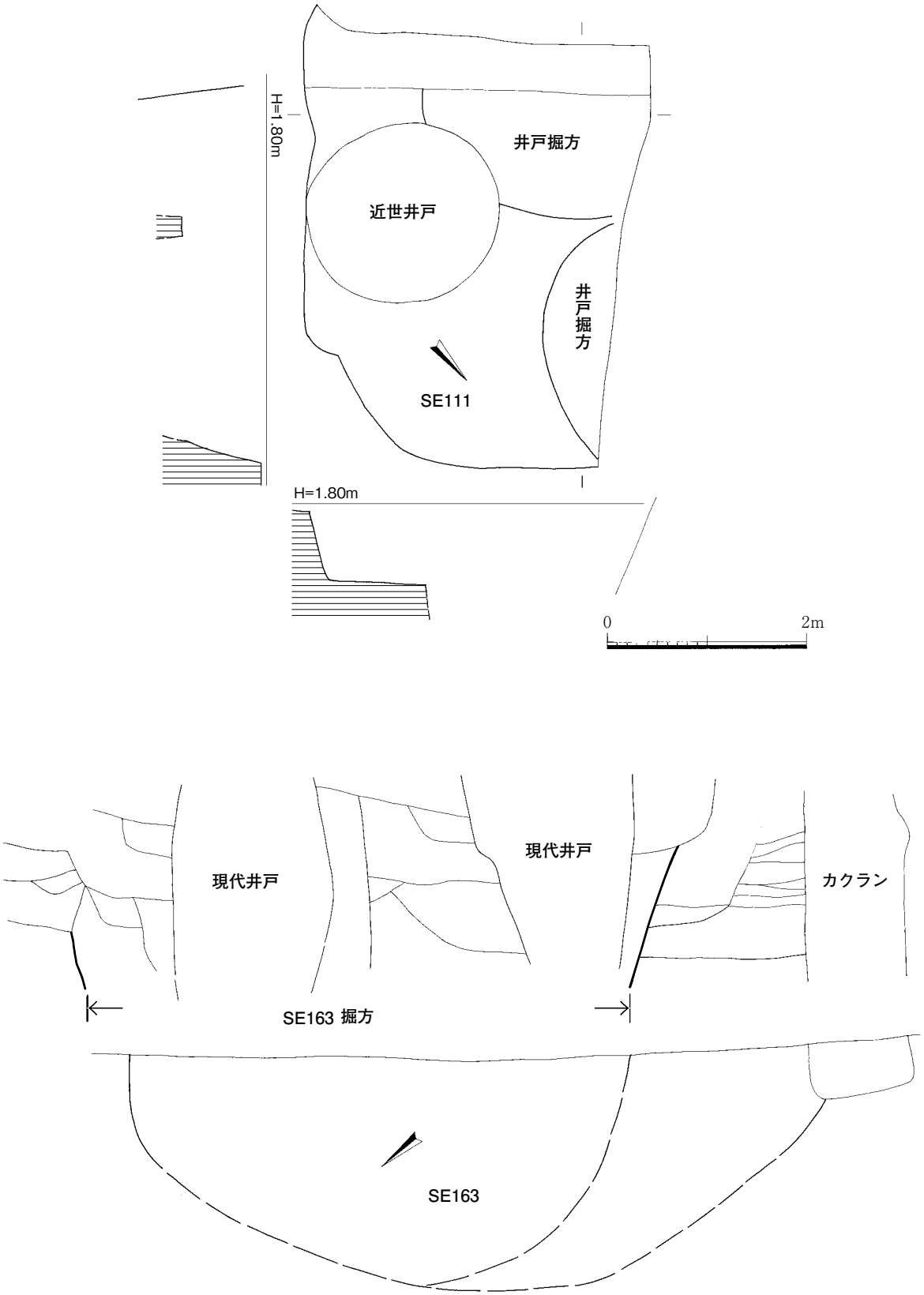
第12図　土坑・溝実測図（1/20・1/40）



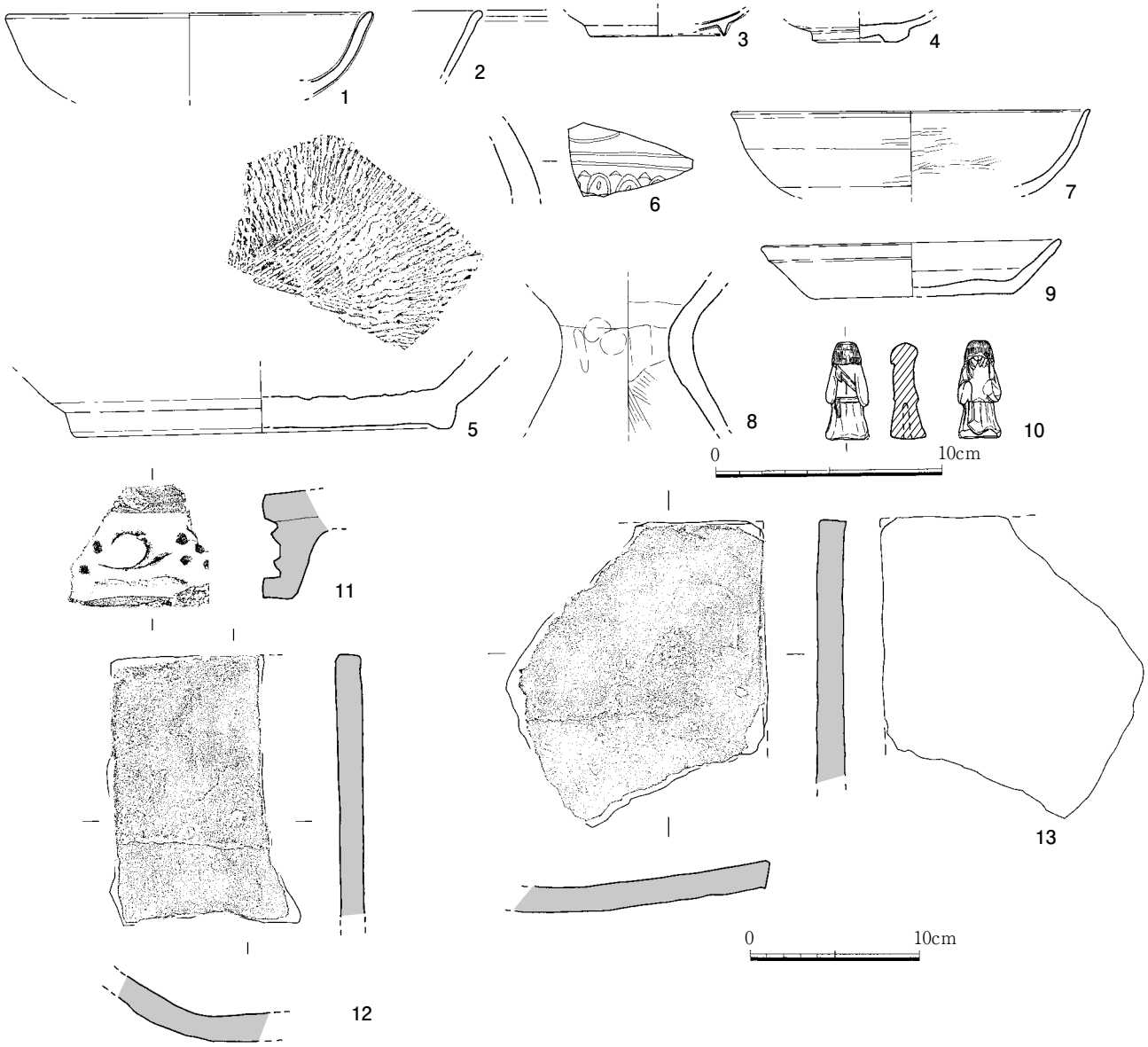
第13図　SK104出土遺物実測図（1/3・1/4）



第14図　土坑・溝出土遺物実測図（1/3）



第15図　井戸実測図（1/60）



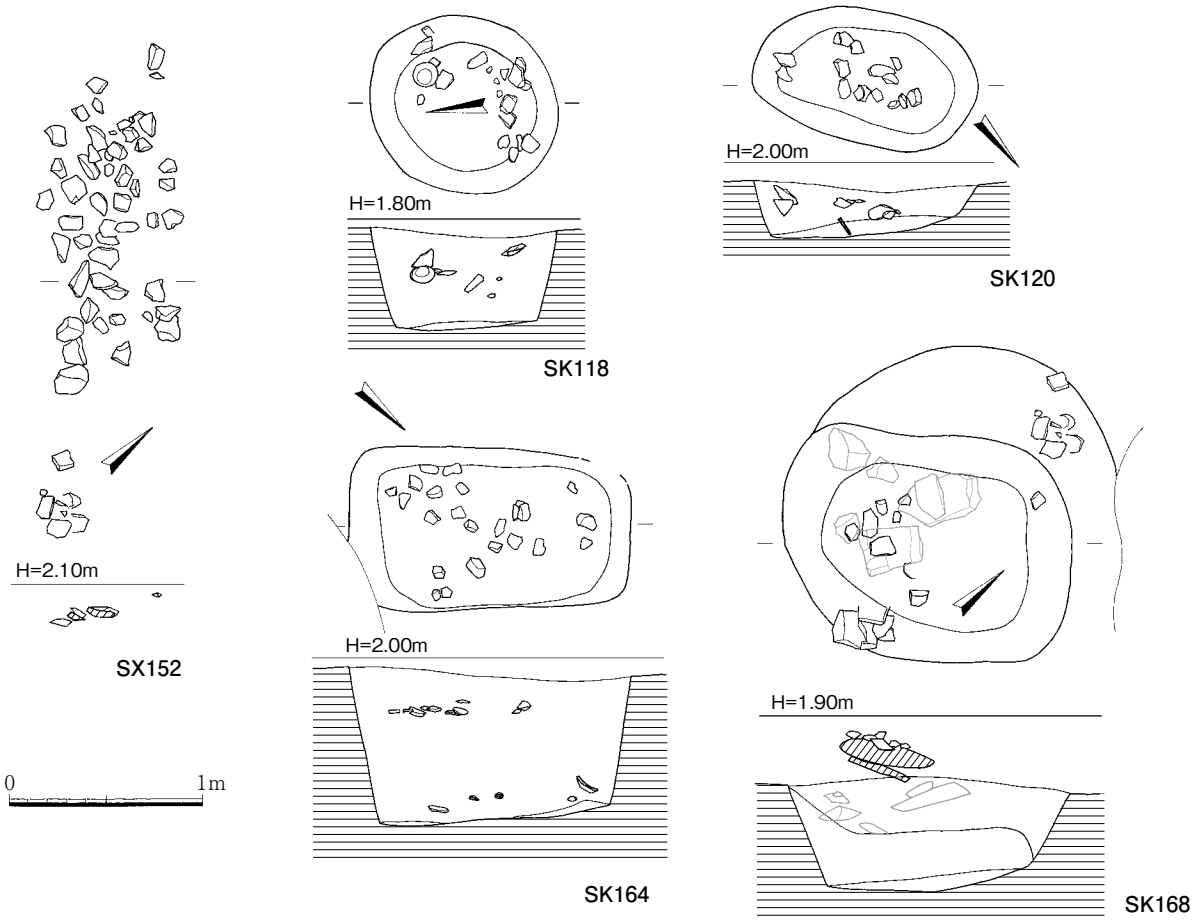
第16図　SE111出土遺物実測図（1/3･1/4）

（3）第３面の遺構と遺物

①井戸

SE111（第15図）　調査区南西端に位置する。第１面から掘り込まれていた近世ないし近代井戸に近接して円形の掘方が２基検出された。壁の崩落が懸念されたため底面までの掘削は断念した。若干の混入が見られるものの、出土遺物から井戸の時期は14～15世紀頃と考えられる。

出土遺物（第16図）　１、２は龍泉窯系の青磁碗。３、４は白磁皿。３は高台畳付部分の釉を掻き取る。４は腰から高台、高台内部まで露胎となる。５は陶器擂鉢の底部。６は高麗青磁の壷か。器壁外面に白化粧土による圏線や花文を施し緑色の釉をかける。７は黒色土器の碗。９は土師器坏。口径13.3cm、器高2.4cm、底径9.0cm。底部は糸切り離しで板状圧痕が残る。10は土製の人形。高さ4.4cmである。虚無僧であろう。11は軒平瓦。瓦当面には唐草文と珠文が配される。12、13は平瓦。



第17図　集石遺構・土坑実測図（1/4）

12はコビキ調整が、13は布目痕が残る。

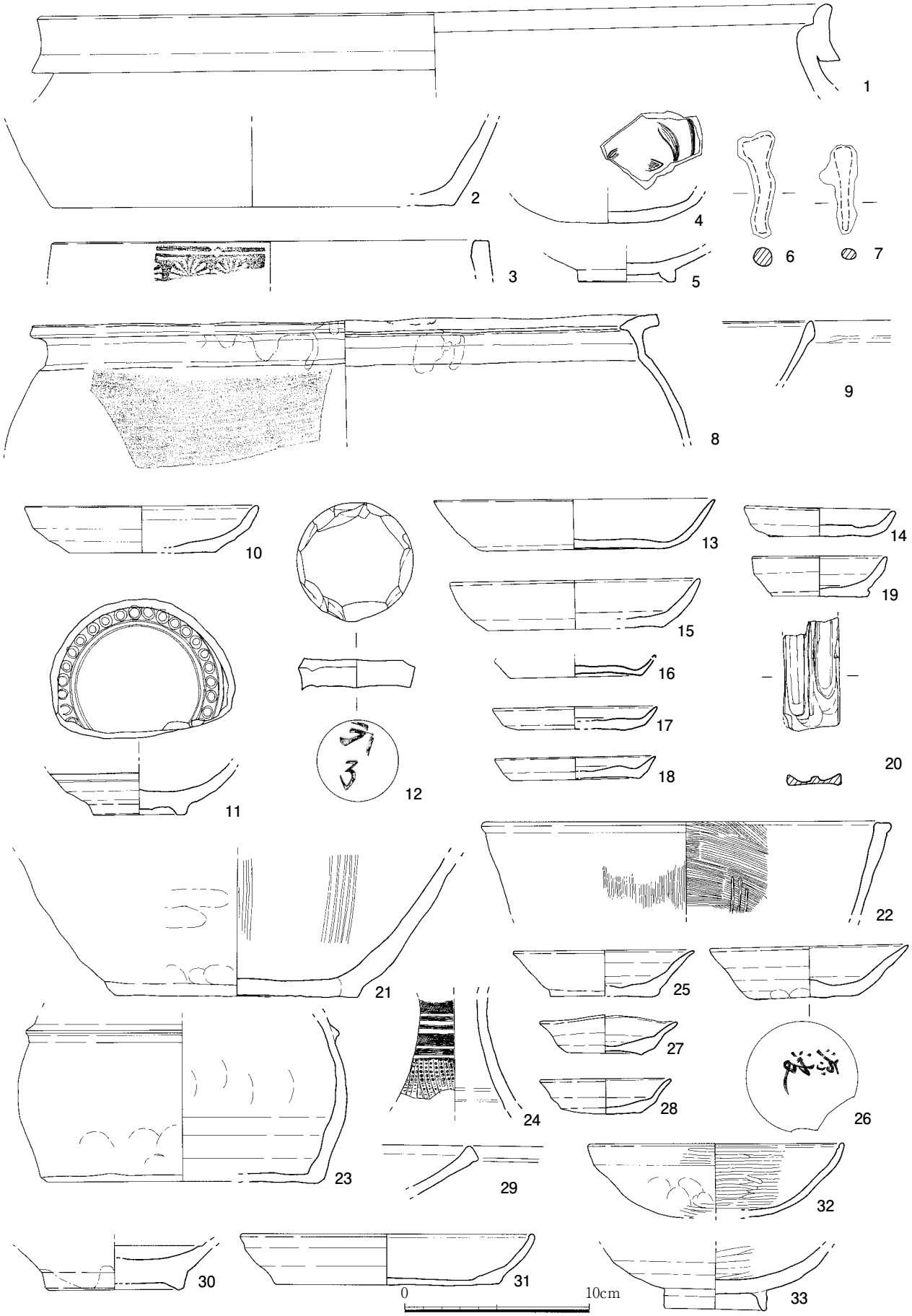
SE163（第15図）　調査区北東側を当該井戸の掘方が占めている。第１面からの掘り込みが想定されたが分層が難しく砂丘面まで掘り下げた段階で井戸の掘方と判明した。従って第３面の遺構として扱う。掘方の径は５ｍを超える。壁の土層から、SE111と同様、当該範囲には近世から現代に至る井戸が複数切り込まれており、それがさらに分層を困難にした理由だと考えられる。この地点は建物が隣接しており、また時期的に度重なる台風や大雨で調査区の壁が崩落する危険性があることから手作業による底面までの掘削は断念し、重機で掘削して井戸底面を確認するにとどまった。

出土遺物（第18図１～７）　１は常滑の陶器の大型甕の口縁部か。２は火舎の底部か。３も瓦質火舎の口縁部。スタンプ文が巡る。４は白磁皿。底部は露胎となる。見込みに櫛描文が施される。５は白磁碗の底部。腰から高台内部は露胎となる。６、７は鉄製の釘であろう。

②集石遺構、土坑

SX152（第17図）　調査区西よりに位置する。北西－南東方向で礫が集積する。集石の下面には特に掘り込みは検出されなかった。Ⅱ区のSD179の延長である可能性もある。

出土遺物（第18図８～10）　８は陶器甕の口縁部。９は白磁口縁部。10は土師器坏。復元口径12.8cm、器高2.5cm、底径8.0cm。糸切り離し底部。



第18図　井戸・集石遺構・土坑出土遺物実測図（1/3）

SK118（第17図） 調査区南西端付近に位置する。径95cmの平面円形、深さ50cmを呈する土坑である。土師器坏、粉青沙器、礫などが投棄されていた。14世紀代か。

出土遺物（第18図11～14、20） 11は粉青沙器の碗の底部。見込みに白化粧土による圏線と円、腰部には圏線のスタンプ文を施し暗灰緑色の釉をかける。畳付は釉を掻き取る。見込みには目跡が残る。12は瓦玉。白磁碗の高台部分を打ち欠いて円盤状に成形している。最大径は6.4cm、厚さ1.7cm。高台内部には墨書が残る。13は土師器坏。口径15.3cm、器高2.8cm、底径10.0cm。糸切り離し底部。14は土師器小皿。口径8.3cm、器高1.7cm、底径5.6cm。糸切り離し底部で板状圧痕が残る。20は砥石。長さ6.2cm、幅3.1cmで最大厚さは0.6cm。両面が砥面となるが、片面は棒状のものを研いだ２条の砥面が残る。

SK120（第17図） SK118の東に位置する。長軸120cm、短軸70cmの平面楕円形、深さ30cmを呈する土坑である。土師器坏、皿、擂鉢などが出土した。

出土遺物（第18図15～18、20） 15は土師器坏。復元口径13.7cm、器高2.7cm、底径9.6cm。糸切り離し底部。16～19は土師器皿。16は底径7.2cm。17は口径9.0cm、器高1.2cm、底径6.0cm、糸切り離し底部。18は口径8.8cm、器高1.2cm、底径7.0cmの糸切り離し底部。19は口径7.5cm、器高2.2cm、底径5.3cmの糸切り離し底部。21は陶器擂鉢。内面に５条の摺り目が残る。

SK164（第17図） 調査区中央付近に位置する。長辺134cm、短辺80cmの平面長方形、深さ74cmを呈する土坑である。小さめの礫の集積、陶器、粉青沙器、土師器坏などが出土している。

出土遺物（第18図22～28） 23は陶器の徳利形瓶の胴部。底部は露胎である。24は粉青沙器の壷頸部。外面に白化粧土による圏線と縄簾文の印花を施し、釉をかける。25、26は土師器坏。25は口径10.0cm、器高2.5cm、底径6.0cm。糸切り離し底部。26は口径10.8cm、器高2.8cm、底径6.0cmで同じく糸切り離し底部。底部に墨書が施される。「源波」であろうか。27、28は土師器小皿。灯明皿として使用されていた。27は口径6.7～7.5cm、器高1.7～2.0cm、底径4.0cm。口縁部に煤が付着する。28は口径7.2cm、器高1.9cm、底径4.0cm。内部に煤が付着する。25～28の土師器坏、小皿はいずれも底部から口縁部にかけて大きく広がる。

SK168（第17図） 調査区やや西寄り、SX152の東側に位置する。掘方は、長軸150cm、短軸120cmの平面楕円形、深さ60cmを呈する。礫群が焼けた粘土に覆われている状態で検出した。礫と粘土を除去すると、大きめの礫群が下層から検出された。礫とともに白磁碗、土師器坏、瓦器碗などが出土している。

出土遺物（第18図29～33） 29は須恵器壷の口縁部。30は白磁碗底部。腰部から高台内部は露胎となる。31は土師器坏。復元口径16.0cm、器高2.8cm、底径12.2cm。糸切り離し底部。32は瓦器碗、33は内黒の黒色土器。

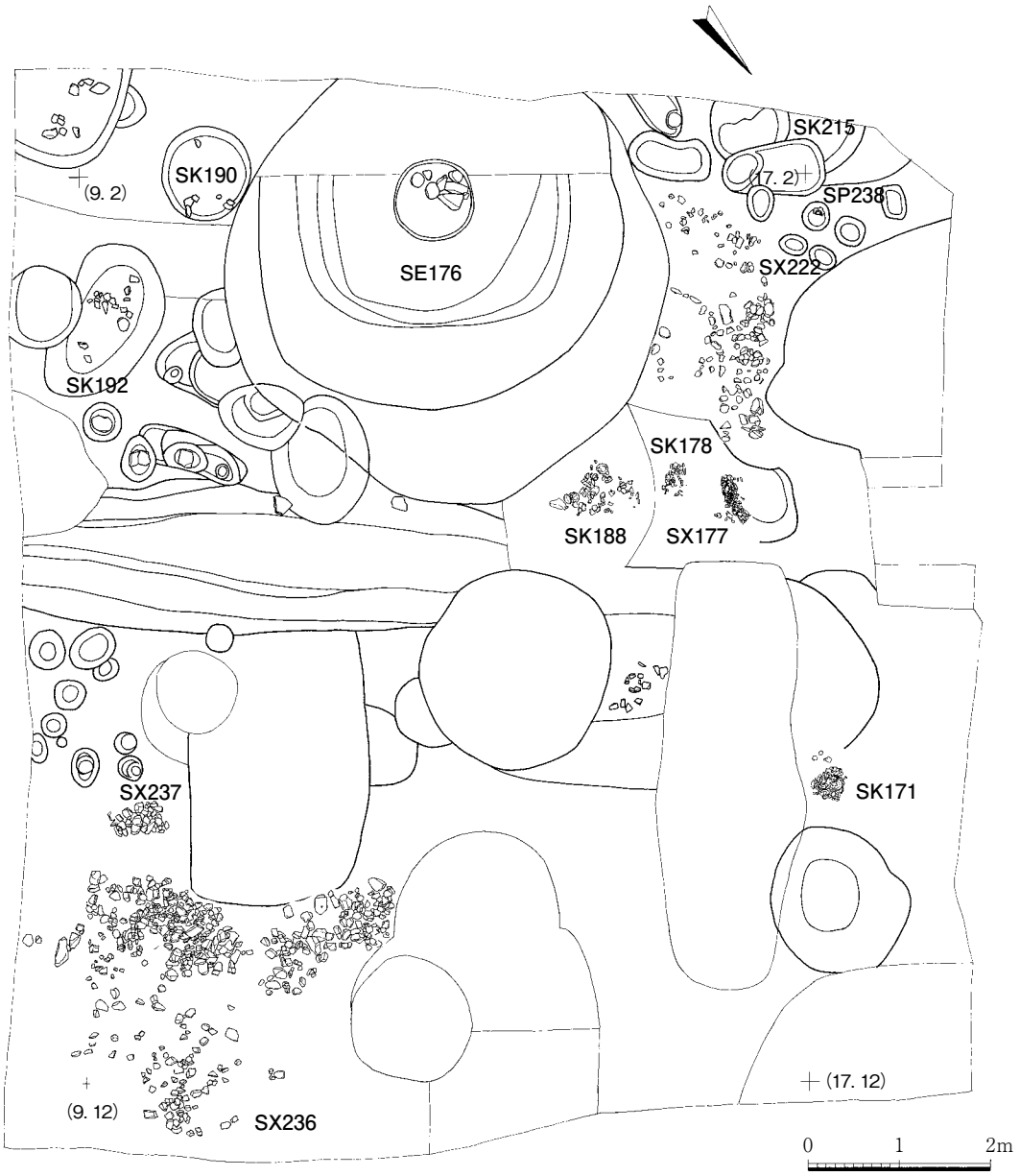
４．Ⅱ区の調査

（1）第１面の遺構と遺物

①集石遺構

SX222（第22図） 調査区南西端付近に位置する集石である。2.5m×1.5mの範囲で礫や陶磁器が分布する。

出土遺物（第23図１～10） １は青磁碗の口縁部。崩れた蓮弁文の一部が外面に施文される。２は白磁碗口縁部。３は同安窯系の青磁碗底部。畳付から高台内部は露胎となる。外面に櫛描文が施されている。４は無釉陶器こね鉢の口縁部。５は土師質の擂鉢口縁部。６は陶器の鉢か甕の底部。７は陶

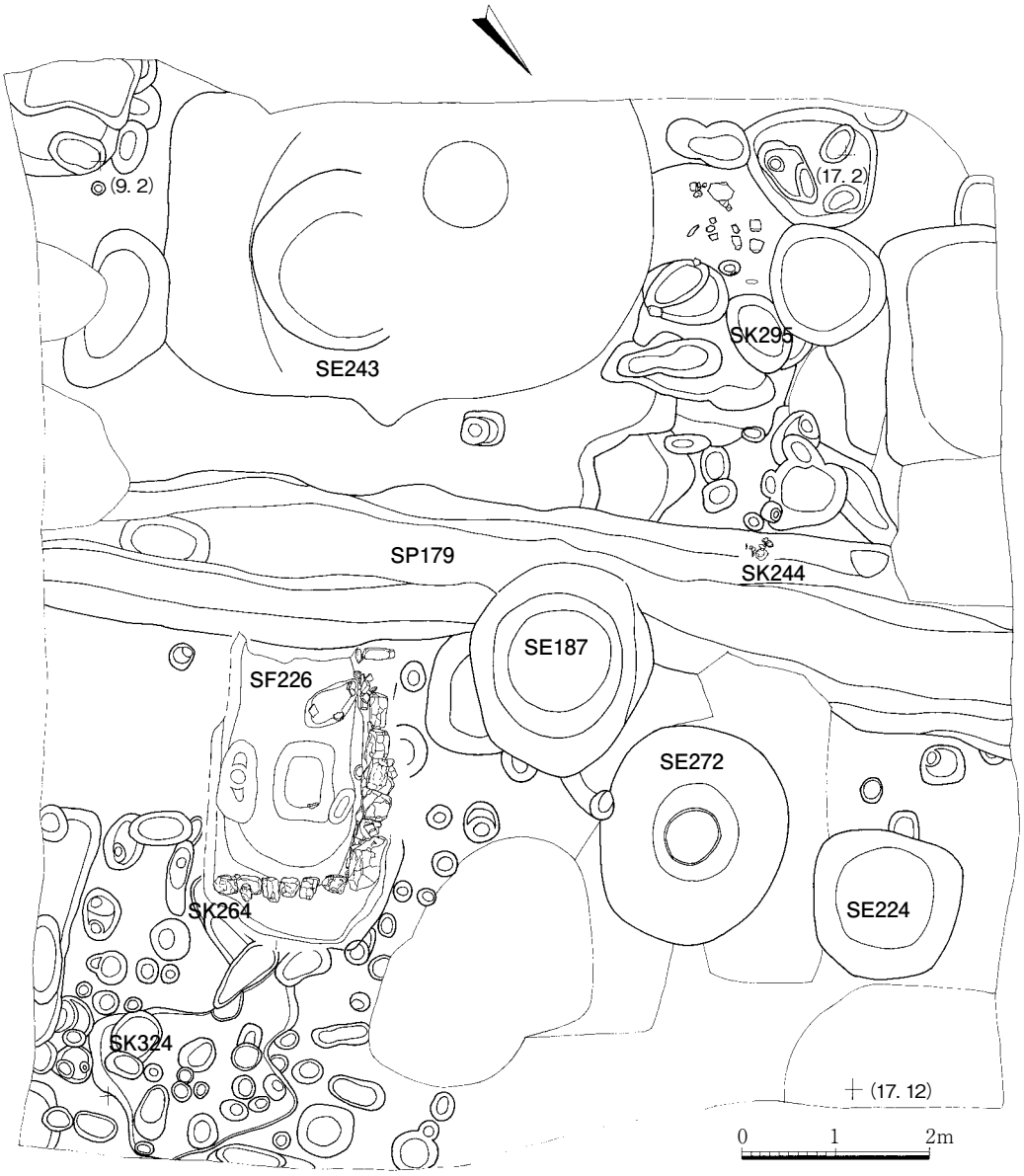


第19図　Ⅱ区第１面遺構配置図（1/80）

器鉢の口縁部。外面は露胎である。口縁部上面に墨書が施される。８は瓦質火舎の口縁部。口縁部外面に菊花の印花文が施される。９は小型の瓦質鉢。10は土師器坏。復元口径11.0cm、器高2.3cm、底径6.6cm。糸切り離し底部。

SX236（第22図）　調査区西端に、４ｍ×３ｍの範囲で礫が集中し砂丘面直上まで堆積していた。瓦、陶磁器、土師器などが含まれていた。礫の層が厚いことや瓦が含まれていることから、建造物の石基礎とも考えられる。京都系土師皿が出土している。

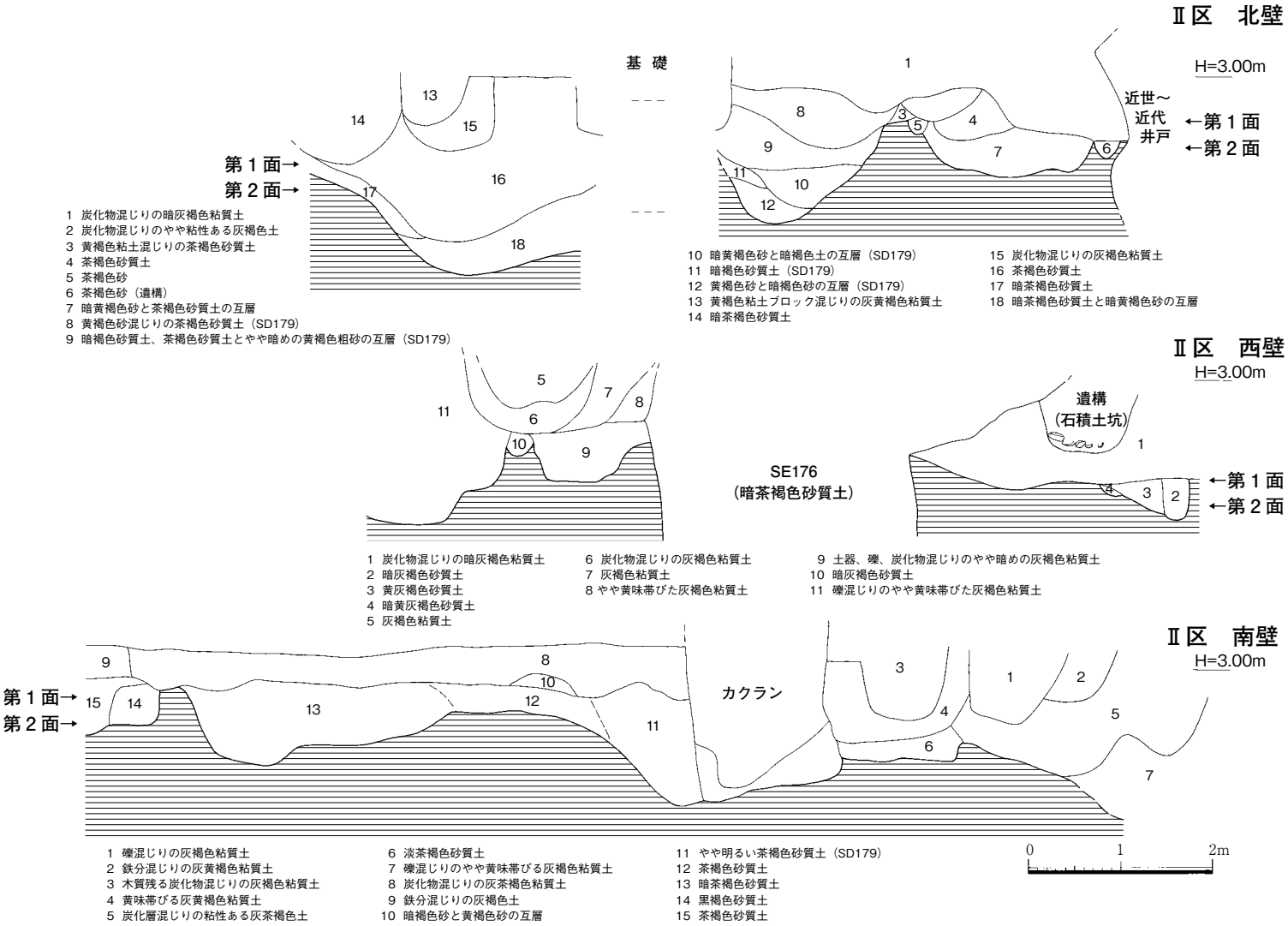
出土遺物（第23図11～21）　11は龍泉窯系の青磁皿。外面には簡略化した蓮弁文、内面は縦方向に条線を施文する。12は陶器鉢の胴部。内面は露胎で鉄絵が施される。13は黒色釉の壷の底部。畳付から高台内部は露胎となる。14は丸瓦。中央部に穿孔されている。



第20図　Ⅱ区第２面遺構配置図（1/80）

15は土師質こね鉢。16～19は京都系土師皿。16は口径9.6cm、器高1.4cm、底径7.0cm。底部はヘラ切りで板状圧痕が見られる。17は口縁端部が外反し、口径10.2cm、器高1.9cm、底径8.8cm。ヘラ切りの底部で内面はミガキで調整される。18も口縁端部が外反し、口径10.0cm。19は口径9.8cm、器高0.7cm、底径7.4cm。20、21は土師器小皿。各々口径7.6cm、6.8cm、器高1.5cm、底径5.8cm、5.0cmで糸切り離し底部。

SX237（第22図）　長軸60cm、短軸40cmの平面楕円形の範囲で礫が詰め込まれていたような状態の土坑。掘方は明確ではない。図示できる遺物は出土しなかった。



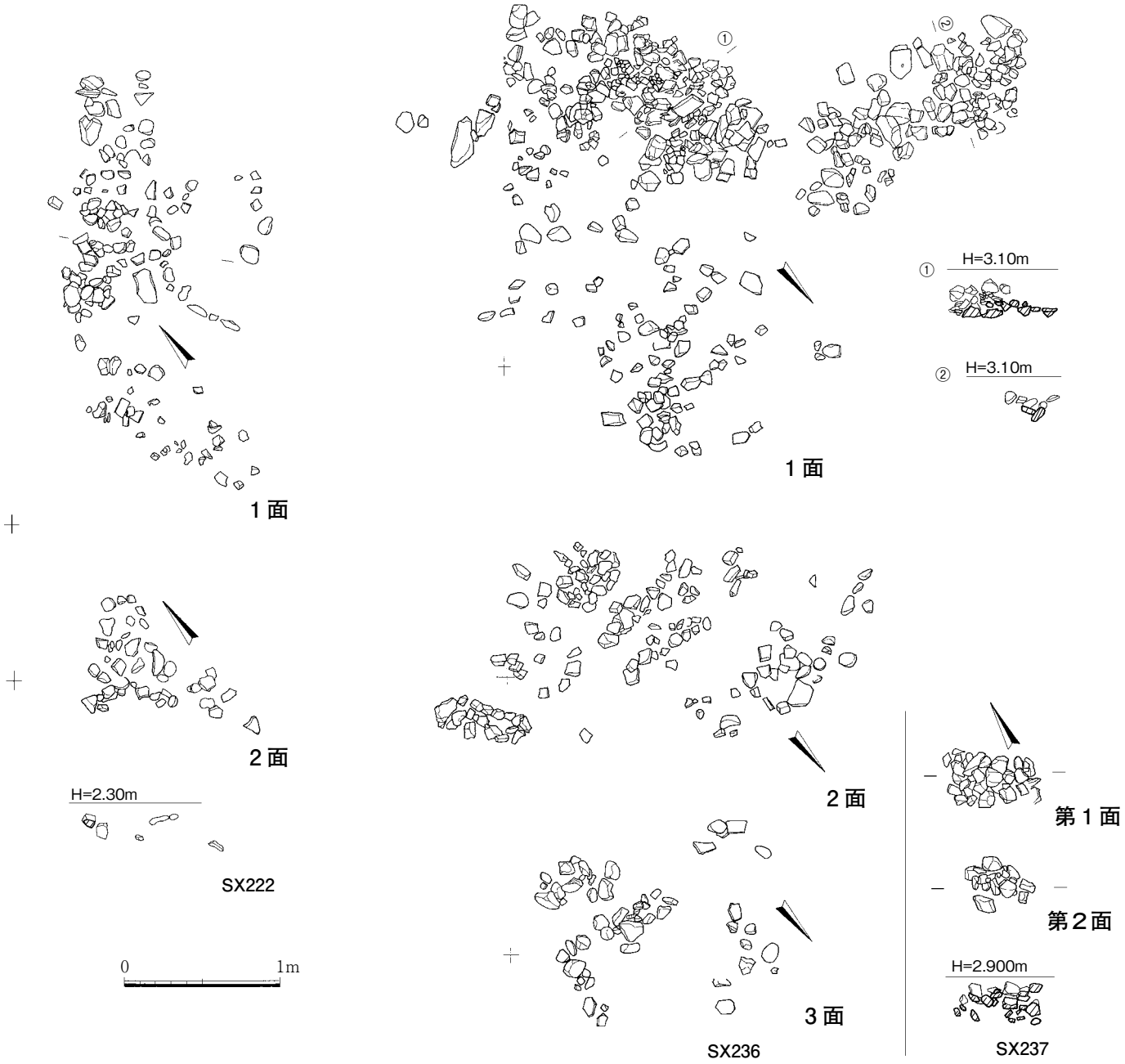
第21図　Ⅱ区調査区土層実測図（1/60）

②土師器集積遺構

SK171（第24図）　調査区北寄りに位置する。第１面とした茶褐色包含層を遺構検出している段階で土師器坏が重なった状態で確認されたため精査して検出した。平面形は径35cmのほぼ円形、深さは37cmまで土師器坏が重なり合った状態で検出された。横方向へ崩壊した形跡は見られず、木製の箱のようなものに土師器坏を詰めて埋設したと考えられる。出土遺物は大半が土師器坏で、一部瓦片も含まれる。14世紀前後か。

出土遺物（第25図、第26図１～14）　第25図１～48、第26図１～13は土師器坏である。口径11.2～13.9cm、器高2.2～2.8cm、底径8.6～10.1cm。底部は糸切り離しの他、板状圧痕が見られるものもある。第26図14は平瓦。

SK177（第24図）　調査区中央やや西寄りに位置する。60cm×20cmの範囲、深さ20cmまで土師器坏が集積している。下層で掘方が検出された。長軸85cm、短軸70cmの平面楕円形、深さ25cmの土坑である。土師器坏の分布状況から、SK171のように箱に入れられていたかどうかは不明だが、重なって集中していることから、埋納されていたと考えられる。隣接して土師器坏集積



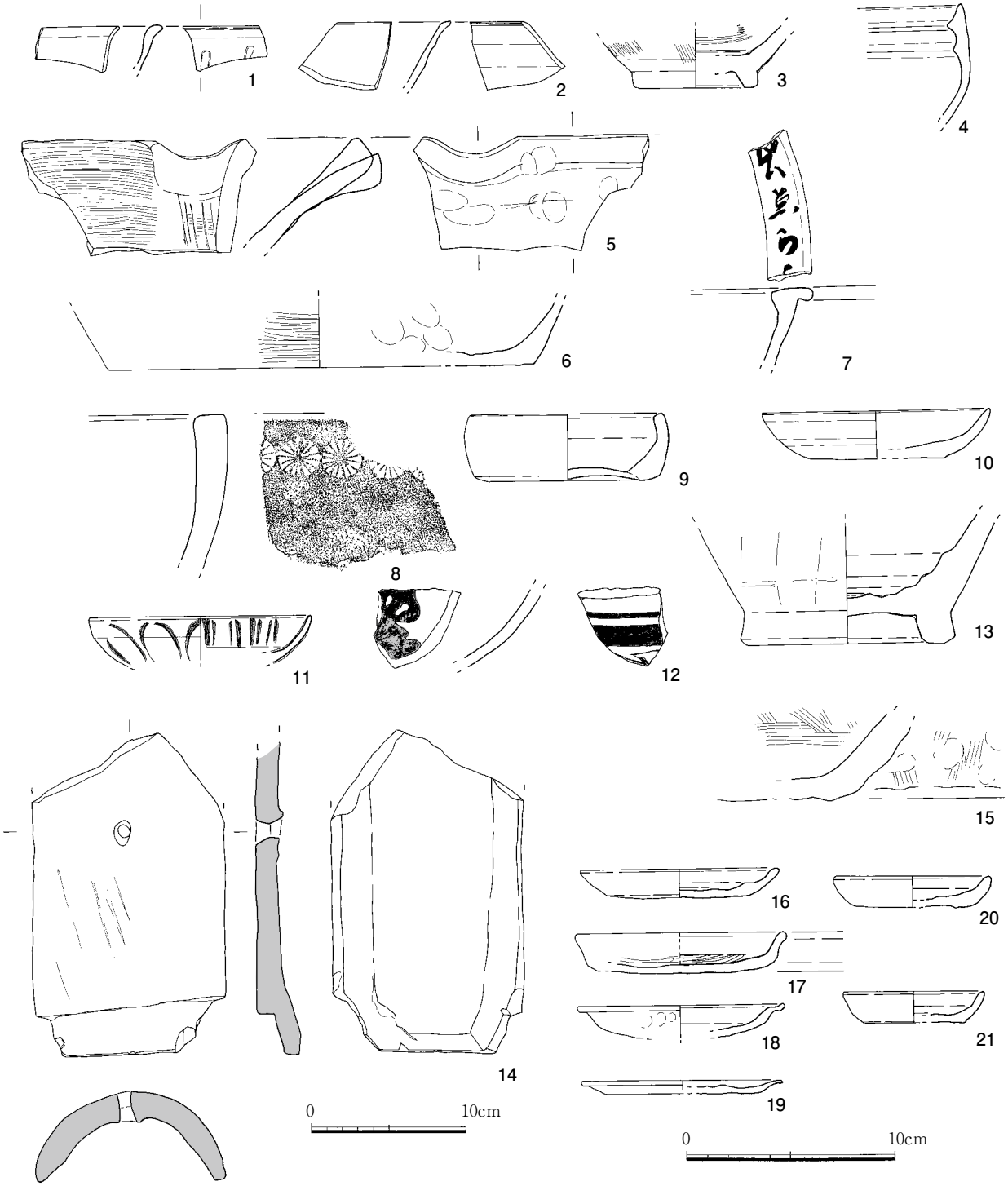
第22図　集石遺構実測図（1/40）

（SK178、SK188）が並んでいる。

出土遺物（第26図15～41、第27図1～21）　第26図15～41、第27図1～20は土師器坏。口径11.4～13.1cm、器高2.1～2.8cm、底径8.0～9.8cmである。底部は糸切り離しの他、板状圧痕が残るものもある。21は青磁碗の口縁部。

SK178（第24図）　SK177の南東側に位置する。40cm×25cmの範囲、深さ15cmまで土師器坏が集積している。下層で検出された掘方は、長軸50cm、短軸35cmの平面楕円形、深さ30cmの土坑である。SK177と同様埋納されていたか。

出土遺物（第27図22～34）　復元可能な土師器坏は口径11.8～13.4cm、器高2.2～2.8cm、

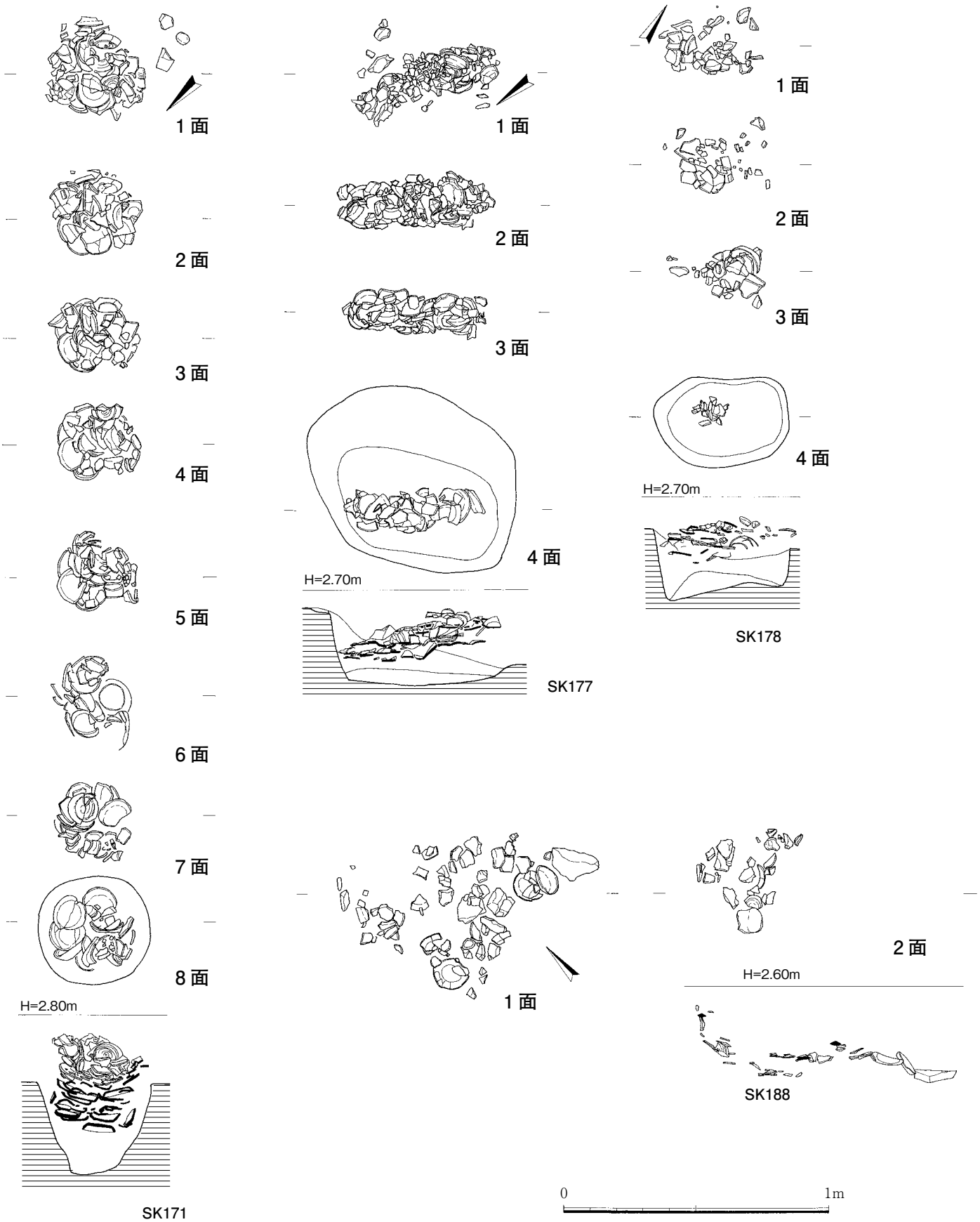


第23図　集石遺構出土遺物実測図（1/3・1/4）

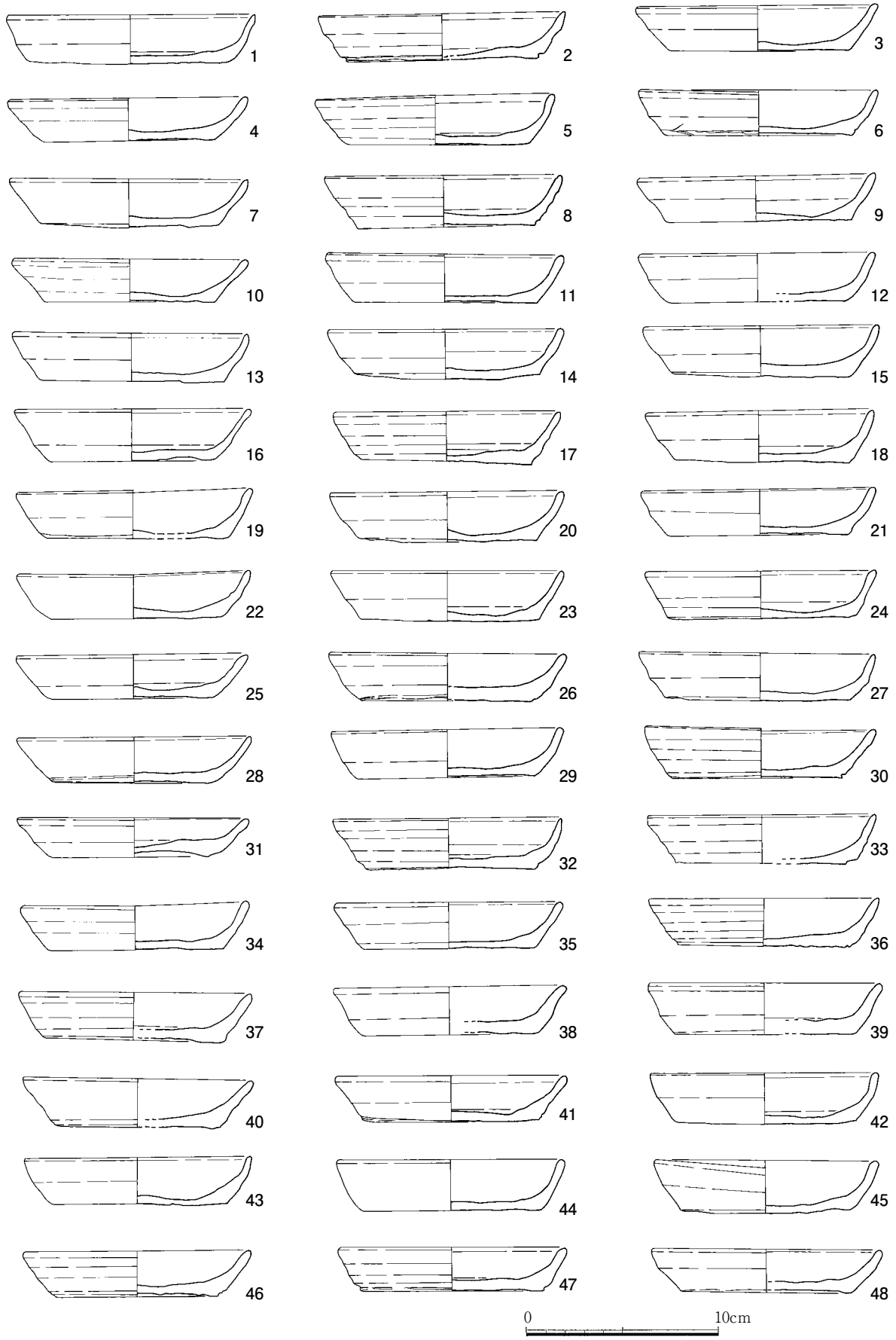
底径8.6～10.0cmである。糸切り離し底部の他、板状圧痕が残るものがある。

SK188（第24図）　SK178の南東側に位置する。SK177、SK178と異なり、土師器の集積範囲が広がる。80cm×65cmの範囲、深さ25cmまで集積する。13世紀後半～14世紀頃か。

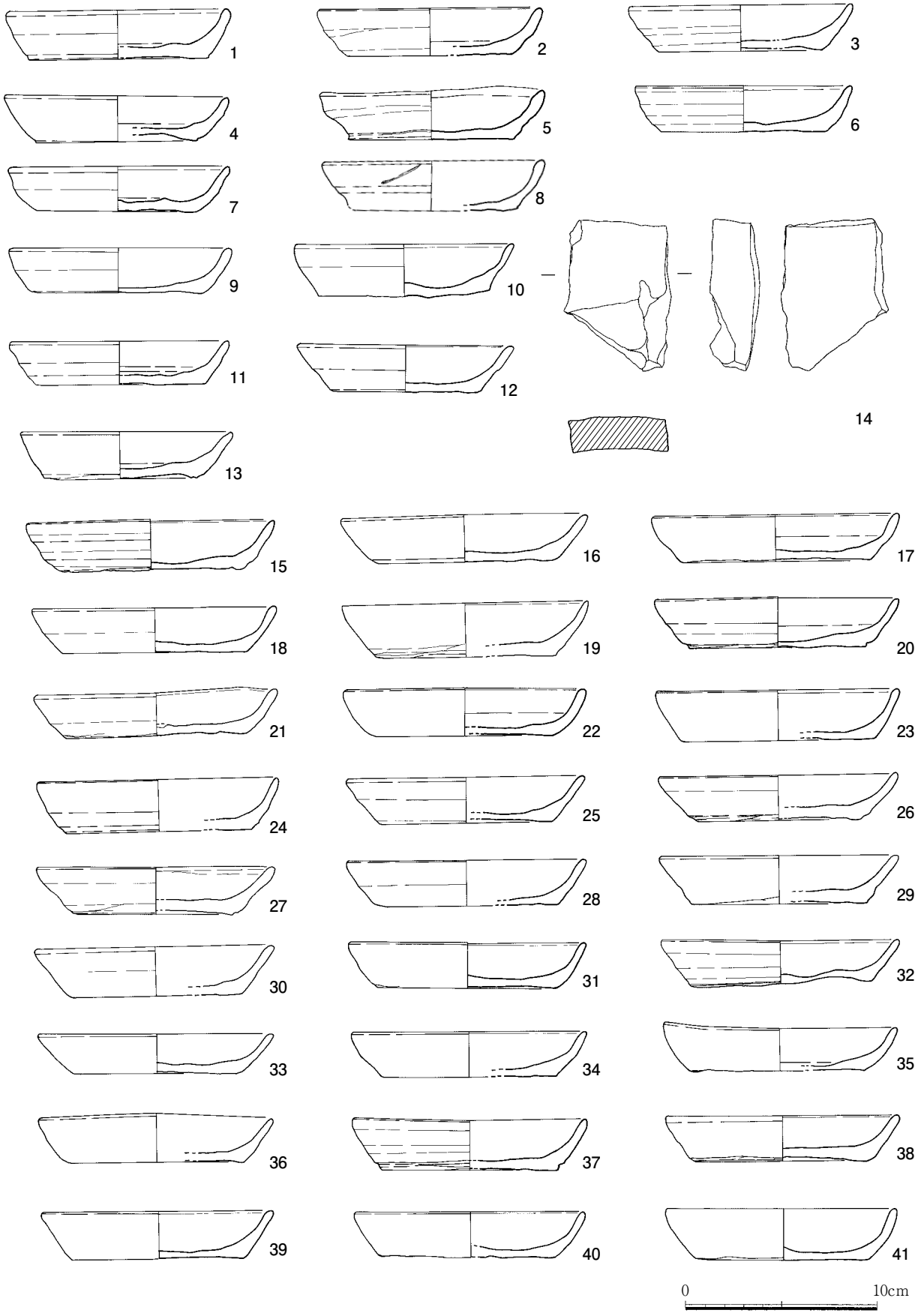
出土遺物（第27図35～46）　35～44は土師器坏、45、46は土師器小皿である。土師器坏は、口径12.5～13.0cm、器高2.5～2.8cm、底径7.2～9.6cmで糸切り離し底部の他、板状圧痕が残るものがある。また、40は口縁部付近に煤が付着している。45、46は各々口径8.4cm、8.0cm、器



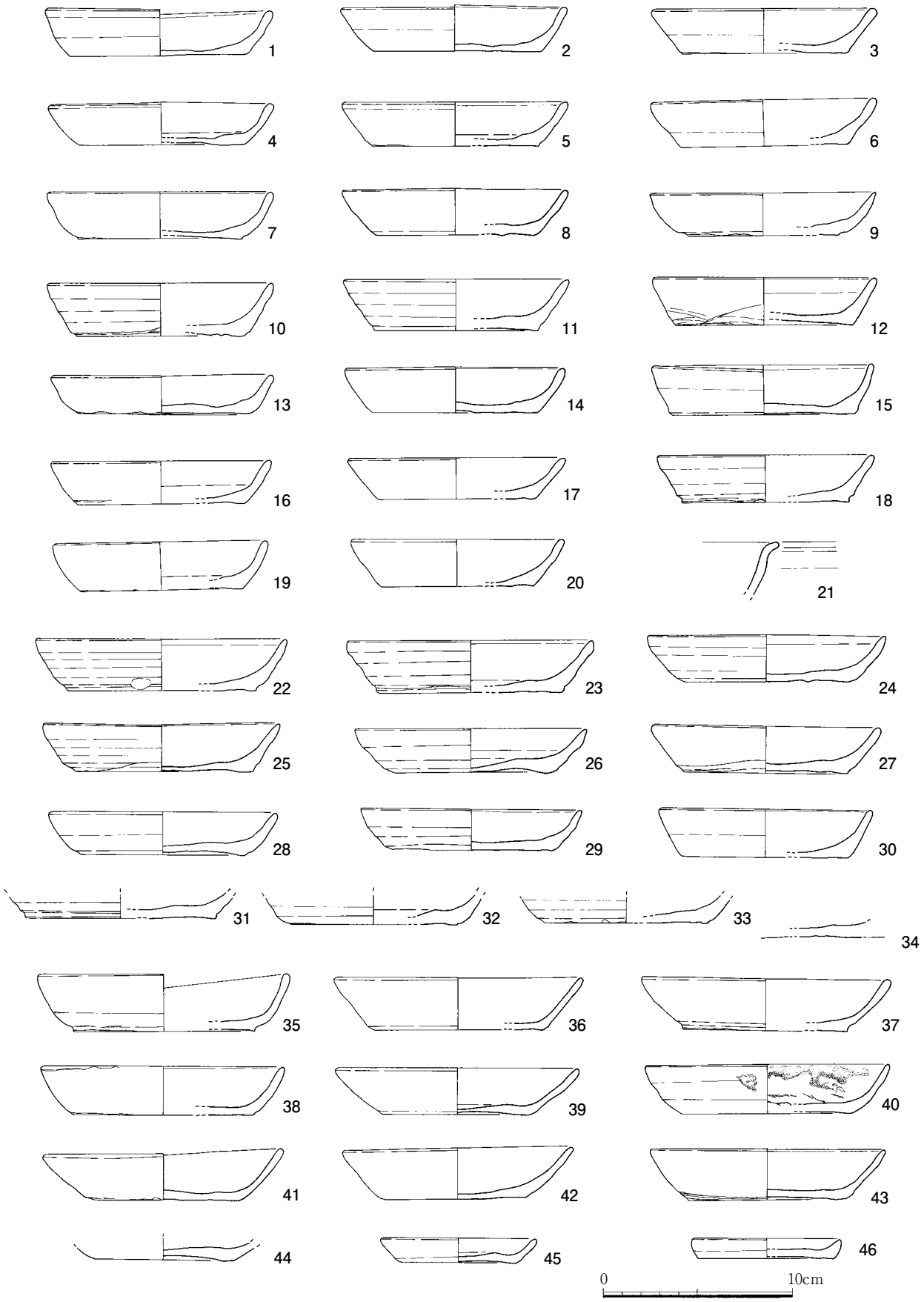
第24図　土師器坏集積遺構実測図（1/20）



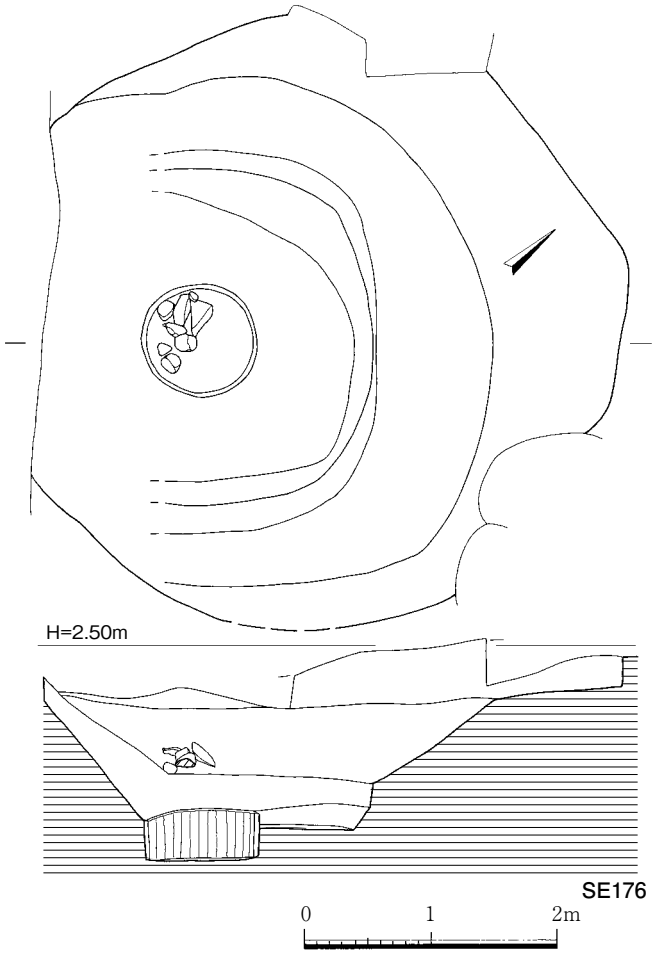
第25図　土師器坏集積遺構出土遺物実測図（1/3）



第26図土師器坏集積遺構出土遺物実測図（2）（1/3）



第27図　土師器坏集積遺構出土遺物実測図（3）（1/3）



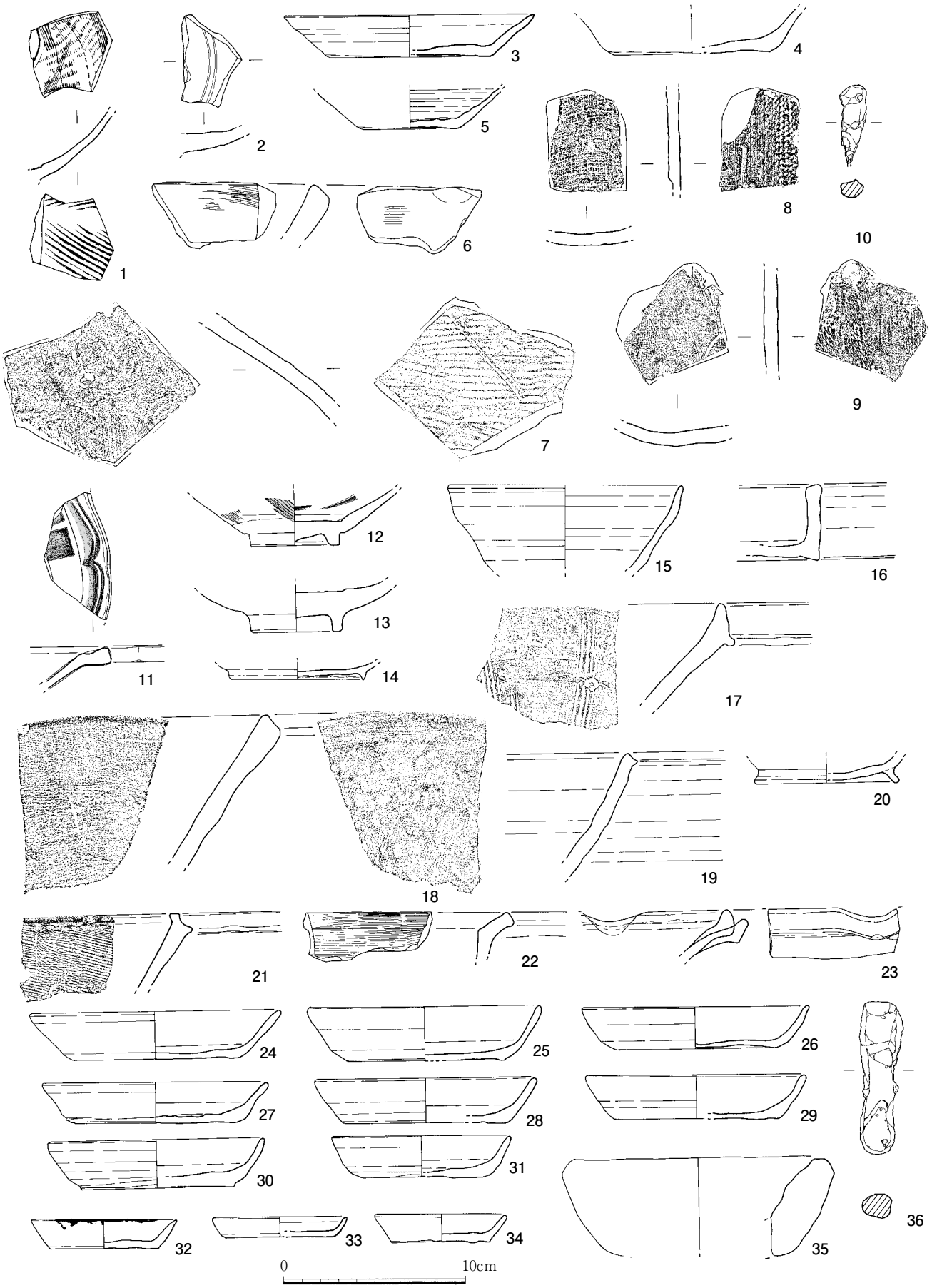
第28図　SE176実測図（1/60）

高1.3cm、1.1cm、底径6.6cm、7.7cmでいずれも糸切り離し底部である。

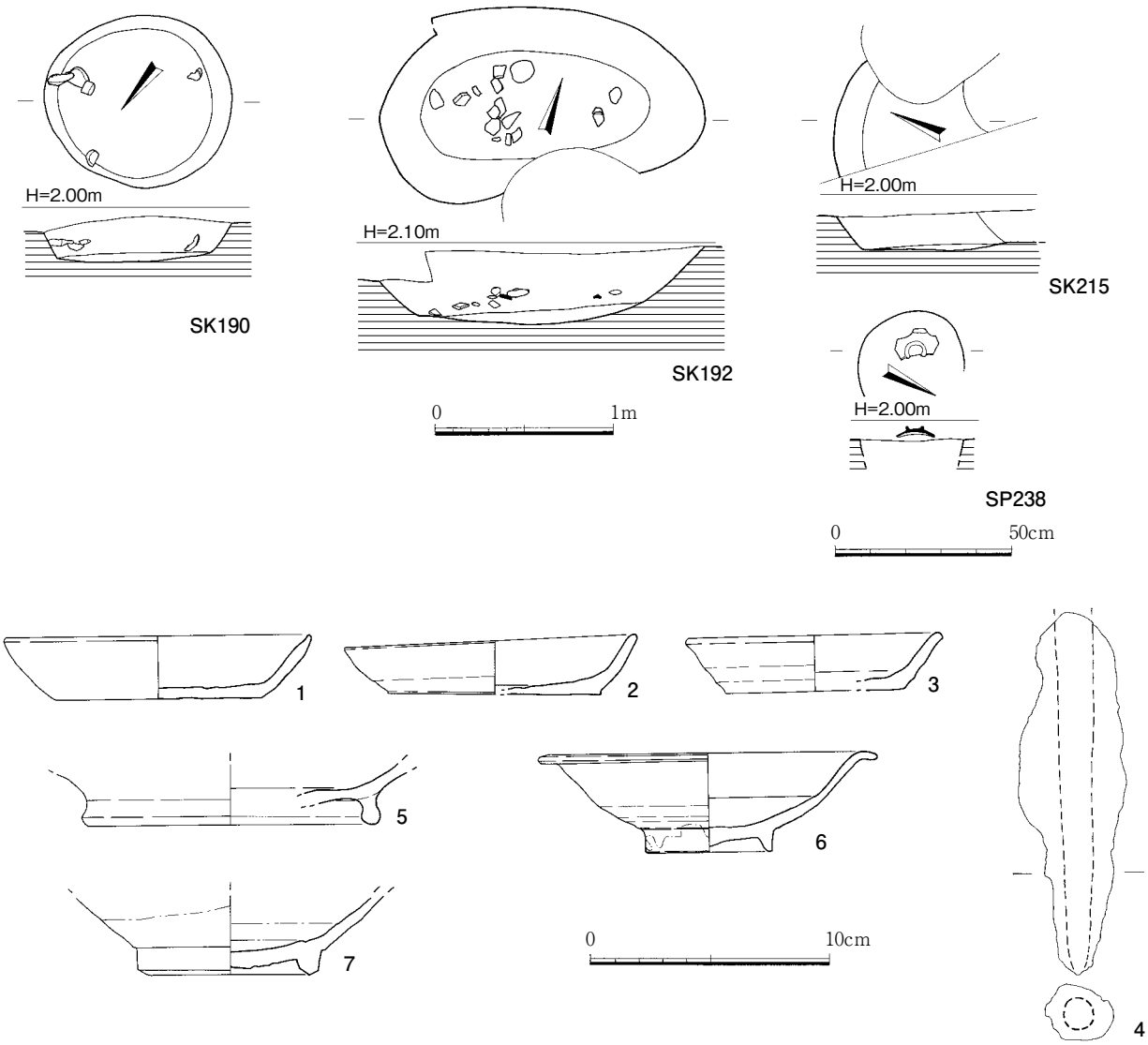
③井戸

SE176（第28図）　調査区南西壁際に位置する井戸である。第１面を設定し、遺構検出した段階で、掘方が確認できていたが、南東側が不明瞭であったためトレンチを随時設定しながら掘方の検出を行った。このため調査区南側が砂丘面まで下がってしまった。最大径が5.0m、検出面からの深さが1.7mの掘方であった。掘方やや西寄りで底部付近に結桶が据えられており井筒としている。井筒の上部に礫を投げ入れた痕跡が見られた。湧水点は標高0.7mである。出土遺物には青磁、白磁、瓦、擂鉢やこね鉢、土師器坏・皿、坩堝などがある。14～15世紀頃。

出土遺物（第29図）　１～10は井筒内から出土した。１は同安窯系の青磁碗胴部片。内外面に片切彫りの櫛描文が施される。２は粉青沙器の胴部片。内面に白化粧土による沈線が２条施され、灰褐色釉がかかる。３～５は土師器坏。３は13.8cm、器高2.3cm、底径8.8cm。糸切り離し底部。４は底径8.7cmで糸切り離し底部。５は底径5.2cmで内面にヘラケズリの跡が強く残る。口縁部に向かい大きく広がって立ち上がる。６は土師質のこね鉢か。７は須恵質の甕の胴部。外面にタタキ目が残る。８、９は平瓦。外面に縄目、内面には布目が残る。10は鉄釘、11～35は掘方内の出土。11は龍泉窯系の青磁皿。内面に花弁文が施される。12は同安窯系の青磁碗底部。内外面に櫛描文が施され、



第29図　SE176出土遺物実測図(1/3・1/4)

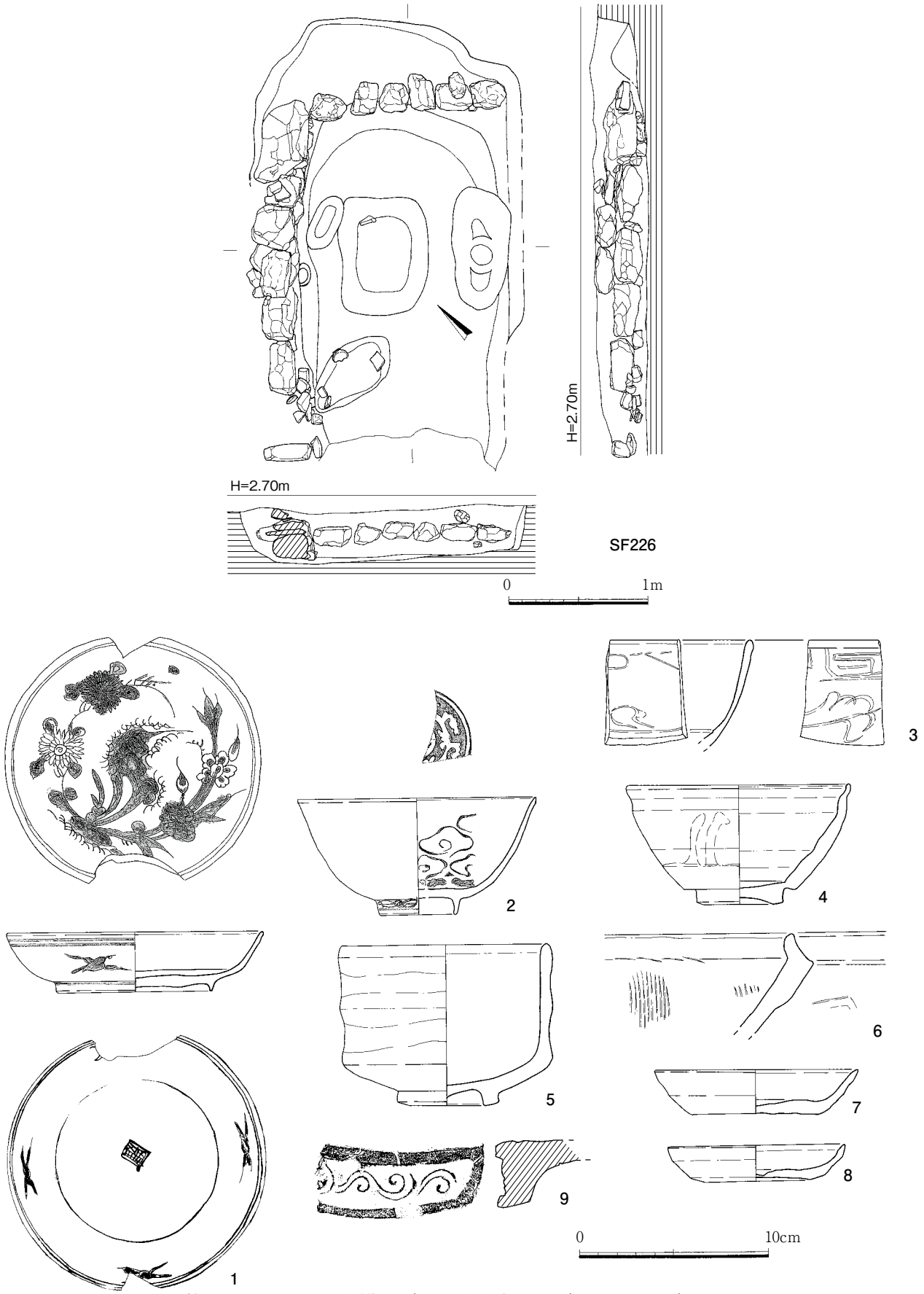


第30図　土坑・ピット及び出土遺物実測図（1/20・1/40・1/3）

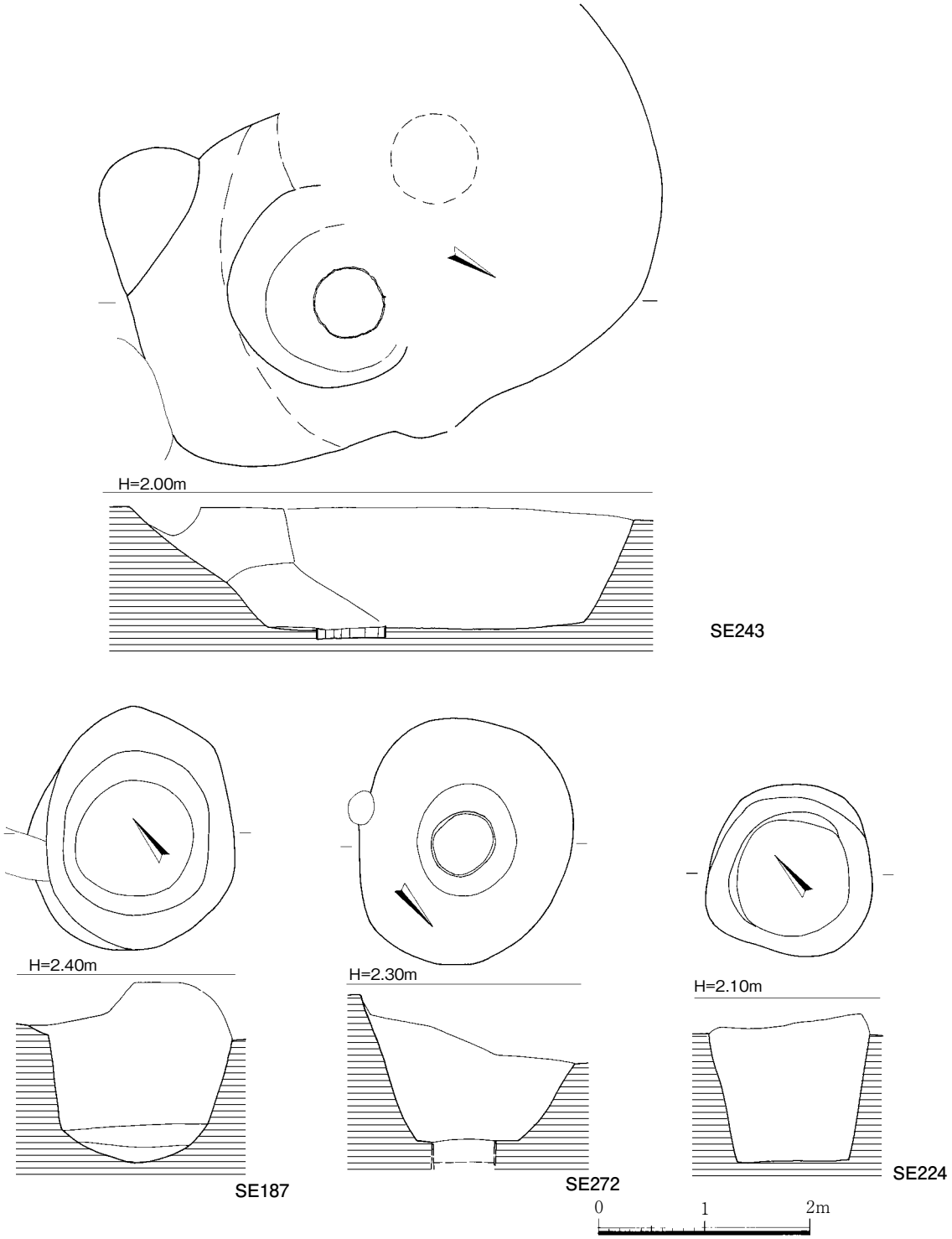
腰から高台内部までは露胎となる。13は青磁碗底部。見込みは釉を輪状掻き取り、畳付は露胎となる。14は白磁皿底部。畳付のみ露胎。15は天目碗か。淡黄色の胎土に黒褐色釉が全面にかかる。16は陶器の盤。17は備前焼の擂鉢口縁部。18は土師質のこね鉢か擂鉢。19は須恵質の鉢。20は須恵器坏の底部。21は土師質のこね鉢。22は瓦質の鍋か。外面に煤が付着する。23は須恵質の片口鉢。24～31は土師器坏。口径10.0～14.0cm、器高2.3～3.0cm、底径7.4～9.4cm。底部は糸切り離しだが、一部板状圧痕が残るものもある。32～34は土師器小皿。口径7.4～8.2cm、器高1.1～1.6cm、底径5.5～6.0cm。32は口縁部に煤が付着し、また底部には板状圧痕が残る。35は坩堝。口径15.0cm。36は鉄製品。長さ8.5cm。釘か。

④土坑・ピット

SK190（第30図）　調査区南端付近SE176の脇に位置する。長軸100cm、短軸95cmの平面円形、深さ30cmの土坑。土師器坏、礫が出土した。



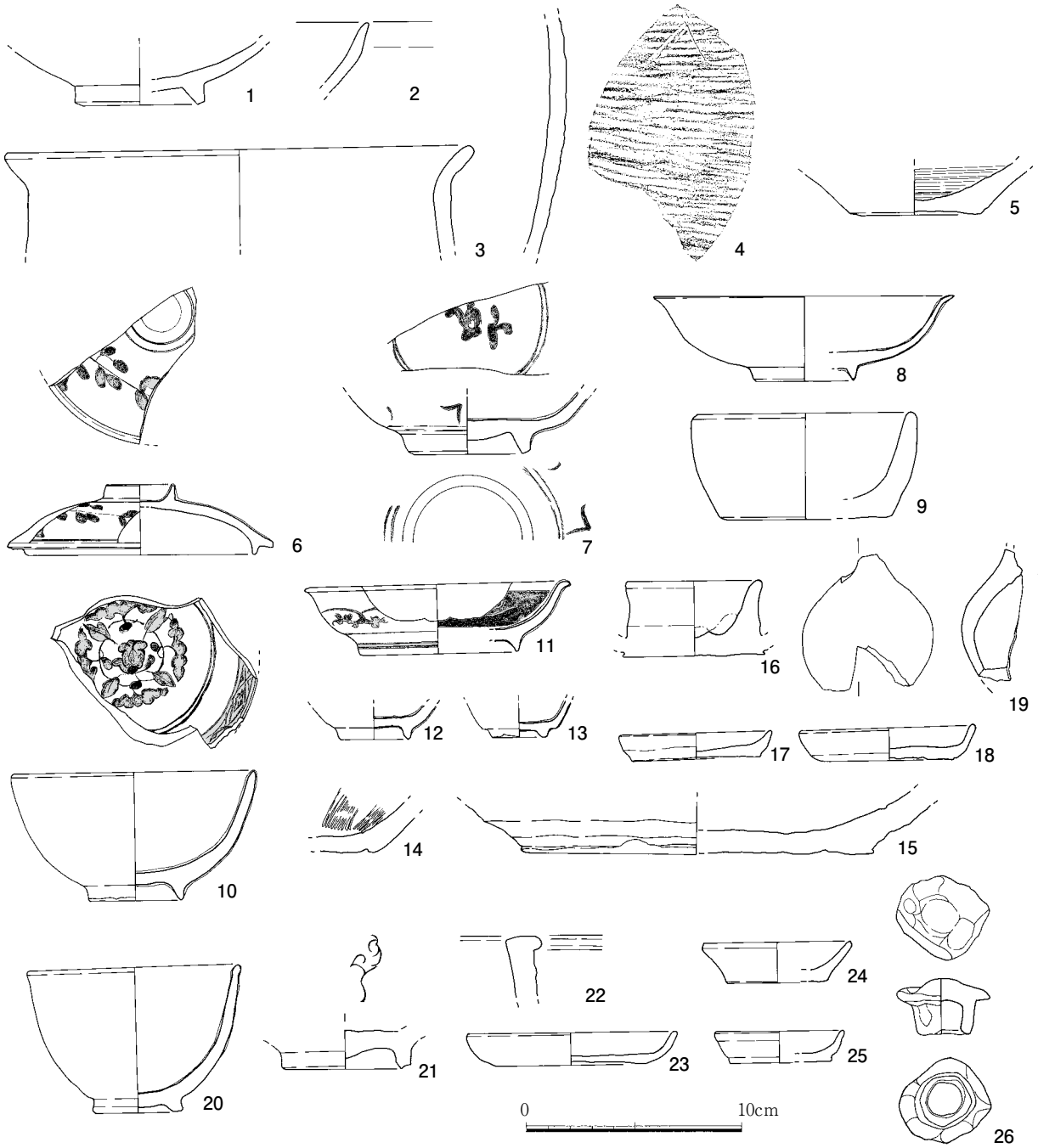
第31図　SF226遺構及び出土遺物実測図（1/40・1/3）



第32図　井戸実測図（1/60）

出土遺物（第30図１～４）　１～３は土師器坏。口径10.4～12.6cm、器高2.2～2.7cm、底径7.6～9.0cm。糸切り離し底部。４は鉄釘。長さ15.3cm。

SK192（第30図）　SK190の東側に位置する。長軸180cm、短軸120cmの平面楕円形、深さ40cmの土坑。礫、土器片が投棄されていた。



第33図　井戸出土遺物実測図（1/3）

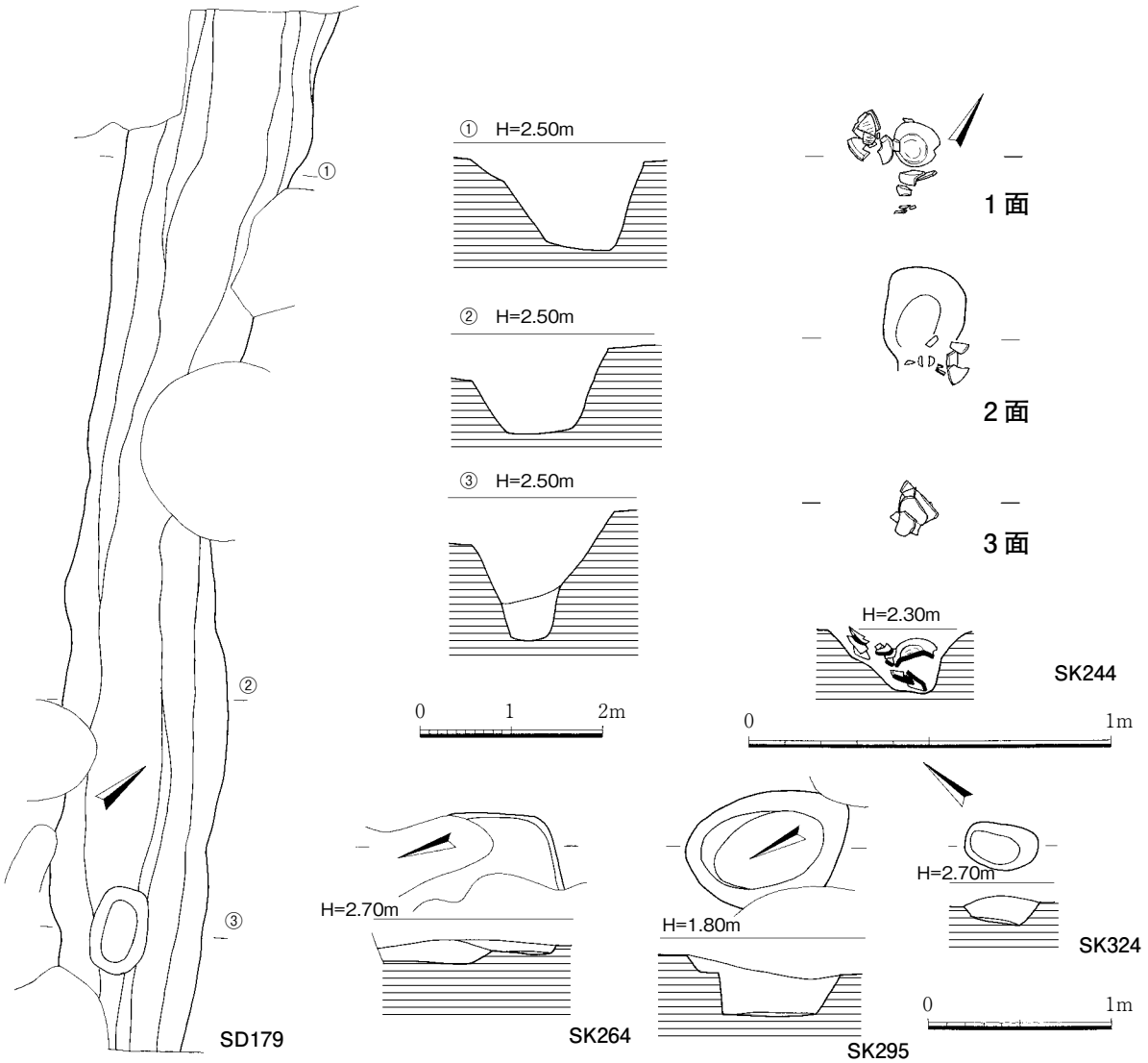
出土遺物（第30図５）　５は瓦器碗の底部。

SK215（第30図）　調査区西端に位置する。他の遺構に切られているため全容は不明だが、平面が楕円形、深さが20cmの土坑である。白磁碗が出土している。

出土遺物（第30図６）　６は白磁碗。高台から高台内部は露胎となる。

SP238（第30図）　SK215東側に位置する。伏せた状態で白磁碗が出土した。

出土遺物（第30図７）　７は白磁碗。見込み及び腰から高台内部までは露胎となる。



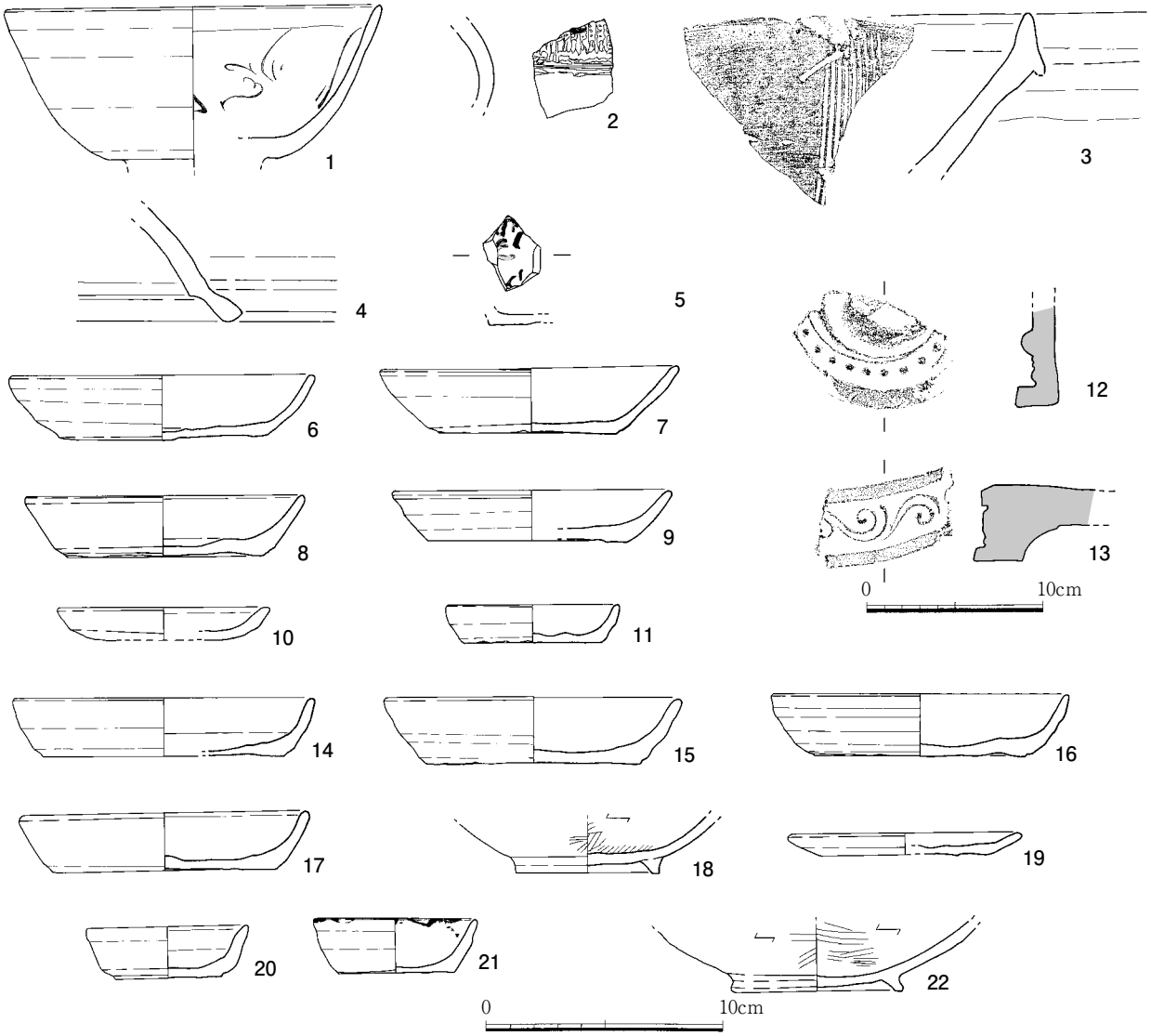
第34図　溝・土坑実測図（1/20・1/40・1/80）

（2）第２面の遺構と遺物

①石積土坑

SF226（第31図）　調査区東側寄りに位置する。第１面で掘方は検出されていたが、近接するSK236（集石遺構）を除去した段階で全容を確認したため、第２面検出の遺構とした。残存状態から、内法が2.2m×1.3m、30cm×50cm以下の礫を積み上げて形成しているが、礫は大部分が消失している。2段までしか礫は残っていない。床面には土坑状の掘り込みが数カ所見られ、肥前系陶磁器、瓦当が出土した。17世紀後半～18世紀の時期だろう。

出土遺物（第31図）　１は肥前系の染付皿。畳付は無釉となる。内面には二重圏線の内側に菊花などの草花文を描き、裏文様は４か所に草文を配する。高台内銘款には方形枠に変形字を配する。２は肥前系の染付碗。全面に施釉される。高台外側に変形した唐草文、見込には圏線の内側に花文が配される。また、口縁部から見込みの間は暗文が施される。３は青磁碗。外面には崩れた雷文と花文、内面には崩れた花文が施される。４は陶器碗。口縁部が緩くくの字形に屈曲して開き天目碗の名残を残す。腰から高台内部は無釉となる。５は陶器碗。胴部が直線的に伸びる筒形の器形。畳付のみ無釉と



第35図　溝・土坑出土遺物実測図（1/3・1/4）

なる。６は陶器擂鉢。口縁部がややくの字形。７、８は土師器坏。各々口径10.8、9.4cm、器高2.4、1.9cm、底径6.6、5.6cm。糸切り離し底部。９は軒平瓦。瓦当面に二重の唐草文を配する。

②井戸

SE243（第32図）　第１面でSE176を検出、掘削後、掘方東側壁面に井筒の痕跡が確認されたため、掘方を東側に拡張した。SE176井筒の東側に隣接して径が60cmの結桶状の井筒が検出された。SE176の井筒よりも残存状況はよい。標高0.6mで湧水点となる。SE176とは時期差はあまりないか、井筒を掘り直したと考えられる。

出土遺物（第33図１～４）　１は白磁碗底部。畳付から高台内部は露胎となる。２は瓦器碗の口縁部。３は土師甕の口縁部。４は須恵質の甕の胴部。外面にはタタキ目痕が見える。

SE187（第32図）　調査区の中央付近で検出した。第１面で掘方は検出していた。平面楕円形で長軸2.3m、短軸1.8m、深さ1.7m。標高0.6mで湧水点となる。出土遺物から18世紀頃と思われる。

出土遺物（第33図５～９）　５は土師質の甕の底部か。内面にはろくろ成形の痕が強く残る。６は

肥前系染付碗の蓋。葡萄蔓草文が描かれる。７は肥前系染付碗。畳付から高台内部は露胎となる。腰部と見込には二重圏線が引かれ、内部に変形した文字のような図像が描かれる。８は白磁皿。端反りの口縁部で畳付のみ無釉。９は瓦質の火入れか。

SE224（第32図） SE187の北側に位置する。平面楕円形で長軸2.2m、短軸2.0m、深さ1.6m。湧水点は標高0.6m。底部付近に粘土で目張りをした桶の痕跡が検出された。17世紀頃。

出土遺物（第33図10～19） 10は肥前系の染付碗。畳付は無釉となる。見込みには二重圏線の内側に花卉文、口縁部内側に菱型文を描く。11は肥前系の染付皿。端反りの口縁部で全面に釉がかかる。外面に唐草文、内面には波文が描かれる。高台に二重圏線が引かれる。12、13は白磁の猪口。14は擂鉢、15は陶器甕底部。16は土師器灯明皿。17、18は土師器小皿。各々口径7.0、8.0cm、器高1.7、1.6cm、底径6.0cm。糸切り離し底部。19は土鈴。

SE272（第32図） 調査区北隅付近に位置する。径1.5mの平面円形、深さ1.3m、湧水点標高0.6mの掘方。17世紀頃。

出土遺物（第33図20～26） 20は陶器碗。底部付近は露胎となり、釉が腰部に垂れかかる。21は龍泉窯系青磁碗。見込みに唐草文が配される。22は瓦質の火舎。口縁部に草花文のスタンプが押される。23～25は土師器小皿。各々口縁部9.5、6.8、6.0cm、器高1.5、2.0、1.4cm、底径6.8、4.6、4.6cm。糸切り離し底部。26は不明土製品。蓋の形状を成す。

③溝、集積遺構、土坑

SD179（第34図） 調査区の中央を北東－南西方向に走る。第１面から一部掘方は検出されていた。断面はＶ字状を呈し、深さは最深1.2m。延長7.6m。なお、この溝の延長はＩ区では明確に確認されていない。第１面検出のSX152がこの溝の名残であるとも考えられるが、断定はできない。14～15世紀頃の時期だろう。

出土遺物（第35図１～13） １は龍泉窯系の青磁碗。見込みに雲文を片切彫りで描く。２は粉青沙器の壷胴部。外面に白化粧土で縄簾文の印花を施す。３は備前焼Ⅳ期の擂鉢。９本１単位のすり目が施される。４は陶器の蓋。５は内面に墨書のある土師器小皿。６～９は土師器坏。口径11.9～13.0cm、器高1.7～2.9cm、底径7.6～8.9cm。板状圧痕が残る。10は瓦器の小皿。口径9.0cm、器高1.4cm。11は土師器小皿。口径7.4cm、器高1.7cm、底径3.0cm。12は軒丸瓦。瓦当面には太めの三巴文の周りに珠文を配する。13は軒平瓦。瓦当面には二重の唐草文を配する。

SK244（第34図） SD179北東寄りの東岸際で検出された土師器坏の集積遺構。検出状況からSD179より少し新しい時期か、ほぼ同時期と考えられる。

出土遺物（第35図14～17） 14～17は土師器坏。口径12.3～12.8cm、器高2.5～2.6cm、底径9.0～10.3cm。15、17は板状圧痕が残る。

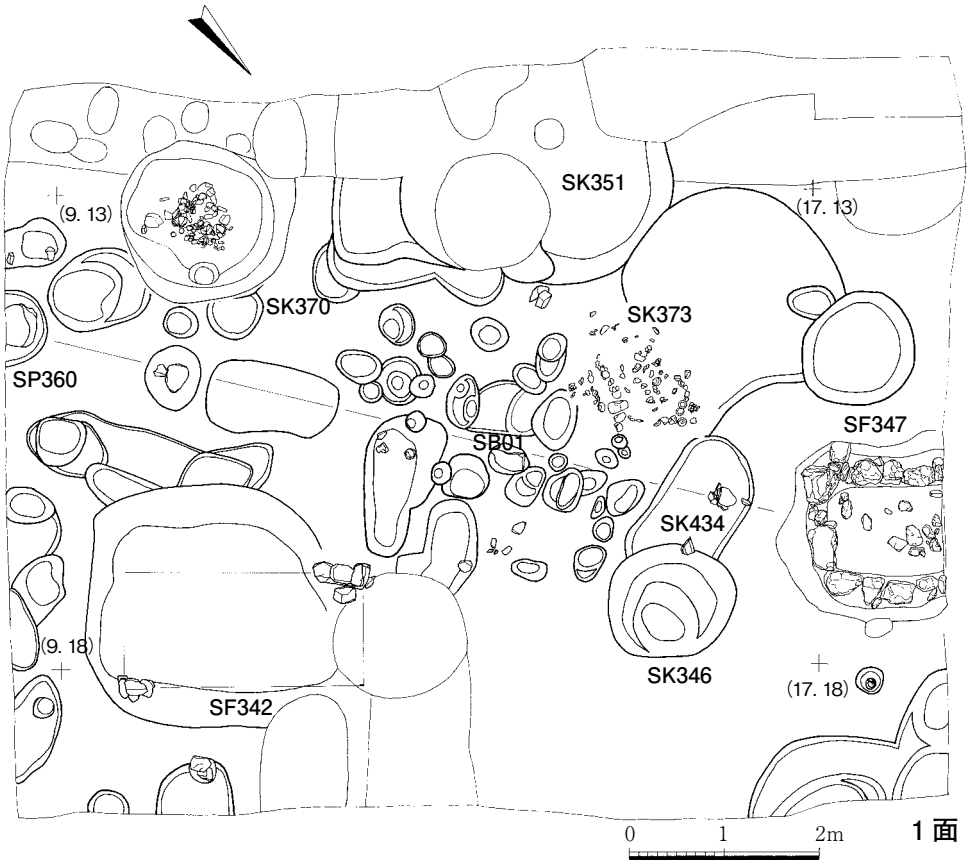
SK264（第34図） SF226の東側に位置する。長軸90cm、短軸40cm平面長方形、深さ10cm。

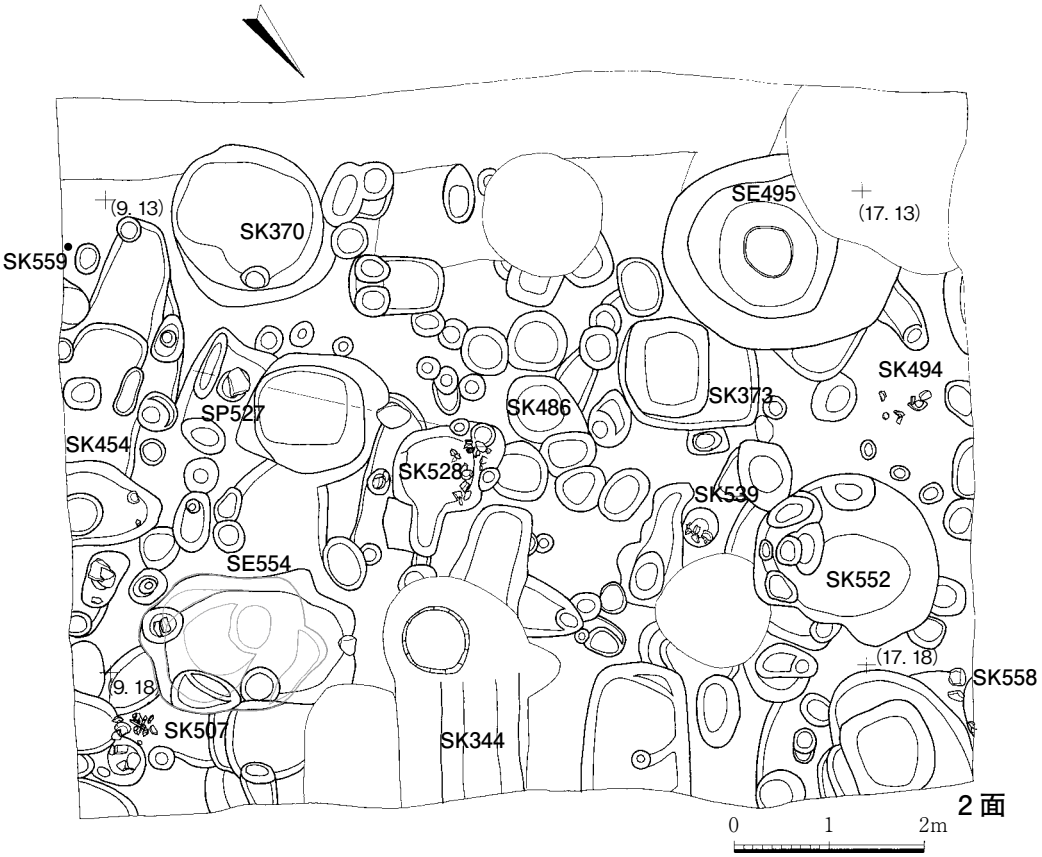
出土遺物（第35図18、19） 18は瓦器碗。内外面ともにミガキ調整。19は京都系土師皿か。口径10.0cm、器高1.0cm、底径7.2cm。底部にはヘラ切り痕が残る。

SK295（第34図） 調査区西隅付近に位置する。長軸90cm、短軸50cmの平面楕円形、深さ30cmの土坑。

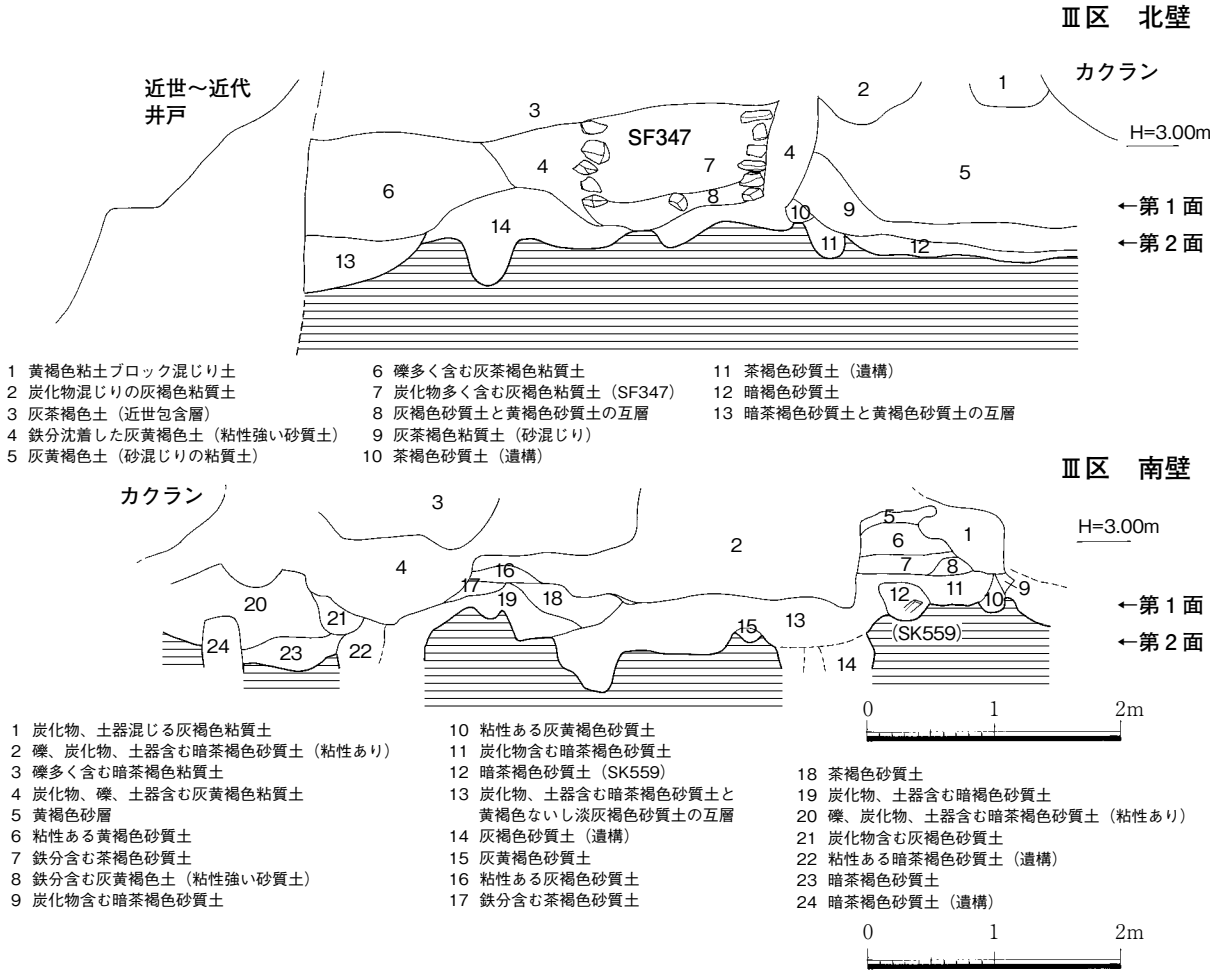
出土遺物（第35図20、21） 20、21は土師器小皿。21は煤が付着し、灯明皿として使用されていた。各々口径6.9、7.0cm、器高2.2、2.4cm、底径5.0cmで、板状圧痕が残る。

SK324（第34図） 調査区東寄り付近に位置する。長軸40cm、短軸25cmの平面楕円形、深さ





第36図　Ⅲ区遺構配置図（1 / 80）



第37図　Ⅲ区土層実測図（1/60）

15cm。

出土遺物（第35図22）　22は瓦器碗。内外面にミガキが残る。

5．Ⅲ区の調査

（1）第１面の遺構と遺物

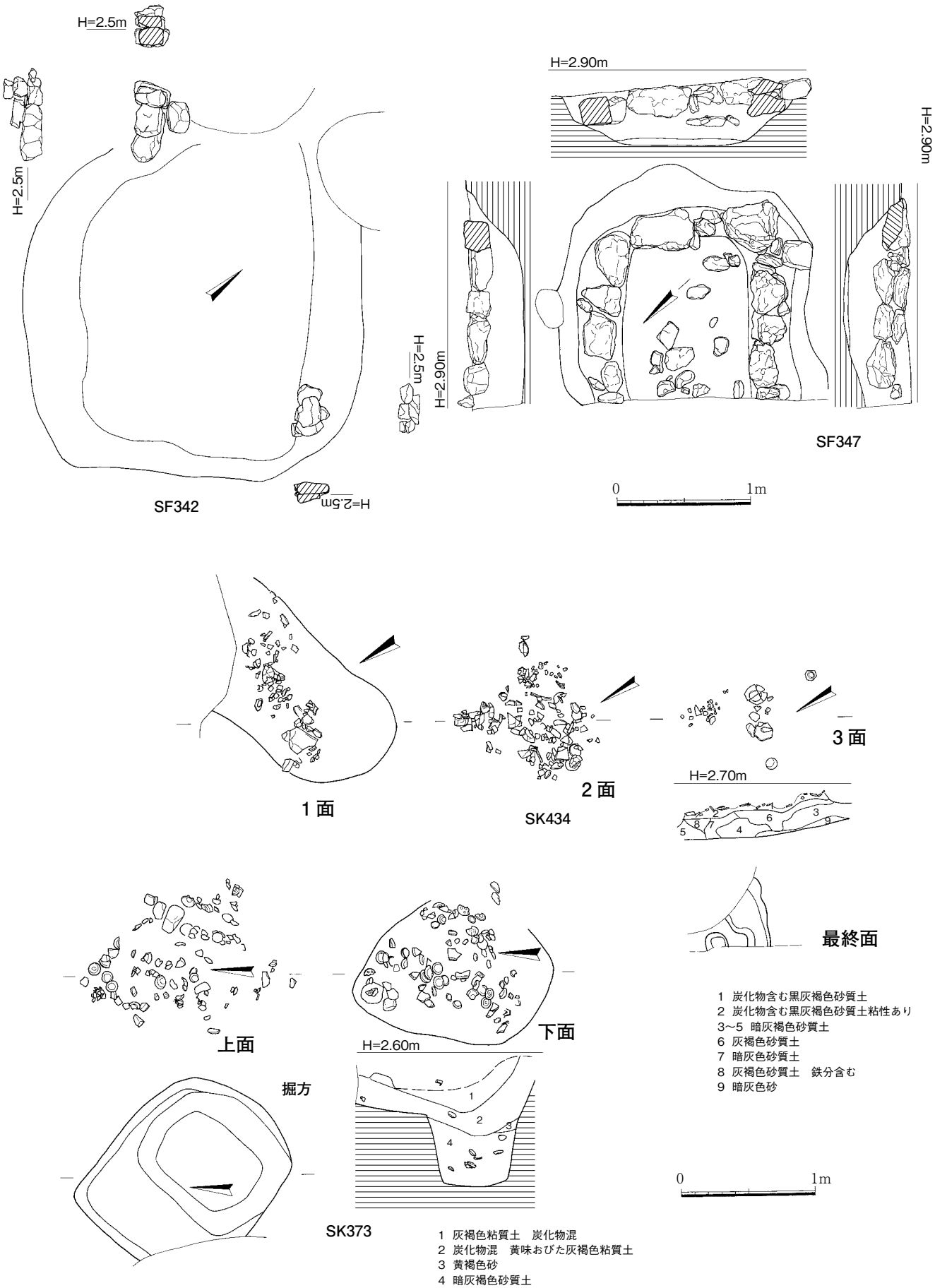
①石積土坑

SF342（第38図）　調査区の東隅付近に位置する。石はほとんど抜き取られ、角の２カ所に一部残存しているのみであった。推定法量は長さ2.5m、幅1.5mで石は一部３段まで残っていた。

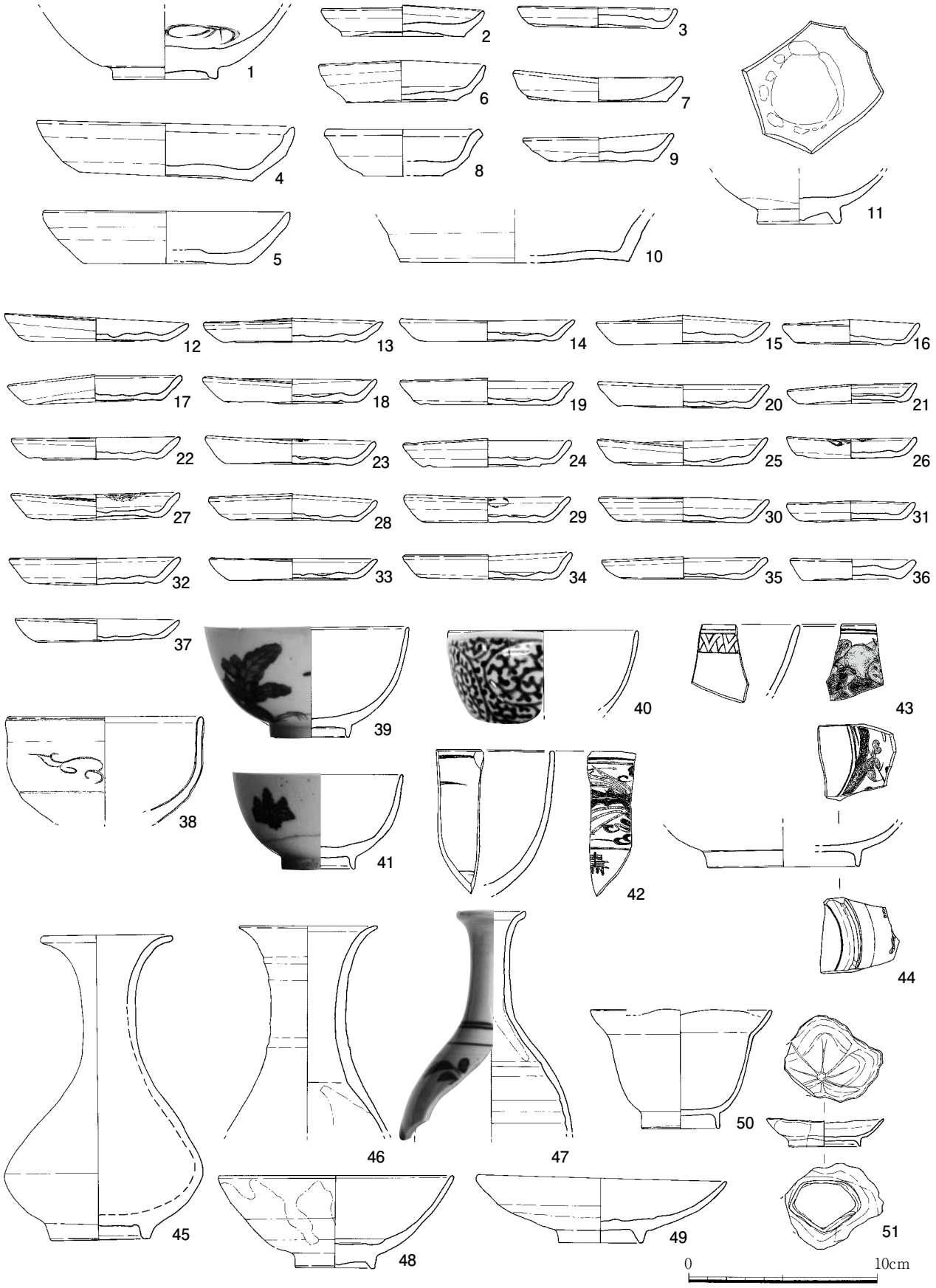
出土遺物（第39図）　１は龍泉窯系の青磁碗。見込みに花文が描かれる。高台内部は露胎となる。

SF347（第38図）　調査区北西側壁に一辺の石積みがかかる状態で検出された。検出範囲は内法幅90cm、残存長110cm。石積みは一部二段まで残存しているが、壁に残っている石積みの状況から４、５段程度は残っていたようである。遺構検出の段階で上部を削平している。床面には特に付帯施設は検出されていない。

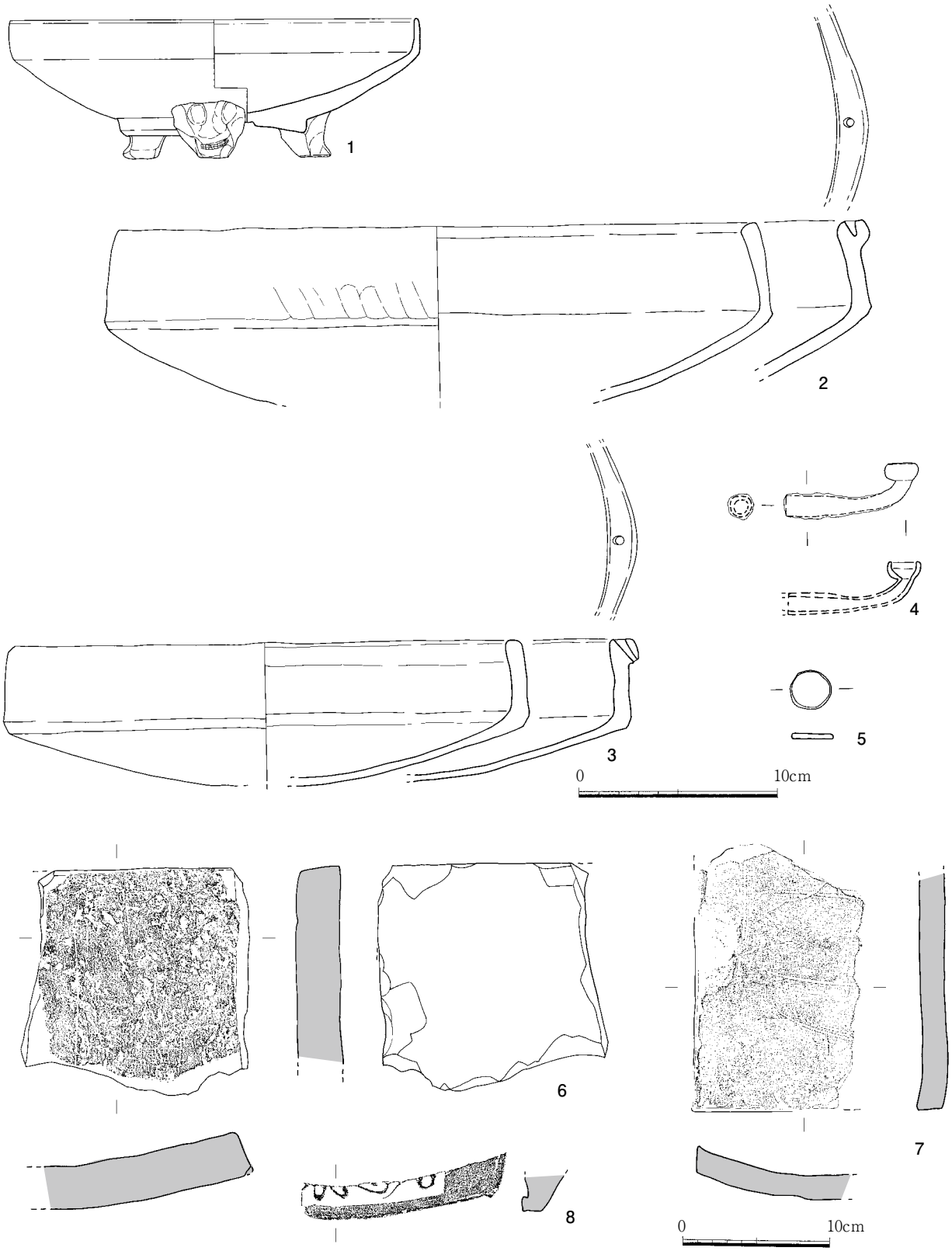
出土遺物（第39図２、３）　２、３は土師器小皿。口径8.3、8.9cm、器高1.7、1.1cm、底径6.7、7.2cm。糸切り離し底部。



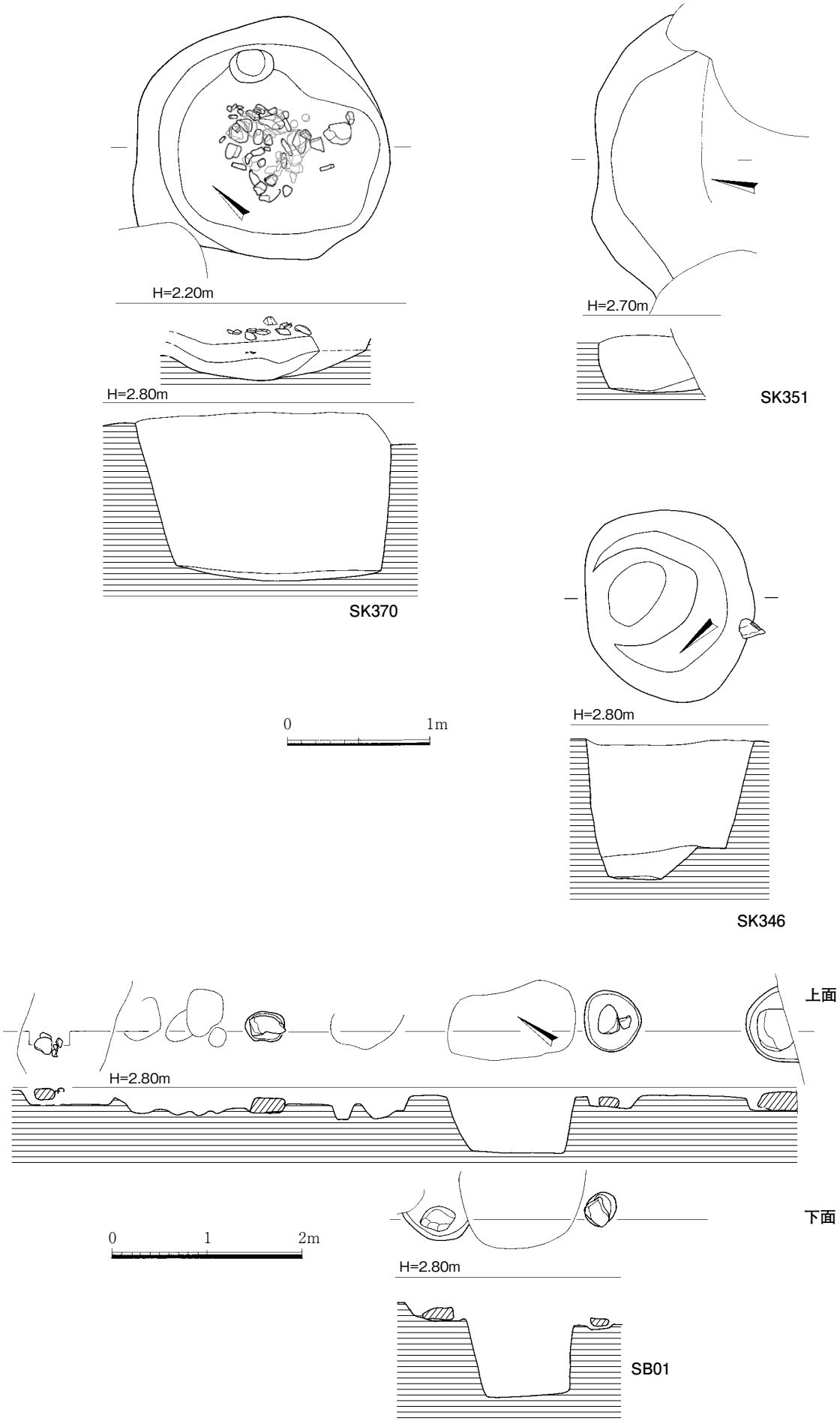
第38図 石積土坑・集積遺構実測図（1 / 40）



第39図　石積土坑・集積遺構出土遺物実測図（1/3）



第40図　SK373出土遺物実測図（1/3・1/4）



第41図　柱列・土坑実測図（1/60・1/40）

第42図　柱列・土坑出土遺物実測図（1/3・1/4）

②集積遺構

SK434（第38図）　調査区北寄りに位置する。土師器坏の集積であるが、破片が多い。

出土遺物（第39図４～11）　４、５は土師器坏。口径13.7、13.2cm、器高2.9、2.8cm、底径9.3、

8.8cm。糸切り離し底部。６～７、９は土師器小皿。口径8.1～8.9cm、器高1.1～1.7cm、底径5.7～7.6cm。糸切り離し底部で、９は板状圧痕が残る。８は瀬戸焼の陶器の小皿。10は陶器甕底部。11は陶器碗。腰から高台内部は露胎となる。見込みは目跡が残る。

SK373（第38図） 調査区西寄りに位置する。17世紀以降の土師器皿、磁器、陶器などが集中して投棄されていた。食膳具の他、瓦なども出土した。掘方は1.5m×1.2mの平面長方形を呈し、段掘り状となる。大型の箱を据えていたものか。17世紀後半頃。

出土遺物（第39図12～51、第40図） 12～36は土師器小皿。大きく２種類の大きさがある。口径8.8cm～9.8cmの大きさ、口径6.5～7.3cmの大きさ（16、21、26、31、36）である。いずれも薄手で糸切り離し底部。38は青磁碗、39～43は肥前系の染付碗。44は染付皿。45～47は瓶。45、46は陶器の瓶、47は染付瓶。48、49は皿。48は陶器碗。高台から高台内部は無釉、外面は釉を垂れかけ、文様とする。見込みは蛇の目状に釉を掻き取る。49は青磁皿。胴部下半から高台内部まで無釉、見込みは蛇の目状に釉を掻き取る。50は白磁の猪口。器壁は薄く、口縁部は波状となる。畳付は無釉となる。51は白磁小皿。外形及び高台は変形した花形を呈する。 第40図１は三足がつく陶器皿。脚は獣面を呈する。２、３は土師質の鍋。口縁部を一部張り出させて穿孔する。４は銅製のキセル。５は土製円盤。６、７は平瓦。８は軒平瓦。瓦当面に唐草文を配する。この他図示していないが、銅線に細い棘状の銅線を結びつけた有棘銅線とでも言うべきものが出土している（図版10）。

③柱列

SB01（第41図） 調査区中央付近を西北西－東南東の軸にとって位置する。柱穴の根石は４カ所確認された。また、第２面で２カ所の柱穴に対応する位置から根石が確認されており、建て直しがあったと考えられる。この列に対応する柱列は検出できなかった。図示できる遺物は出土していない。

④土坑

SK346（第41図） 調査区北寄りに位置する。長軸1.35m、短軸1.2mの平面楕円形、深さ95cmの土坑、もしくは井戸の可能性がある。土師皿、瓦が出土している。

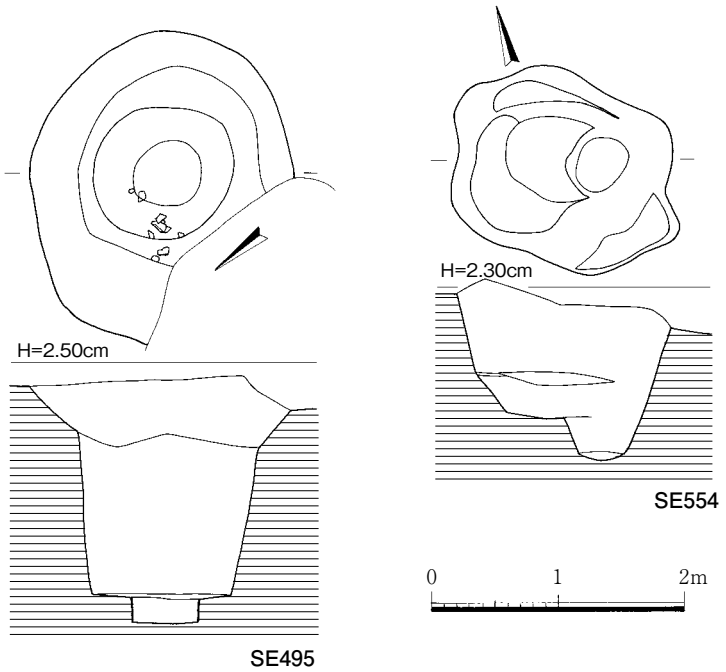
出土遺物（第42図１～10） １、２は土師器小皿。口径9.3、9.1cm、器高1.4cm、底径7.0、6.0cm。糸切り離し底部。３～６は軒丸瓦。３は瓦当面に橘文を配する。他は三巴文と珠文を配する。７は平瓦。穿孔があり、縄目の跡が見える。８は軒平瓦。瓦当面には唐草文が配される。９、10は丸瓦。９は内面に縄目が、外面には布目が見られ、「祈三」という文字が刻まれている。10は外面に布目跡が見え、文字が刻まれる。

SK370（第41図） 調査区南隅に位置する。径1.7mの平面円形、深さが1.1mの土坑である。掘方中央部で礫が多く投棄されていた。12～13世紀頃か。

出土遺物（第42図11～16） 11～13は瓦器碗。14は土師器坏。口径16.8cm、器高3.2cm、底径7.5cm。糸切り離し底部。15、16は京都系の土師器小皿。口径10.0cm、9.6cm、器高1.7cm、1.8cm。

SK351（第41図） 調査区南西壁付近、SE352の南に隣接する。近現代井戸に切られている。

出土遺物（第42図17、18） 17は明青花皿。畳付は露胎となる。見込に花文、高台に二重圏線が描かれる。18は頁岩製の一石経。「有」という文字が見えるほかは判読が困難である。８cm×６cmの楕円形を呈する。



第43図　井戸実測図（1/60）

（2）第２面の遺構と遺物

①井戸

SE495（第43図）　調査区西隅付近に位置する。長軸2.4m、短軸2.1mの平面楕円形、深さ1.9m、湧水点標高0.4mの井戸。底部に結桶状の井筒が残っていた。

出土遺物（第45図１～３）　１は高台がある土師器坏。見込みに墨書がみられる。２は不明土製品。類似品がSE272から出土している。３は瓦質の火舎。

SE554（第43図）　調査区東隅付近に位置する。SF372の床下下面で検出された。当初は大型の土坑と思われたが、掘り下げると木製の井筒が検出されたため、井戸と確認した。長軸1.7m、短軸1.5mの平面楕円形、深さ1.2m。湧水点は標高0.9m。

出土遺物（第45図４～８）　４は陶器のこね鉢。５、６は土師器坏。口径14.6cm、13.8cm、器高3.3cm、2.8cm、底径8.5cm、9.1cm。糸切り離し底部。７、８は土師器小皿。口径9.5cm、8.4cm、器高1.6cm、1.6cm、底径7.4cm、6.6cm。糸切り離し底部。

②土坑・ピット

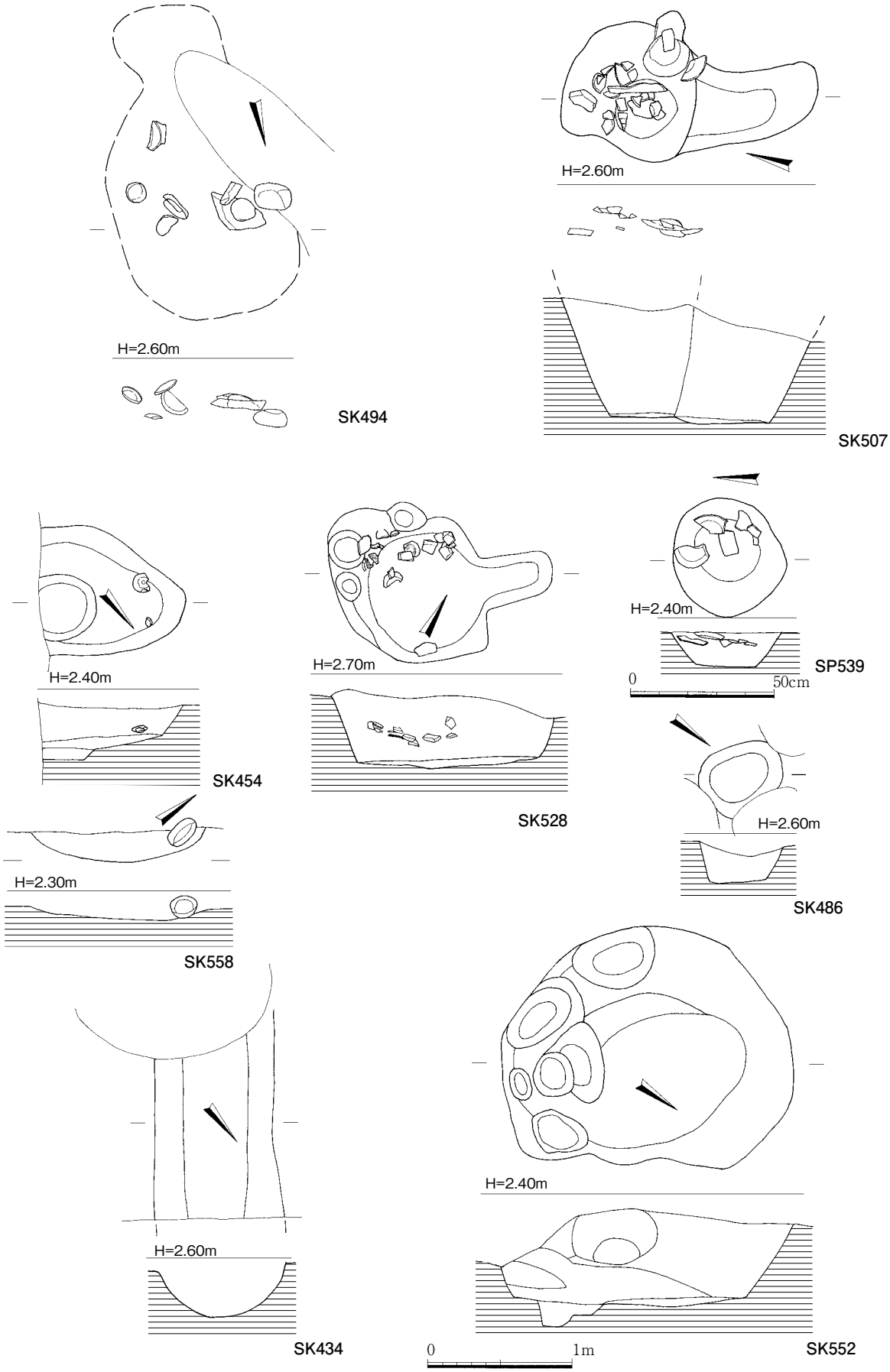
SK454（第44図）　調査区南東壁に接する。土師器坏、皿が出土している。13世紀代。

出土遺物（第45図９～14）　９は龍泉窯系の碁笥底の青磁皿。高台内部は無釉。10～12は土師器坏。口径13.3cm、器高3.1～3.3cm、底径7.4～8.3cm。糸切り離し底部だが、10、11は板状圧痕が残る。13は土師器小皿。口径9.0cm、器高1.6cm、底径7.4cm。糸切り離し底部。14は土錘。

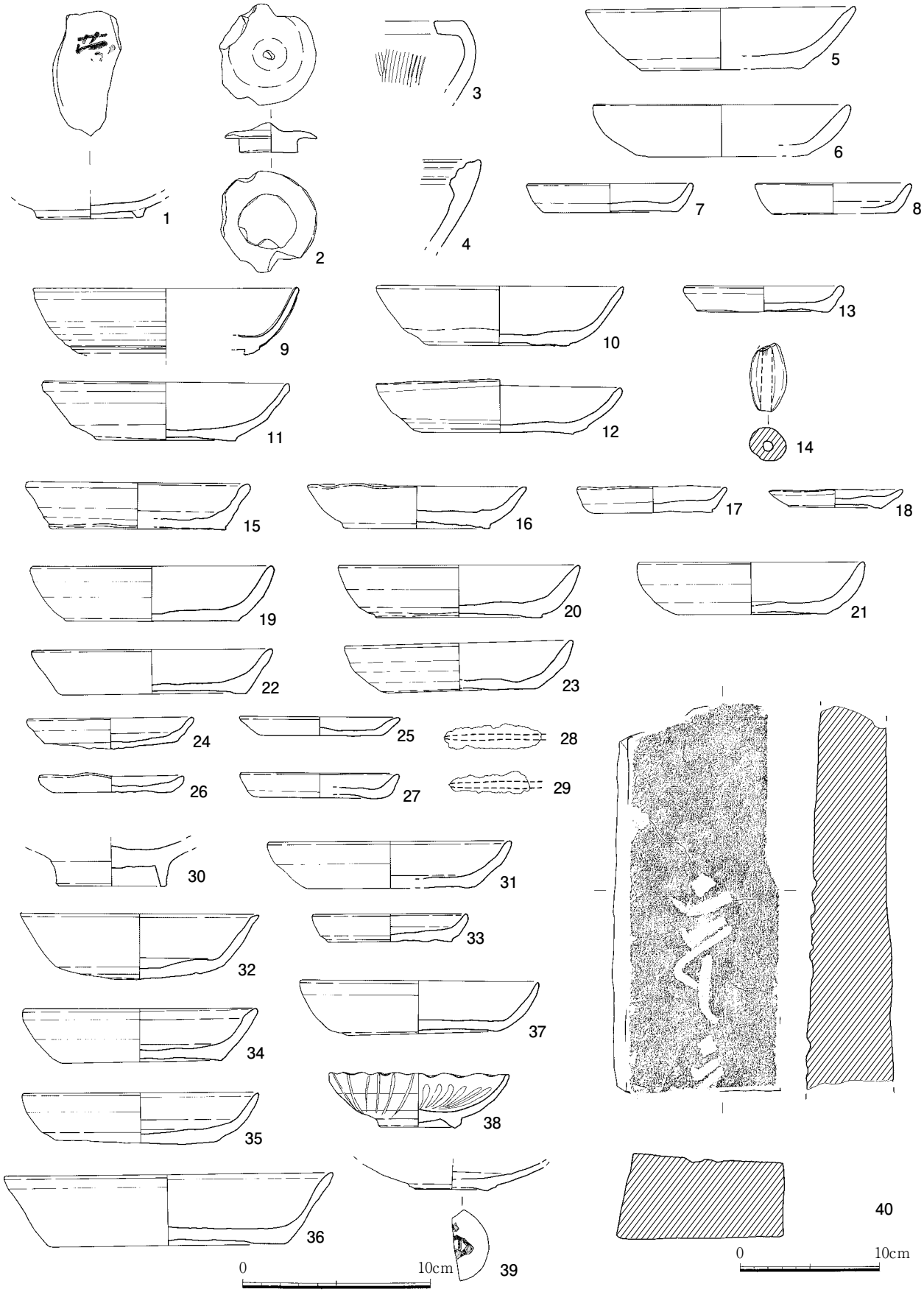
SK494（第44図）　調査区北西壁に接する。焼土中から土師器坏などが出土した。13世紀代。

出土遺物（第45図15～18）　15、16は土師器坏。口径13.9cm、13.3cm、器高3.1cm、2.9cm、底径7.4cm、8.3cm。糸切り離し底部。17、18は土師器小皿。口径8.0cm、7.1cm、器高1.4cm、1.0cm、底径6.5cm、4.9cm。糸切り離し底部。

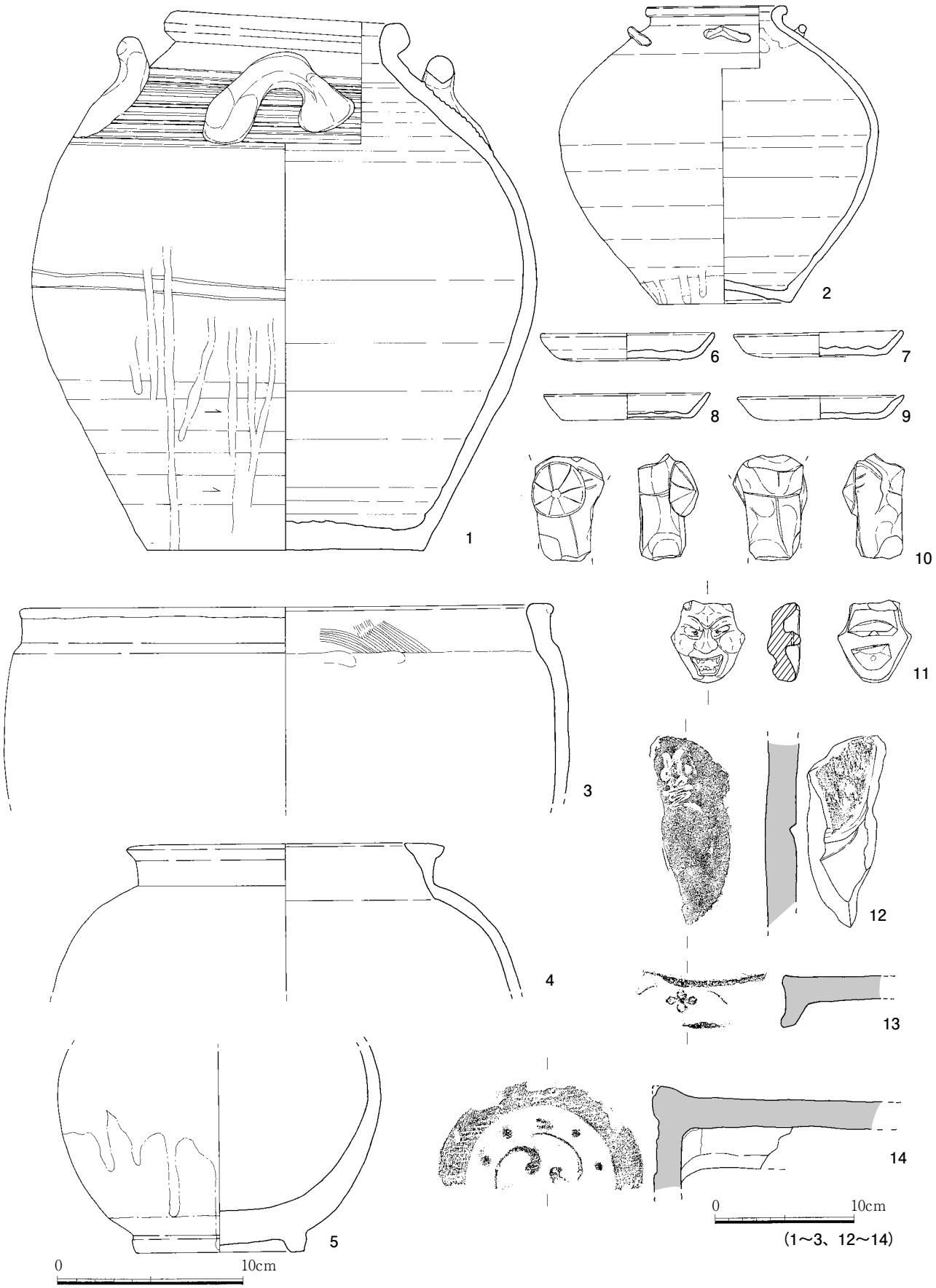
SK507（第44図）　調査区東隅付近に位置する。土師器坏、礫が集積した遺構。



第44図　土坑・ピット実測図（1/20・1/40）



第45図　井戸・土坑出土遺物実測図（1/3・1/4）



第46図　SK344出土遺物実測図（1/3・1/4）

出土遺物（第45図19～29）　19～23は土師器坏。口径12.0～12.8cm、器高2.4～2.9cm、底径8.0～9.8cm。糸切り離し底部。24～27は土師器小皿。口径7.6～8.8cm、器高0.9～1.7cm、底径6.4～7.2cm。糸切り離し底部。28、29は鉄製釘。

SK528（第44図）　調査区中央付近に位置する。第１面から検出していたが、第２面で明確に確認できたため、第２面の遺構とする。長軸1.6mの変形した楕円形を呈する。土師器坏や礫が出土した。14世紀代。

出土遺物（第45図30～33）　30は白磁碗。高台は露胎となる、31、32は土師器坏。口径13.0cm、12.8cm、器高2.5cm、3.4cm、底径9.0cm、11.0cm。いずれも板状圧痕が底部に見られる。33は土師器小皿。口径8.4cm、器高1.5cm、底径6.8cm。糸切り離し底部。

SP539（第44図）　調査区中央からやや北寄りに位置する。径40cmの平面円形のピット。土師器坏、礫が出土した。

出土遺物（第45図34）　34は土師器坏。口径12.6cm、器高2.9cm、底径8.8cm。底部は板状圧痕がある。

SK558（第44図）　調査区北西壁北隅付近で壁に切られた状態で検出した。遺物は壁中で土師器坏と白磁皿が重なった状態で検出された。

出土遺物（第45図37、38）　37は土師器坏。口径12.8cm、器高3.0cm、底径8.4cm。底部に板状圧痕が残る。38は白磁皿。外面、内面に斜めに条線を刻み、口縁部は波状を呈する。畳付から高台内部は露胎となる。

SK486（第44図）　調査区中央付近に位置する。長軸60cm、短軸40cmの平面楕円形の土坑。

出土遺物（第45図39）　39は白磁皿。高台内部に墨書がある。底部付近は露胎。

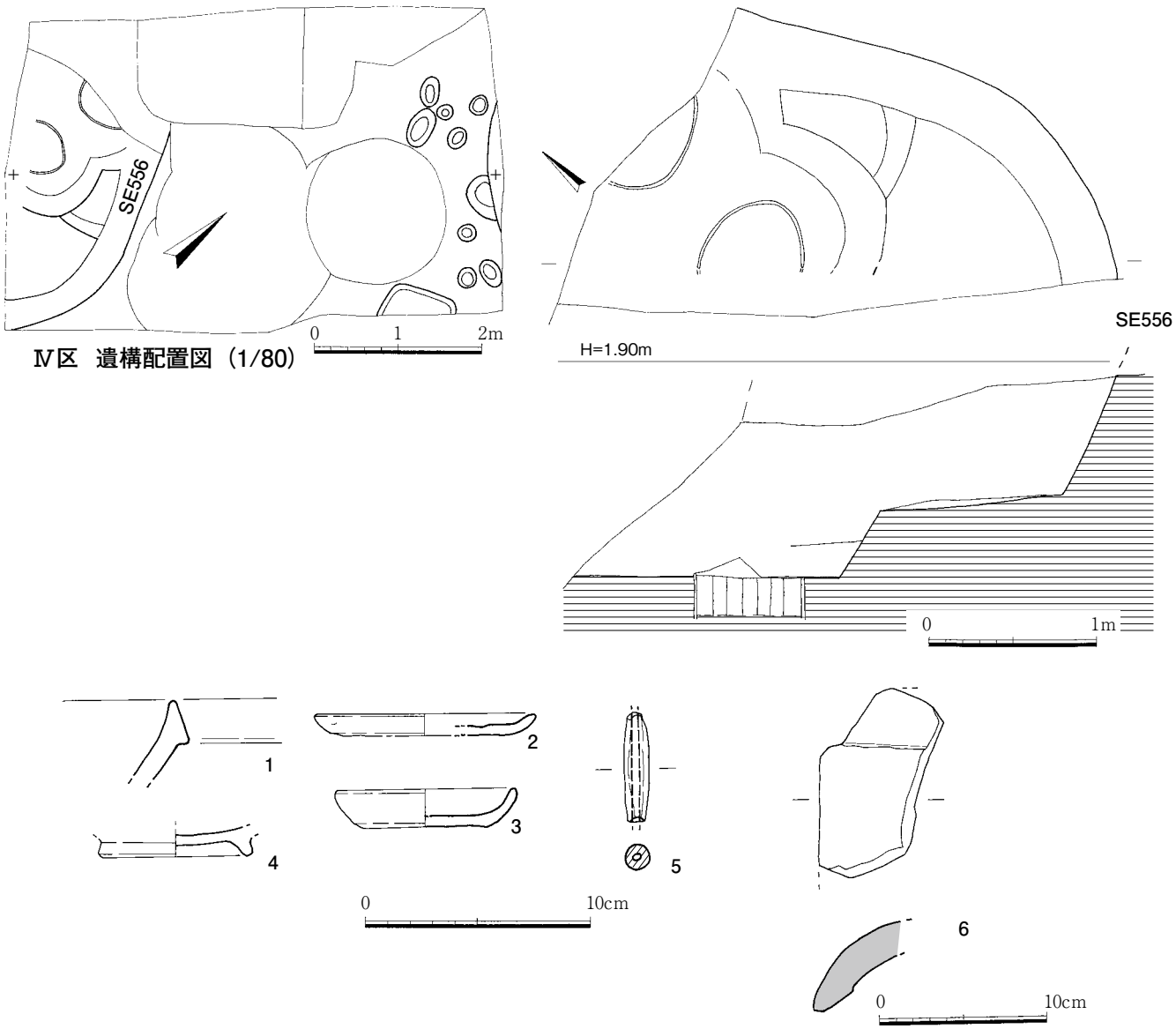
SK552（第44図）　調査区北隅付近に位置する。SF347を除去した後、下層から検出した。

出土遺物（第45図35、36）　35、36は土師器坏。口径12.8cm、17.6cm、器高2.7cm、3.8cm、底径8.7cm、12.6cm。35は板状圧痕が底部に残る。

SK344（第44図）　調査区北東壁に位置する。陶器類が多く出土している。タイの陶器壷が検出された。出土遺物から17世紀後半以降と考えられる。

出土遺物（第46図）　１はタイ産の陶器壷。口径16.7cm、器高38.2～39.0cm、底径20.0cm。頸部はハケメ状の工具で横方向に調整し、胴部中央にも２条の沈線が巡る。外面はケズリで調整される。頸部におそらく４か所耳が付く。外面には薄く淡赤褐色の釉がかかるが、胴部中央から釉をかけ流して文様状にする。胎土は明赤褐色を呈する。２は褐釉陶器の三耳壷。黄褐色胎土に暗褐色の釉が外面全面にかかるが、底部付近は釉を垂れ掛ける。内面は無釉となる。３は土師質の甕。４は陶器壷。内面に格子目状のタタキ痕が残る。外面及び内面に釉がかかる。５は陶器壷。内外面に釉がかかるが、外面底部付近は露胎となり、釉を垂れ掛けて文様とする。６～９は土師器小皿。口径9.0～9.4cm、器高1.3～1.4cm、底径6.0～7.6cm。糸切り離し底部。10、11は土製品。10は人形の一部か。笠状のものが貼りつく。11は鬼の面状の装飾品か。全面に明黄褐色の釉がかかる。12は丸瓦。外面に文字が刻まれる。13は軒平瓦。瓦当面に四弁の花文と唐草状の文様が配される。14は軒丸瓦。瓦当面に三巴文と珠文が配される。

SK559（第45図40）　調査区の南隅の壁に突き刺さる状態で検出された板碑である。遺構は伴わない。砂岩製で残存長28.0cm、幅10.7～12.0cm、厚さ6.2cm。梵字が２文字刻まれている。上の文字は「バン」（金剛界大日如来）、下の文字は不明である。



第47図　Ⅳ区遺構及び出土遺物実測図（1/80・1/40・1/3・1/4）

6．Ⅳ区の調査

（1）遺構と遺物

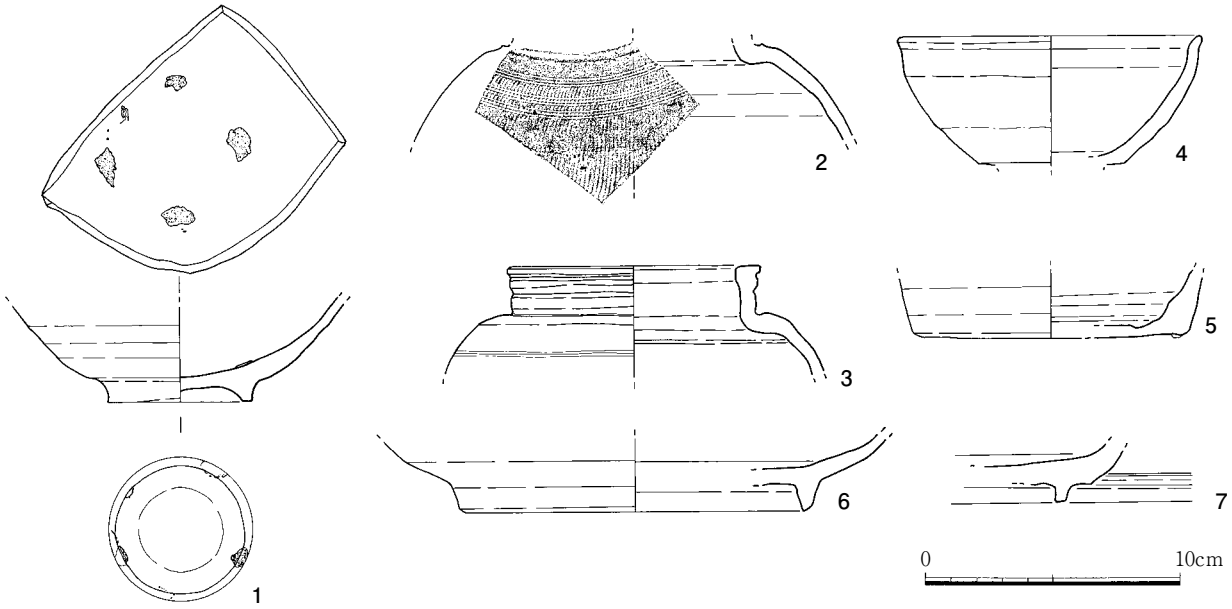
Ⅳ区は砂丘面まで攪乱が及んでおり、砂丘面上のみの調査となった。近現代の井戸の他、ピット、井戸などが検出された。

SE556（第47図）　調査区の南西壁に接して位置する。井筒が２基検出された。

出土遺物（第47図１～６）　１は備前焼の擂鉢。２、３は土師器小皿。口径10.0cm、8.0cm、器高1.0cm、1.7cm、底径7.3cm、5.5cm。４は高台が付く土師器坏。５は土錘。６は丸瓦。

7．トレンチ調査（第２図・図版９）

未試掘部分の遺構の有無の確認を行うため、敷地内に設定した３区の調査区の他、３カ所にトレンチを設定した。



第48図　陶磁器実測図（1/3）

トレンチ１

敷地東隅、Ⅳ区の北東側に設定した。GL-2ｍ以上重機で掘削したが、盛土が続き、Ⅳ区の調査区の状況と合わせて、砂丘面まで攪乱が及んでいると考えられる。

トレンチ２

敷地北東壁の北寄りに設定した。GL-3ｍまで盛土が続いており、遺構の存在は確認できなかった。

トレンチ３

Ⅳ区北西壁から北西に向けトレンチを設定した。旧建物の基礎が続き、掘削は不可能であった。Ⅳ区の状況と合わせて、砂丘面まで攪乱が及んでいると考えられる。

８．その他の出土遺物

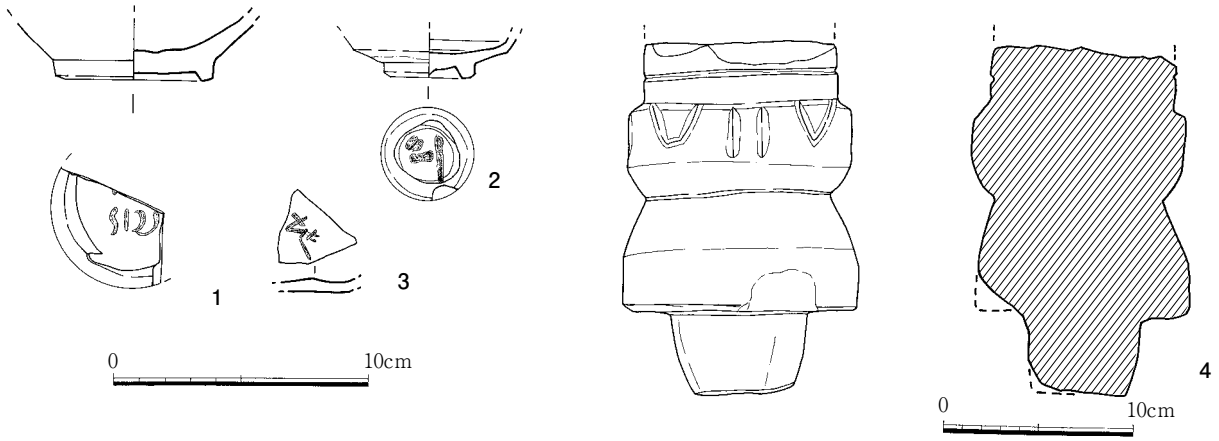
ここでは、包含層などから出土した遺物についてとり上げる。

（１）陶磁器（第48図）

１は朝鮮半島系の白磁碗か。Ⅰ区第１層包含層より出土。全面に施釉されるが、畳付は無釉となる。見込み及び畳付に４～５ヶ所砂目積み跡が残る。２は陶器壷。Ⅰ区第１層包含層より出土。外面に縦方向の細かなハケメと横方向に沈線が巡る。赤褐色の胎土だが、内外面は灰～灰黄褐色を呈する。３は陶器の壷。ベトナム産。遺構掘方より出土。灰色胎土の外面に施釉する。赤褐色～茶褐色を呈する。４は国産の天目碗。Ⅰ区第１層より出土。砂を多く含む胎土に茶褐色釉がかけられる。５はベトナム産の陶器瓶底部。灰白色胎土に外面に褐色釉がかけられる。６は中国産の白磁皿。Ⅱ区第１層より出土。畳付は無釉となる。７は青磁碗。Ⅰ区第１層より出土。高台内部は無釉となる。腰部に沈線が巡る。タイ産か。

（２）その他の遺物（第49図）

１は陶器碗。高台内部に墨書がある。腰部から高台内部は無釉となる。２は白磁碗。Ⅰ区第１層より出土。腰から高台内部は露胎、見込みを蛇の目状に釉をかきとる。高台内部に墨書がある。３は土



第49図　その他の遺物実測図（1/3・1/4）

師器皿。Ⅰ区第１層より出土。内面に「地」の墨書がある。４はⅠ区第１層出土。砂岩製の石塔。宝篋印塔の相輪の部分と思われる。

９．まとめ

以上調査内容を述べてきたが本調査地点の特色をいくつか挙げて総括としたい。

①古くは９世紀代の黒色土器や須恵器片の遺物が見られるが、明確な遺構としての初現は12～13世紀（SK370）である。

②14世紀前後の時期と思われる土師器の集積遺構が多く確認された。中でもSK104は、その大半に墨書が見られ、同じ文字２枚１組の土師器坏を重ねて柱の根石の近くに埋納した状況が見られる。地鎮に関連する祭祀的行為が営まれていたと考えられる。

③息浜が繁栄した16世紀～17世紀初頭頃の中国、朝鮮半島の輸入陶磁器の出土量が少ない。

④タイ、ベトナムなどの東南アジア産輸入陶磁器が出土している。

⑤一石経、板碑、石塔が出土している。板碑や石塔の時期は明瞭でないが、墓標としての性格を有していたとすると、近辺に寺院が存在した可能性も考えられる。

⑥坩堝（SE176）や、図示していないが鉄滓の出土から、近辺に製鉄関連の工房があったと考えられる。

⑦17世紀後半から18世紀頃にかけての肥前系の陶磁器類が多く出土した遺構（SK10、SF226、SK373）が確認された。

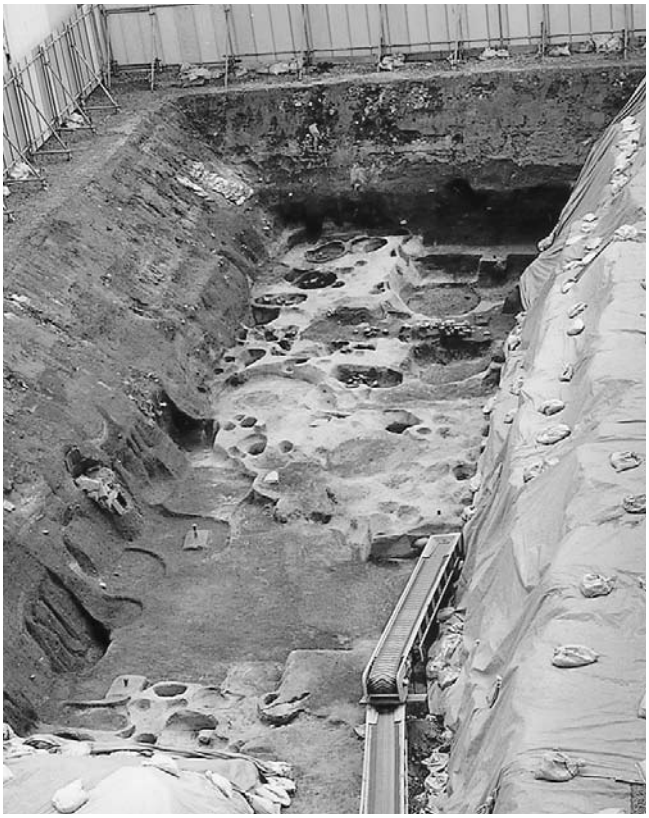
以上から考察すると、本調査地点において生活が営まれたのは12～13世紀以降であるが、14～15世紀にかけては息浜に建立されたとする妙楽寺やその他寺院との関連性が伺えるのではなかろうか。そして16世紀から17世紀初頭にかけていったん空白の時期を迎えるが、17世紀後半以降に、再度居住域として展開していったのだろう。

（参考文献）
降矢哲男「博多遺跡群における地鎮め遺構について」『博多研究会誌』第8号　2000年
降矢哲男「九州地方における地鎮めの様相」『続文化財学論集』　2003年
吉田扶希子「福岡市内出土の五輪塔と板碑」『博多41』福岡市埋蔵文化財調査報告書第370集　1994年

図版１

Ⅰ区第１面全景（北東から）

Ⅰ区第２面全景（北東から）



Ⅰ区第３面全景（北東から）

SF05（南東から）

SF07（西から）

SF15（北東から）

SX14（北東から）

SK104（東から）

SK29（北西から）

SK36（北西から）

SK31（北西から）

SE111（北西から）

SE163湧水点（北から）

図版 3

SX152（北西から）

SK118（北西から）

SK120（北西から）

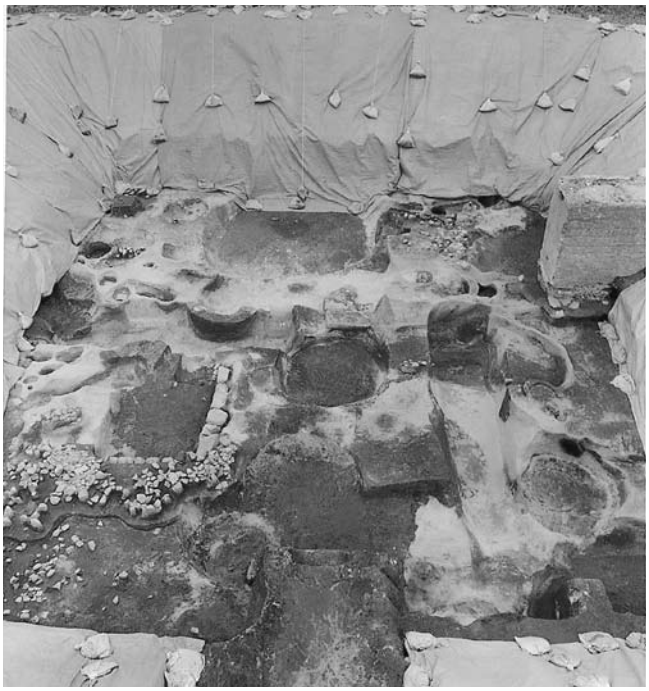
SK164上面（北西から）

SK164下面（北西から）

SK168（南東から）

SK168焼土下面（南東から）

SK168下層（南東から）



Ⅱ区第１面全景（北東から）

Ⅱ区第２面全景（北東から）

SX222（南西から）

SX236（北西から）

SF226、SX236（南東から）

SK171 上面（北東から）

SK171 断面（北東から）

SK177（北東から）

図版 5

SK178（北西から）

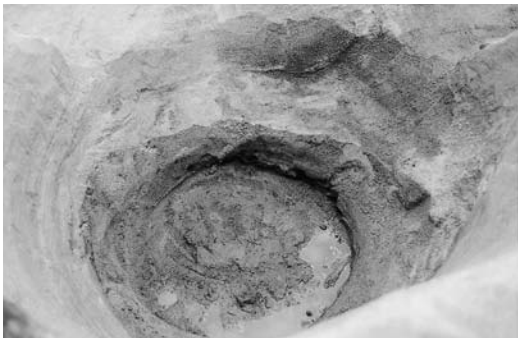
SK188（南東から）

SE176（北から）

SK190（北西から）

SK192（南西から）

SE176、SE243（北から）



SE187（北東から）

SE272（南東から）

SE243井筒（南東から）

SE224（北東から）

SF226床面出土遺物（南西から）

SF226床面出土遺物２（南西から）

SD179（北西から）

SD179土層（東から）

SK244（北東から）

Ⅲ区第1面全景（北東から）

SF342（北西から）

SF347（西から）

Ⅲ区第2面全景（北東から）

SK434（北から）

図版７

SK370礫出土状況（西から）

SK370完掘状況（西から）

SK346（北から）

SB01（北西から）

SK373　１面遺物出土状況（南から）

SK373　２面遺物出土状況（北から）

SK373土層（西から）

SK373完掘状況（北西から）

SE 495（北から）

SE 554（北から）

SK 494（北東から）

SK 507（西から）

SK 454（北西から）

SK 528 下面遺物出土状況（北東から）

SP 539（北東から）

SK 552（南東から）

図版９

Ⅳ区全景（北東から）

SE556（東から）

トレンチ１（西から）

トレンチ２（北から）

トレンチ３（東から）

SF15　出土土鍋

SF226　出土陶磁器

第31図-1

SK373　出土遺物

SK373　出土有棘銅線

SK104　墨書土師器（1）

SK104　墨書土師器（2）

SK171　出土土師器

SK178　出土土師器

SK188　出土土師器

SK177　出土土師器

遺物写真 1

第46図-1

第42図-18

第45図-40

青磁

白磁

第49図-4

その他陶磁器

象嵌青磁・粉青沙器

墨書土器

土製品

ミニチュア　磁器

遺物写真２

報　告　書　抄　録

ふりがな	はかた151
書名	博多151
副書名	博多遺跡群第197次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1269集
編著者名	井上繭子
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2015年３月25日
所収遺跡名	博多遺跡群第197次（はかたいせきぐん）
所在地	福岡市博多区綱場町（ふくおかしはかたくつなばちょう）
市町村コード	40132
遺跡番号コード	0121
北緯・東経	北緯　33°35′49″・東経130°24′23″
調査期間	20130819～20140212
調査面積	745㎡
調査原因	事務所ビル建築
種別	集落
主な時代	中世～近世（12世紀～17世紀）
主な遺構	土師器集積遺構・石積土坑・井戸・溝・土坑
主な遺物	土師器・国産陶磁器・輸入陶磁器・瓦・板碑・石塔
特記事項	墨書のある土師器坏を埋納した遺構が検出された。
要約	本調査地点は博多遺跡群の立地する砂丘のうち最も海寄りの息浜の南側に立地する。12世紀から17世紀を主体とする遺構や遺物が検出された。土師器の集積遺構や板碑、石塔、一石経が検出され、寺社との関連が伺える。また、近世の国産陶磁器も多数出土し、生活域としても発展をとげた。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1269集

博多１５１

－博多遺跡群第197次調査報告－

2015年（平成27年）3月25日

発　　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1

印　　刷　株式会社 親和プロセス
福岡県福岡市南区塩原1－4－4